

六地蔵A 遺跡・六地蔵B 遺跡  
高塚宅跡・東川遺跡

(付編) 平成5年度農業基盤整備事業地域立会調査遺跡

1994・3

三重県埋蔵文化財センター

## 序 文

日本の文化はある面では農耕文化ともいわれておりますが、稲作の伝来以来、二千数百年の間、ある年は自然の恵みを受けた大豊作であり、ある年は天候不順による大凶作でした。近世には何度かの大飢饉に見舞われたことは有名ですが、平成5年の日本の稲作は、近来希にみる日照不足と低温、長雨の冷夏で大打撃を受け、作況指数も全国平均74という戦後最悪の不作となりました。現代の機械化農業の時代になども、農業は今なお自然の影響を直接受ける産業であることを改めて認識させられた年でした。

歴史を省みれば日本の農業は、古くは古代の班田収受、豈臣秀吉の太閤検地、近世の新田開発等々、その時代時代の政治動向や経済政策に大きく左右されてきました。そして現代に至っては、農業の生産性向上と農業従事者の所得向上をめざして、農業構造の改善等を進めているところです。

平成5年度も三重県下各地で、農業基盤整備事業が実施されました。事業地内には数多くの埋蔵文化財が確認されたため、埋蔵文化財センターでは、その保護に努力してまいりました。しかし工事施工上、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査を実施し、その記録を保存することとなりました。

記録保存では現地の遺跡自体は消滅する訳ですが、調査によって得られた結果を報告することが私達の責務と考えております。調査の成果を公開することにより、文化財保護の重要性やその意義を広く県民に御理解いただくとともに、今後、三重県の歴史の解明の一助となることを切に願う次第です。

調査に当たりましては、県農林水産部農村整備課、同部耕地課および各農林事務所、各土地改良区、各市町村教育委員会をはじめ、地元の方々には暖かい御助力と多大な御協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

平成6年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

## 例　　言

1. 本書は、平成5年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、六地蔵A遺跡、六地蔵B遺跡、高塚宅跡、東川遺跡の調査結果を、第1分冊としてまとめたものである。なお、前言には平成5年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査全体にかかる調査経過を記載し、付録として立会調査遺跡の調査報告も収録した。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会の、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。
3. 調査および整理の体制は下記による。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化センター　　調査第一課
整理担当	三重県埋蔵文化センター　　調査第一課・管理指導課
4. 調査にあたっては、農林水産部農村整備課、同部耕地課、各農林事務所、各土地改良区、および地元の方々、各市町村教育委員会に御協力をいただいた。また、六地蔵A遺跡では青山町教育委員会の境宏氏に、東川遺跡では美杉村文化財専門員宮崎洋史氏に、それぞれ現地調査での参加、協力をいただいた。
5. 各遺跡の報文執筆は基本的に調査担当者に依るが、目次および文末にその氏名を記した。
6. 本書に用いた方位は、国土座標第VI系の座標北を用いた。
7. 本書で用いた遺構表示略記号は下記の通りである。

S B : 捜立柱建物	S K : 土坑	S E : 井戸	P : 柱穴、小穴
S H : 積穴住居	S A : 土壘、柱列	S D : 潟	S Z : その他
8. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化センターで保管している。
9. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

# 目 次

I. 前言.....	(河北秀実) .....	1
II. 六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡.....		7
1. 位置と環境.....	(船越重伸) .....	7
2. 六地蔵A遺跡.....		9
(1) A地区.....	(吉澤 良) .....	9
(2) B地区.....	(吉澤 良) .....	15
(3) C地区.....	(浜口 元) .....	17
(4) 結語.....	(吉澤 良) .....	18
3. 六地蔵B遺跡.....	(浜口 元) .....	18
III. 高塚宅跡.....	(吉澤 良) .....	27
1. 位置と歴史的環境.....		27
2. 現況と地形測量.....		29
3. 遺構.....		31
4. 遺物.....		34
5. 結語.....		35
IV. 東川遺跡.....		41
1. 位置と環境.....	(竹田憲治) .....	41
2. 遺構.....	(竹田憲治・石川隆郎) .....	44
3. 遺物.....	(竹田憲治) .....	51
4. 結語.....	(竹田憲治) .....	56
付編. 立会調査遺跡等.....		63
1. 久保遺跡.....	(浜口 元) .....	65
2. 金谷遺跡.....	(石川隆郎) .....	69
3. 大洞・風呂ノ谷・細野遺跡.....	(高崎 仁) .....	70
4. 下村五間田遺跡.....	(服部芳人) .....	71
5. 烏墓遺跡.....	(高崎 仁) .....	72
6. 向村遺跡.....	(小林 秀) .....	73
7. 城ノ前遺跡.....	(竹内英昭) .....	74
8. 山崎館跡.....	(石川隆郎) .....	76

## 図 版 目 次

II. 六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡	P L 10 S A 2断面.....	40
P L 1 六地蔵A遺跡A地区全景.....	出土遺物.....	40
六地蔵A遺跡A地区南半部.....		
P L 2 六地蔵A遺跡S H 9.....	IV. 東川遺跡	58
六地蔵A遺跡S B 7.....	A地区全景.....	58
P L 3 六地蔵A遺跡S E 3.....	B地区全景.....	58
六地蔵A遺跡S D 6 遺物出土状況.....	P L 11 S H 3 .....	59
P L 4 六地蔵A遺跡B地区北半部.....	S B 1 .....	59
六地蔵A遺跡B地区南半部.....	P L 12 C地区全景.....	60
P L 5 六地蔵A遺跡C地区全景.....	D地区全景.....	60
六地蔵B遺跡全景.....	P L 13 F地区全景.....	61
P L 6 六地蔵A遺跡出土遺物.....	S B 1 8 .....	61
II. 高塚宅跡	P L 14 出土遺物.....	62
P L 7 調査前風景.....	付編. 立会調査遺跡等	
調査区全景.....	1. 久保遺跡	
P L 8 調査区東半部.....	P L 16 S K14-22・10-19、S X11、S D15.....	68
調査区東半部.....	出土遺物.....	68
P L 9 S A 1 .....	7. 城ノ前遺跡	
S A 1断面.....	P L 17 調査地全景 .....	76

## 挿 図 目 次

I. 前言		
第1図 平成5年度調査遺跡位置図	3	
II. 六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡		
1. 位置と環境		
第2図 遺跡位置図	7	
第3図 遺跡地形図	8	
第4図 調査区位置図	9	
2. 六地蔵A遺跡		
第5図 A地区発掘区土層断面図・遺構平面図	10	
第6図 SH 9・SB 7実測図	11	
第7図 SE 3・SZ 8・10実測図、SD 6遺物出土状況図	12	
第8図 A地区出土遺物実測図	13	
第9図 B地区発掘区土層断面図・遺構平面図・出土遺物実測図	14	
第10図 C地区発掘区土層断面図・遺構平面図	15	
第11図 C地区出土遺物実測図	16	
3. 六地蔵B遺跡		
第12図 遺構平面図・発掘区土層断面図	17	
第13図 出土遺物実測図	18	
III. 高塚宅跡		
第14図 遺跡位置図	27	
第15図 遺跡地形図	28	
第16図 調査区位置図	29	
第17図 調査前測量図	30	
第18図 調査区南北土層断面図	31	
第19図 調査区東西土層断面図	32	
第20図 調査区断面図・平面図・SB 5・SD 11実測図	33	
第21図 出土遺物実測図	34	
IV. 東川遺跡		
第22図 遺跡位置図	41	
第23図 遺跡地形図	43	
第24図 調査区位置図	43	
第25図 A地区平面図・土層断面図	44	
第26図 B地区平面図・土層断面図	45	
第27図 SH 3実測図	46	
第28図 SH 3平面図・土層断面図	46	
第29図 SB 9実測図	46	
第30図 SB 1実測図	46	
第31図 SB 2実測図	46	
第32図 C・D・E地区平面図	47	
第33図 C・D・E地区土層断面図	48	
第34図 E・F・G地区平面図	49	
第35図 F地区土層断面図	50	
第36図 G地区土層断面図	50	
第37図 S B 18実測図	50	
第38図 A・B地区出土遺物実測図	51	
第39図 C・D地区出土遺物実測図	52	
第40図 F地区等出土遺物実測図	53	
付編 立会調査遺跡等		
1. 久保遺跡		
第41図 遺跡位置図	65	
第42図 調査区位置図	65	
第43図 遺構区平面図・土層断面図	66	
第44図 S X 11遺物出土状況図	66	
第45図 出土遺物実測図	67	
2. 金谷遺跡		
第46図 遺跡地形図	69	
第47図 調査区位置図	69	
第48図 遺構平面図・出土遺物実測図	69	
3. 大洞・風呂ノ谷・細野遺跡		
第49図 遺跡位置図	70	
第50図 出土遺物実測図	70	
第51図 遺跡地形図	70	
4. 下村五間田遺跡		
第52図 遺跡位置図・遺跡地形図	71	
第53図 調査区位置図	71	
5. 鳥墓遺跡		
第54図 遺跡位置図	72	
第55図 調査区位置図	72	
6. 向村遺跡		
第56図 遺跡位置図	73	
第57図 調査区位置図	73	
7. 城ノ前遺跡		
第58図 周辺遺跡分布図	74	
第59図 調査区略測図	75	
第61図 出土遺物実測図	75	
第62図 遺跡位置図	75	
8. 山崎館跡		
第63図 遺跡位置図	76	
第64図 遺跡地形図	76	
第65図 調査区位置図	76	

## 表 目 次

I. 前言		
第1 - 1表 平成5年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表（1）	4	
第1 - 2表 平成5年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表（2）	5	
第2表 本調査遺跡一覧表	6	
第3表 立会調査遺跡一覧表	6	

II. 六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡		
第4表 六地蔵A遺跡A地区出土遺物一覧表	14	
第5表 六地蔵A遺跡B地区出土遺物一覧表	15	
IV. 東川遺跡		
第6 - 1表 出土遺物観察表（1）	55	
第6 - 2表 出土遺物観察表（2）	56	
第7表 東川遺跡中世土器構成表	57	

# I. 前 言

## 1. 調査に至る経過

三重県教育委員会では、県の開発関係各課に対して、例年夏に翌年度の各種公共事業計画について事業照会を行い、開発事業地域内の埋蔵文化財の確認とその保護に努めている。

平成5年度各種公共事業計画についても、事業照会は平成4年8月に行われた。このうち農林水産部関係については農村整備課、耕地課等関係各課から回答がよせられた。

## 2. 分布調査

この回答に基づき、三重県埋蔵文化財センターでは、早々に事業予定地内における遺跡の有無の確認作業に入り、遺跡台帳との照合による周知の遺跡の確認と現地での分布調査を実施した。その結果、一

部前年度試掘済みの遺跡を含めて事業予定地内には65ヶ所、1,171,150m<sup>2</sup>の範囲が、遺物散布地等の遺跡またはその可能性があることが判明した。そして平成4年12月には、この結果を関係各課に報告した。

## 3. 試掘調査と協議

埋蔵文化財センターは関係各農林事務所と今後の取り扱いについて、試掘調査の日程を含めて協議、調整を行った。試掘調査は平成4年12月から同5年1月にかけて行われたが、その結果17遺跡、約89,370m<sup>2</sup>の範囲が遺跡である事が判明した。この結果をもとに各農林事務所で、遺跡を保護するために盛土対応等の工事設計の変更を行った。

平成5年3月に教育委員会文化振興課、埋蔵文化

財センター、農村整備課、耕地課、県下各農林事務所の五者で、各遺跡の対応について設計変更後の協議を行った。更に今一度設計変更を要請した遺跡もあったが、設計変更をしても現状保存が困難な遺跡については、発掘調査を行うこととなった。

この時点では、本調査は10遺跡、22,200m<sup>2</sup>、立会調査は8遺跡、6,100m<sup>2</sup>で、合計は18遺跡、28,300m<sup>2</sup>を調査することで合意した。

## 4. 本調査および立会調査

本調査は北野遺跡、東川遺跡、伊賀国府跡の3遺跡で、5月初旬に現場作業を開始し、6月には麥刈りを待って、六地蔵A遺跡A・B地区の調査を開始した。5、6月は好天に恵まれ、各現場とも順調に調査が進められ、遺構、遺物とも比較的希薄であった東川遺跡は5月中旬には調査が終了した。

しかし7月からは季節はずれの降雨続きとなり、さらに8月には台風の襲来も重なり、各現場とも調査は大幅に遅れた。とりわけ伊賀国府跡の航空測量は、たび重なる悪天候で予定より1月遅れで実施さ

れた。

伊賀国府跡の範囲確認調査は、昭和63年度から継続して進められてきたが、今年度は最終年度に当たり、政庁域の範囲確認調査を目的として実施した。その結果、政庁域の北西隅と北東隅、南限と南門を確認し、その範囲は約50m方格であることが判明した。また「國厨」の墨書き器も出土し、遺物からも国厨を裏付ける資料を得ることができた。伊賀国府跡については、8月5日と翌平成6年1月21日に指導委員会を行い、その後の協議の結果、国史跡指定

への方向性が示された。

六地蔵A遺跡A・B地区は8月に、伊賀国府跡は9月にそれぞれ調査が終了した。

さて前半の北野遺跡の調査が続くなまで、9月には大里西沖遺跡、高塚宅跡、10月には六地蔵B遺跡、11月には六地蔵A遺跡C地区も発掘調査を開始した。なお、農道建設に伴う高塚宅跡の調査は年度当初の予定にはなかったものであるが、当該地域一帯の県営は場整備事業を含めた農業基盤整備事業の関係から、何處かの調整協議の末、急遽本年度事業となつたものである。

六地蔵B遺跡は10月に、六地蔵A遺跡C地区は11月にそれぞれ終わることができた。大里西沖遺跡は古墳や古墳時代の墓壙等が検出され、6世紀代の埴輪や馬具等の遺物が多数出土した。北野遺跡は、平成2年度からの継続調査であり、今年度は8,500m<sup>2</sup>を対象に行った。その結果、飛鳥から奈良時代の土器焼成坑64基、弥生から古墳時代の竪穴住居85棟、弥生から奈良時代の掘立柱建物9棟を検出した。北野遺跡での三次にわたる調査で検出された土器焼成坑は計186基で、日本最大級の土器焼成坑群遺跡と

なった。大里西沖遺跡、北野遺跡ともに現地での調査は1月に終了した。

一方この間、9月から翌2月にかけて久保遺跡をはじめ県下各地で立会調査を行った。

なお当初予定にあった県営は場整備事業の塔ノ元遺跡（上野市）は事業中止により、本調査の必要がなくなった。また県営は場整備事業の宇原野遺跡（御浜町）、農道の宮ノ後遺跡（名張市）、上小波田遺跡（名張市）、公害防除事業の垣内遺跡（北勢町）については、試掘調査の結果、事業地内に限っては、遺跡ではないと判断し、本調査または立会調査の必要はなくなった。また試掘調査後、協議としていた農道の堂殿遺跡、峰城跡（亀山市）も試掘調査を行った結果、工事可となった。

結局、平成5年度の農林水産部の開発事業にかかる発掘調査は、本調査が7遺跡、16,700m<sup>2</sup>、立会調査が10遺跡、3,340m<sup>2</sup>で、合計17遺跡、20,040m<sup>2</sup>となつた。こうしてすべての遺跡の現場調査が終了したのは平成6年の2月であり、そしてその頃には既に6年度事業にかかる分布調査や試掘調査を行っている時期であった。

## 5. 普及・公開

各現場の発掘調査が終了した時点で、その成果を広く一般県民に公開する目的で現地説明会を行っている。本年度は8月に伊賀国府跡で、1月に大里西

沖遺跡と北野遺跡でそれぞれ行った。各説明会とともに、県内はもとより愛知県を始め県外からも多数の考古学ファンが詰めかけ、大盛況であった。

## 6. 今後の課題

### (1) 作業員の確保

農林水産部の開発事業に伴う発掘調査では、開発部局が当該地区と折衝して、地元に在住する人に作業員として、発掘調査に参加していただく方法を探っている。しかし本年度は各現場とも作業員が非常に少なかった。

かつて好景気の頃、「働き口はいくらでもある。今時、低賃金では作業員は集まらない。」とよく言われたものである。しかし、平成大不況と呼ばれる長期の不景気となった今日でもやはり、作業員は集まらない。三重県では各地域とともに専業農家はほとん

ど皆無に近い。個々の農家でも働ける人は他に職を持つており、作業員として参加する人の多くは、男女を問わず、無職の高齢者が実情である。すなわち景気変動に伴う失業率には関係なく、作業員は本来的に労働力人口に含まれない人達によって構成されていることを物語っているのである。また農業関連の開発事業が年々山間部へ入る傾向にあり、土地改良区の範囲での人口そのものが少ない故、作業員も少ないとその一因と考えられる。

ともあれ、来年度以降も作業員の確保は益々深刻

な問題となっていくことが予想される。

#### (2) 整理・報告書作成の期間

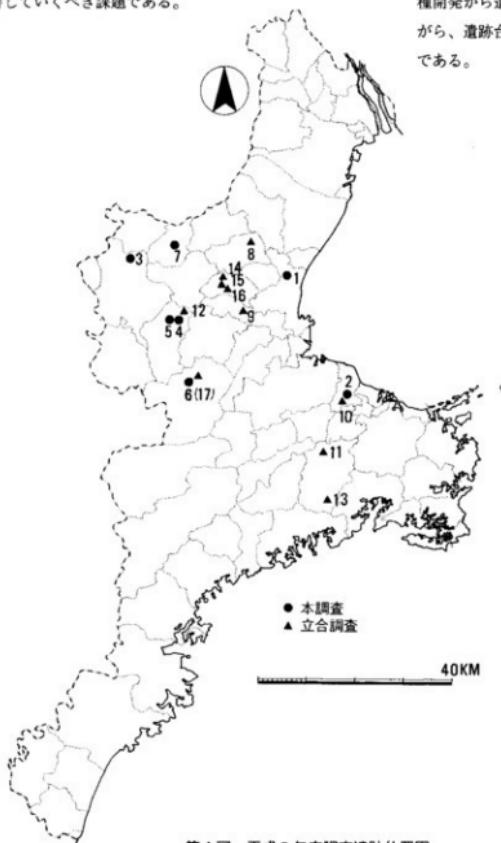
本調査および立会調査終了後は、当然整理および報告書作成に専念すべき期間である。しかし現状は翌年度事業に伴う分布調査や試掘調査を行う時期と重なってしまい、到底専念できない状況にある。埋蔵文化財センター発足以来、遺物の整理体制は整いつつあるのだが、肝心の報告書執筆者である現場担当者が十分な時間がないままに報告書作成業務に取りかからざるをえない状況が、慢性化しつつある。整理および報告書作成の時間確保については、今後改善していくべき課題である。

#### (3) 遺跡台帳の整備

農林水産部の開発事業のうちでは、県営は場整備事業が多くの面積を占めており、遺跡は、調整・協議の結果本調査には至らず、盛土保存となるケースがほとんどである。しかし、は場整備等はその事業の性格上、現地地形が大きく改変されることが多く、事業終了後の現地では、地形判断を含めた遺跡の範囲を確認する事は困難となってきた。

埋蔵文化財センターでは、盛土保存となった遺跡については、遺跡台帳に試掘調査結果を記載し、遺跡の現状を把握している。そして急ピッチで進む各種開発から遺跡を保護すべく、市町村の協力を得ながら、遺跡台帳の整備に銳意取り組んでいるところである。

(河北 秀実)



第1図 平成5年度調査遺跡位置図

事務所名	事業名	地区名	遺跡名	所在地	事業地内分布面積 (㎡)	試験調査結果等		本調査 (*立会 調査) 面積 (㎡)	対応等
						遺跡面積 (㎡)	概要		
委 名 典 政	江場整備	喜原中部	—	貝合郡喜原町山口	—				
	+	上之輪	—	桑名市上之輪	—				
	佐藤整備	梅戸舟	大久上遺跡	貝合郡大安町梅戸舟	50,000	—	遺構、遺物なし。		工事可。
	公告跡駆除	北勢	道内遺跡	+ 北勢町一之坂	150,000	—	遺構希薄。土器少量。		工事可。
	+	藤原	—	藤原町坂本	—				
	江場整備	芦川沿岸	—	鶴見市西富田町	—				
四 日 市 市 農 林	+	芦川用	—	龜山市用合町	—				
	広城典道	北勢南部	堂殿遺跡	+ 川崎町	5,000	—	遺構希薄。遺物なし。		工事可。
	+	峰城跡	—	—	500	—	遺構、遺物なし。		工事可。次年度分以降は要試掘。
	+	西尾上遺跡	—	逆法令町西尾上	1,500				要試掘。事業次年度以降。
	+	青鉢跡	—	川崎町	—	—	遺構、遺物なし。		工事可。
	+	六名山西古墳群	—	四日市市六名町山西	—				工事可。追跡範囲は事業地外。
津 農 林	江場整備	大里	前田遺跡	津市大里山田町	17,000	—	遺構希薄。土器少量。		工事可。
	+	吉川遺跡	—	+ 大里保田町	21,000	—	遺構なし。土器少量。		工事可。
	+	—	—	—	—	—	遺構、遺物なし。自然地形。		工事可。
	+	大里山西冲縄跡	—	大里駒合町	48,000	10,500		2,000	本調査。1H年度試掘。 H4年度2,100m <sup>2</sup> 調査。
	+	貴濃北部	椎山遺跡	安芸郡贵濃町根本	205,000	—	遺構希薄。土器少量。		工事可。
	+	金谷遺跡	—	—	4,000	4,000	H世～近世の沼落込み。	*250	立会調査。H3年度試掘。
水 農 林	磯原	下村山岡田遺跡	久居市磯原町	25,200	4,800	土坑、小穴。		*100	立会調査。久居市教委試掘。
	河井北部	—	安芸郡河井町	—					
	+	美里中南部	大尻遺跡	+ 美里北長野	—	2,800	土坑。土器器、陶器。	*290	立会調査。H5年度途中追加。 旧作集落ノ谷遺跡。
	+	風呂ノ谷遺跡	—	—	16,000	2,400	溝。土坑器、陶器。	*120	立会調査。H5年度途中追加。 旧作集落ノ谷遺跡。
	+	細野遺跡	—	—		1,700	土坑、小穴。土器器。	*140	立会調査。H5年度途中追加。 旧作集落ノ谷遺跡。
	者復整備	一志	宮崎遺跡	一志郡美杉村中太郎生	16,000	—	遺構なし。土器少量。		工事可。
滋 農 林	+	—	—	+ + 志野	—				
	+	東川遺跡	—	+ 八知	12,200	6,100	坑、柱穴等。古墳、中世の土器群。	1,000	立会および本調査。 旧称小松遺跡。
	鳥居農道	津北部二期	豊野遺跡	津市・身田町豊野					概然遺跡中、要試掘。
	+	魯野古墳	—	—					継続調査中、要試掘。
	渓水防除	津	納所遺跡	納所町	1,000	1,000			立会調査。事業通り。
	江場整備	御田	背生遺跡	松阪市背生町	120,000				要試掘。条生遺跡。
松 農 林	+	惟代	—	+ 高木町	—				
	+	御殿	安田遺跡	+ 六根町	22,000	—	遺構なし。		松阪市教委試掘済。
	+	大久保遺跡	—	—	10,000				要試掘、事業送り。
	+	明星	北野遺跡	多気郡明星町春森	—	18,400		8,500	本調査。H4年度試掘。H2年度策 3,500m <sup>2</sup> 、H4年度7,500m <sup>2</sup> 開発。
	+	鳥屋遺跡	—	—	7,500	2,900	土坑、溝、柱穴。中世の土器器等。	*100	立会調査。
	+	五反田遺跡	—	—	5,000	—			新試掘、事業次年度送り。
岐 農 林	+	角知内遺跡	—	—	7,000	—			要試掘、事業次年度送り。
	者復整備	多気・勢和	草川遺跡	+ 勝相村草川	4,200	750	柱穴。中世の土器器、陶器器。		底土対応。
	+	児ノ前遺跡	—	多気町牧	9,400	700	土坑。中世の土器器、陶器器。		事業次年度送り。
	+	門坂遺跡	—	—	7,700	800	石列。中世の土器器。		事業次年度送り。
	+	鷺手遺跡	—	—	18,000	—	遺構なし。土器少量。		工事可。

第1-1表 平成5年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表（1）

事務所名	事業名	地区名	遺跡名	所在地	事業地内 分布面積 (m <sup>2</sup> )	試 検 測 実 結 果 等	本調査 (★は合 議事)	対 応 等	
						遮蔽面積 (a)	概 要		
伊 勢 鳥 島 林	ほ場整備	中川	田口八瀬跡	度会郡度会町田口	14,000				要試掘。事業次年度送り。
	*	*	田口日置跡	+	12,900	-			要試掘。事業次年度送り。
	*	*	田原遺跡	+	立花	9,600	-		工事可。
	*	*	舟村遺跡	+	+	12,000	6,500	土坑、梅文土器、近世陶器。	*600 立会調査
	*	*	山崎遺跡	+	+	11,000	-	自然底水路。遺物少量。	工事可。
	*	-之郷	城ノ下遺跡	+	井野	-			*90 立会調査。H3年度試掘。
水 道 施 設	伊勢北部	-	伊勢市有鹿町	-					
	*	*	樺山遺跡	樺山町	15,000	-	遮蔽希薄。土器少量。		工事可。
	*	*	磯部古墳群	志摩郡磯部町	-				
	森原整備	鳥羽	-	鳥羽市	-				
港 湾 開 発	浜松港	舟越港	大瀬遺跡	+	若志島	1,000			要試掘。事業次年度送り。
	*	*	舟越八瀬跡	-	2,000				要試掘。事業次年度送り。
上 野 農 業	ほ場整備	愛田	-	阿山郡伊賀町					
	*	上野北部	伊賀府跡	上野市板之下	90,000				1,800 本調査。S5年度から継続調査。
	*	*	西条遺跡	西条	5,600	-	遮蔽なし。土器少量。		工事可。
	*	*	塔ノ元遺跡	+	+	18,000	18,000	廻、柱穴、古墳・中世の土器等。	事業中止。
	*	*	山寺遺跡	山寺	8,000	-	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	*	上津	楠木遺跡	名張郡青垣町下川原					盛土好む。
	*	*	六鬼山古墳跡	+	+	5,500	石器半片、中世の土器等、瓦等。		
	*	*	六地日古墳跡	+	+	6,000	柱穴、奈良以降の土器等、根思器。	1,500 本調査。	
	*	*	久保遺跡	+	+	2,900	土坑、柱穴、弥生土器、土器等。	400 本調査。	
	*	城之原	大平遺跡	名張市淀之原					*150 立会調査。
林	*	*	谷知内遺跡	+	+	3,100	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	*	*	中出遺跡	+	+	-	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	*	*	深ヶ瀬跡	+	+	1,000	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	広域農道	伊賀	西高野B遺跡	上野市西高野	50	-			工事可。自然地形を利用。
	*	伊賀2期	宮ノ下遺跡	名張市西原	1,200	-	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	*	*	上小畠田遺跡	上小畠田	1,500	-	遮蔽なし。土器少量。		工事可。
林	擅見	重富氏跡	上野市擅見		8,000	-			設村愛好協議中。
	*	*	荒尾大船跡	+	2,400				設計変更協議中。
	*	*	中川氏跡	+	5,000				設計変更協議中。
	*	*	古墳	+	300				設計変更協議中。
	*	伊賀3期	高塚宅跡	阿山郡伊賀町愛田	1,500				1,500 本調査。H5年度是中追加。
	農免整備	大山田4期	-	+	大山田村下阿瀬	-			
地すべり	宿中2期	奥知氏跡	上野市山神		200	-	遮蔽、遺物なし。		工事可。
	*	*	宇原野遺跡	南牟婁郡御浜町下木本	27,000	-	遮蔽希薄。遺物なし。		工事可。
熊 野 農 業 林	*	*	大久保遺跡	+	17,000				盛土好む。
	小人跡	下吉木	-	+	-				
	畜環整備	紀南	-	鰐野市飛鳥町	-				
農 地 保 全	農地保全	有馬	-	有馬町	-				
	計	65遺跡			1,171,150	96,270			16,200 *3,346

第1-2表 平成5年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表(2)

事業	番号	遺跡名	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	期間	担当者	調査概要	備考
県営	1	大星西沖跡	津市大里聯合町	2,000	H5.9.27 ~6.1.24	石川隆郎 船越重伸 山口順也	縄文時代前期の整穴住居。古墳時代の土壙墓群。埴輪、馬具、和同開敷等出土。	H6.1.22現地説明会開催、120名参加。
は	2	北野遺跡	多気郡明和町明星・袁村	8,500	H5.5.10 ~6.1.31	上村安生 浜口 元 竹田憲治 吉田利弘	弥生~奈良時代の整穴住居85棟、奈良時代の土師器焼成坑64基を検出。	H6.1.23現地説明会開催、150名参加。
場	3	伊賀	上野市坂ノ下・外山	1,800	H5.5.6~9.27	竹内英昭 稻森 剛	行政区の範囲を確認。南門を検出。「極府」の墨書き土器。	H5.8.8現地説明会開催、130名参加。
整備	4	六地蔵A遺跡	名賀郡青山町大字下川原字六地蔵	1,500	H5.6.28 ~8.30 H5.11.5~11.12	吉澤 良 船越重伸 浜口 元 小林 秀	中世の集落跡。井戸、獨立柱建物。土師器、陶器出土。	
業	5	六地蔵B遺跡	名賀郡青山町大字下川原字六地蔵	400	H5.10.12~25	浜口 元 小林 秀	中世の集落跡。獨立柱建物。土師器、瓦器出土。	1,000m <sup>2</sup> から変更。
畜	6	東川遺跡	一志郡美杉村大字八知字東川・白樺	1,000	H5.5.6~17	竹田憲治 石川隆郎	奈良~平安時代の集落跡。孤立立柱建物。黒色土器等出土。	旧称小松遺跡。立会1,500m <sup>2</sup> 。
農	7	高塚宅跡	阿山郡伊賀町大字愛田	1,500	H5.9.24 ~H6.1.7	吉澤 良 稻森 剛	16~17世紀の城跡。獨立柱建物、土壙検出。	H5年度途中追加。
計			7件	16,700				

第2表 本調査遺跡一覧

事業	番号	遺跡名	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	期間	担当者	調査概要	備考
県営	8	金谷遺跡	安芸郡芸濃町大字鏡本字金谷	250	H5.9.6~13	石川隆郎	ピット。河道。土器少量。	
は	9	下村五箇田遺跡	久居市櫛原町字五箇田	100	H5.11.5	服部芳人	遺構なし。遺物少量。	
場	10	鳥墓遺跡	多気郡明和町袁村	100	H5.12.6	高崎 仁	遺構・遺物なし。	
整備	11	向村遺跡	度会郡度会町立花	600	H5.9.13	小林 秀	遺構なし。遺物少量。	1,000m <sup>2</sup> から変更。
事業	12	久保遺跡	名賀郡青山町大字下川原	150	H5.10.18~11.1	浜口 元 小林 秀	中世の集落跡。土師器、瓦器出土。	
畜	13	城ノ原遺跡	度会郡度会町和井野	90	H5.10.15	竹内英昭	最近の盛土。混入遺物少量。	H5年度途中追加。
環	14	大洞遺跡	安芸郡美里村大字北長野字大洞	290	H6.2.2~7	高崎 仁	遺構なし。遺物少量。	H5年度途中追加。 旧称風呂ノ谷遺跡。
事	15	風呂ノ谷遺跡	安芸郡美里村大字北長野字風呂ノ谷	120	H6.2.2~7	高崎 仁	遺構なし。遺物少量。	H5年度途中追加。
業	16	相野遺跡	安芸郡美里村大字北長野字相野	140	H6.2.2~7	高崎 仁	遺構・遺物なし。	H5年度途中追加。 旧称風呂ノ谷遺跡。
計	17	東川遺跡	一志郡美杉村大字八知字東川・白樺	1,500	H5.10.6 ~24	竹田憲治	中世の集落跡。獨立柱建物。土師器、瓦器、鐵製品出土。	旧称小松遺跡。 本調査 1,000m <sup>2</sup> 。
			10件	3,340				

第3表 立会調査遺跡一覧表

## II. 名賀郡青山町 六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡

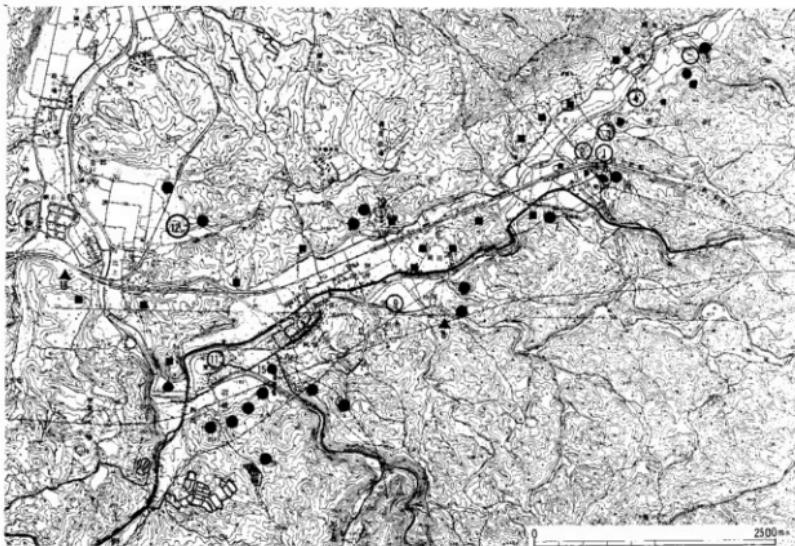
### 1. 位置と歴史的環境

名賀郡青山町は、三重県西部の上野盆地東南端に位置し、東は布引山脈を介して一志郡白山町および美杉村に、西は山岳部を挟んで名張市、北は上野市および阿山郡大山田村に接する。六地蔵A遺跡(1)・六地蔵B遺跡(2)は、名賀郡青山町伊勢路字六地蔵に所在する。両遺跡は両側を低い山に挟まれており、その一端を流れる見合谷川により形成された扇状地に立地し、標高は229~230mである。この川は当遺跡の北側を北流し木津川に注いでいる。町内の中小河川は、北部を流れる一級河川「木津川」に合流し、淀川となって大阪湾へと注ぐ。この木津川流域では、縄文時代の遺跡が多く、伊賀地方でも数多くの遺跡

が確認されている<sup>①</sup>。

青山町の縄文時代遺跡は、ナメリ石谷遺跡<sup>②</sup>で縄文土器片が発見されたのを契機とし、布引開拓地遺跡・羽根中島遺跡(11)・種生八王子社遺跡<sup>③</sup>・勝地大坪遺跡(5)の5遺跡で確認されている。布引開拓地遺跡では、サヌカイト製石匙や石鎌などが、勝地大坪遺跡では獸の陥し穴などが確認されており、木津川沿いに人や物の流入があったことがうかがわれる。

弥生時代の遺跡は、木津川沿いの平地部(別府遺跡・羽根中島遺跡(11)・柏尾湯船遺跡(8)・寺脇遺跡<sup>④</sup>)で確認され、後期のものが多い。柏尾湯船遺跡からは、総高107.5cmの突線紐式銅鐸<sup>⑤</sup>が出土している。



第2図 遺跡位置図 (1:50,000) (※国土地理院「伊勢路・阿保」1:25,000より)

1. 六地蔵A 2. 六地蔵B 3. 久保 4. 川南A 5. 勝地大坪 6. 六地蔵 7. 赤井谷 8. 柏尾湯船 9. 別府宮ノ谷 10. 安田中世墓  
■…中世城館 ●…古墳 ○…その他の遺跡 11. 羽根中島 12. 城ノ越 13. 北土 14. 東桜寺跡 15. 伝承息使塚 16. 奥ノ谷  
▲…銅鐸出土地 ●…古墳群

この他に伊賀地方では上野市千歳、同比土(13)、名張市黒田等でも銅鏡が出土している。

青山町地内でも多くの古墳が確認されているが、前・中期の古墳は確認されていない。これは、上野市(石山古墳・荒木車塚古墳・御墓山古墳など)や名張市(美旗古墳群)に前・中期の大型古墳が出現していることを考慮すれば、これらの勢力下に置かれていたとの想定ができる。現在確認されている古墳は、丘陵を利用した横穴式石室を持つ後期古墳が大部分である。当遺跡付近の近鉄線南側には六地蔵古墳群(6)が所在する。

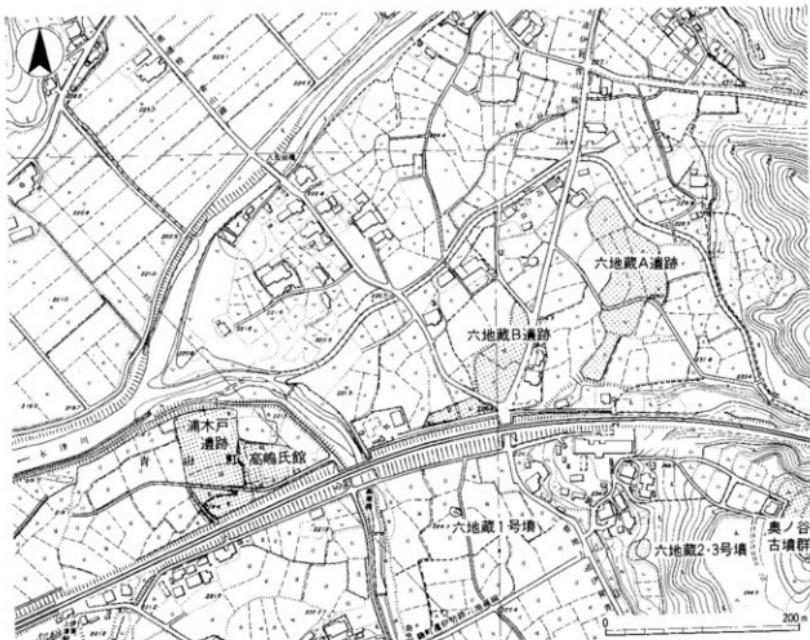
律令時代の明確な遺構は少ない(川南A遺跡(4)<sup>9</sup>・別府官ノ谷遺跡(9)<sup>9</sup>・塚原遺跡<sup>9</sup>)。しかし、この地が畿内と伊勢、東国を結ぶ交通の要衝に位置していたことは、「日本書紀」・「統日本紀」にみえる持統・聖武天皇の伊勢行幸、「江家次第」の「斎王帰京次第」<sup>9</sup>にみえる斎王群行などに際して「領宮」

が營まれたと伝えられることによってもわかる。

中世にはいると遺跡確認数が増加する。この時期には、在地の有力者が台頭し防衛施設を持つ小規模な城館が多く築かれる。現在確認されている城館跡は47所にものぼり、青山町の遺跡確認数全体の約25%を占めている。当遺跡の周辺には、高鍋氏館、城氏城、宮下砦などが所在する。

この地方には、数多くの中世城館とともに、寺院も数多くあったことを『三国地志』<sup>9</sup>は伝えている。当遺跡付近には「東禅寺跡」(14)が所在している。地元住民からの聞き取りによれば、今回調査した付近には、「チョウケン寺」・「トウレン寺」と呼ばれる寺院もあり、「チョウケン寺」は調査区に近接してあったと伝えられている。また、見合谷川右岸には「界外」という小字があることから、この地域に東禅寺以外にも寺院があった可能性が高い。

(船越重伸)



第3図 遺跡地形図と周辺遺跡 (1:5,000)

## 2. 六地蔵A遺跡

当該地域は平成5年度の県営は場整備事業に伴つて分布調査や試掘調査を実施し、その結果事業地内に6,000m<sup>2</sup>にわたり遺跡が広がっていることが判明した。そのため、事業により削平をうける1,500m<sup>2</sup>について本調査をおこなうことになった。

調査はA、B、C地区に分けて実施した。調査区は、面的に2ヶ所、排水路予定箇所を線的に1ヶ所設定した。

### (1) A地区

#### ①土層

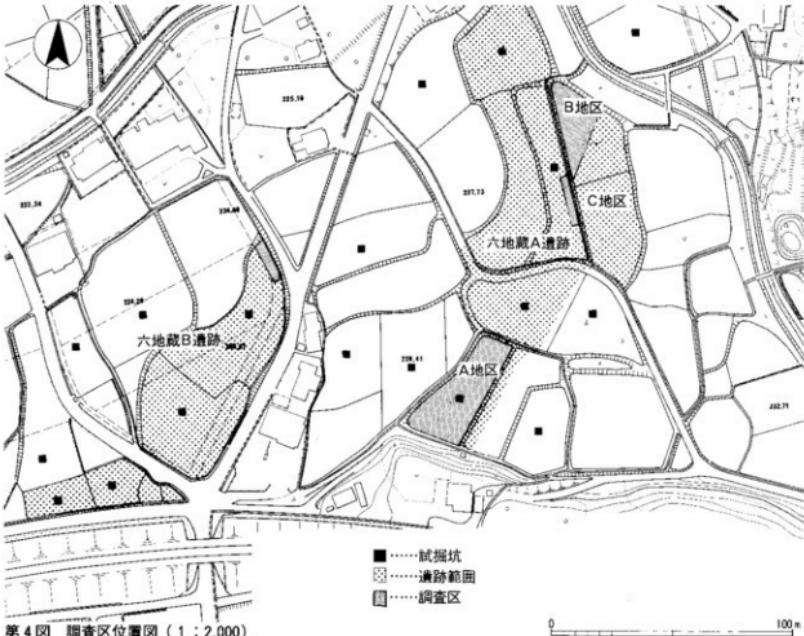
A地区の標高は約300mで、ほぼ東から西に向かう緩斜面上にあり、現水田の西隣は1m程の段差をもつ。地形は東から西に向かって緩やかな傾斜をもち、その比高は端部で0.7mである。西側では段状に落ち込む。そのため、西側は田面まで1.0m程暗灰

色土が堆積していた。西隣の田は調査区の水田より約1.3m低いことから、自然地形も調査区内で一段低くなっていたことがわかった。東側は逆に削り取られており、遺構の削平があったと考えられた。

土層の基本層序は東側を基本として第1層=耕土、第2層=灰色土、第3層=淡黄灰色砂質土であり、遺構検出面は第3層上面とした。なお第3層は調査区の中央付近から南へは淡黄色の砂質土に変わった。出土した遺物の多くは西側の整地土の層から出土した。

#### ②遺構

(ア) 旧河道 調査区南側で検出した河道である。南側では、黒褐色の腐植土層が広がっており、トレーナーを入れて土層を確認したところ、地山はなだらかに落ち込んでいた。底の青灰色砂層につながっていた。その直上は黒褐色の腐植土層になり、多くの



第4図 調査区位置図 (1:2,000)

植物混じり（木片、葉）の粘質土になった。この植物混じりの土層は深いところで1.2mに達し、反対側の丘陵にまで広がっていた。また、トレンチ1や4により、東から北西方向へ緩やかに湾曲していることもわかった。この腐植土層は、旧河道に堆積したものである。

11=青灰褐色泥炭  
(紗土)

12=暗灰褐色砂質土

13=黒褐色粘質土

14=黒褐色粘質土  
(植物混じり)

15=黒褐色粘質土  
(植物混じり)

16=灰色砂質土

17=淡灰褐色土  
(砂礫混じり)

18=暗灰褐色砂質土

19=灰色砂質土

20=黒褐色砂質土

21=砂礫土(淡灰褐色)

灰色・明黄色)

穴を検出したが主柱穴、貯蔵穴等ではなかった。東側の中央部に東西に1.1m、南北に0.9mの不定形な竈の痕跡を検出した。全体は被熱のために焼土化しており、土師器の窯片が出土した。竈にともなう煙道や支柱等は確認できなかった。竈の東端中央の小穴は、後世に切り込まれたものである。なお、出土遺物から奈良時代と思われる。

#### (ウ) 挖立柱建物

SB7 調査区のほぼ中央部東寄りに位置し、東西を棟方向とする桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。棟方向はE-34°-Sである。柱間間隔は桁行が2.25m+2.1m+2.25mと中央の柱間が狭い。梁行は、2.4m等間で、桁行間隔より梁行間隔のほうが長い。柱穴の直径は20~35cmと幅をもつ。また、南西隅の柱穴は検出できなかった。調査区の東へも延びる可能性を想定して試掘坑をいたが、柱穴は認められなかつた。柱穴からは少量の土師器が出土したが、時期を比定できる明瞭な遺物はなかつた。

#### (エ) 柱列

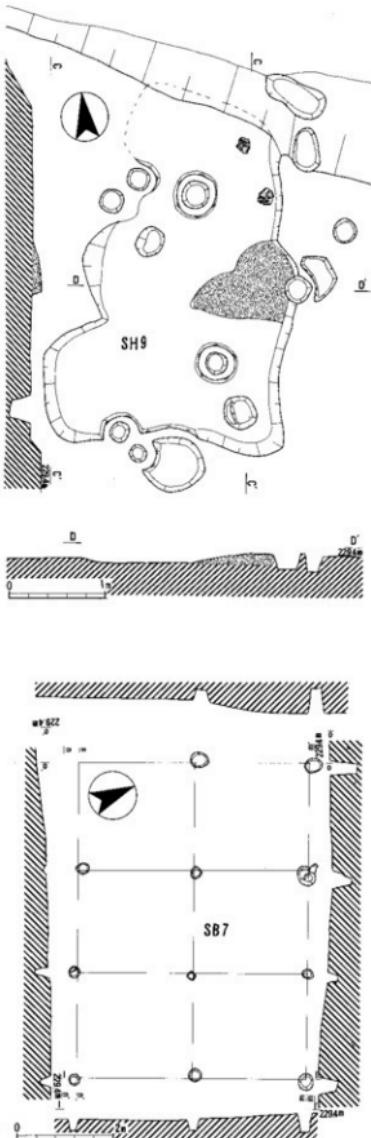
SA12 調査区南側に位置し、南北方向に2間、柱間間隔2.2m等間の柱列である。柱穴の直径は30~50cmで、二つの柱穴に柱の基部が残っていた。柱痕は樹皮を剥がさず自然木の状態で使用されており、樹種は松である。

#### (オ) 井戸

SE3 調査区南東隅に位置する円形の石組み井戸である。掘形の直径1.8m程、内法は0.8~1m、検出面からの深さ約50cmである。石は20cm位の人頭大の河原石を3段から4段積み、隙間に拳大の石を詰めている。井戸の埋土は暗灰色粘質土であり、少量の土師器片が出土した。井戸は、検出後も水が湧きだすことから湧水点が高いと考えられた。そのため、井戸の上部が削平を受けていたとしても、井戸本来の深さは、当初から浅い造りであったと思われる。

#### (カ) 溝

SD6 調査区のやや南側を北西方向へ向かって延びる溝である。幅は0.75m、深さは10~15cmでは同じ幅で直線的に調査区を横断する。北端付近で扇状に開き、北方向へ延びると考えられた。その溝が扇状に開く部位に枕が、数本打ち込まれている。



第6図 SH9(1:50)・SB7(1:100)実測図

埋土は暗青灰色土でSZ8・10と同じであった。SD 6 のH-H'地点で、土器の皿(9)と鍋(23)が出土した。

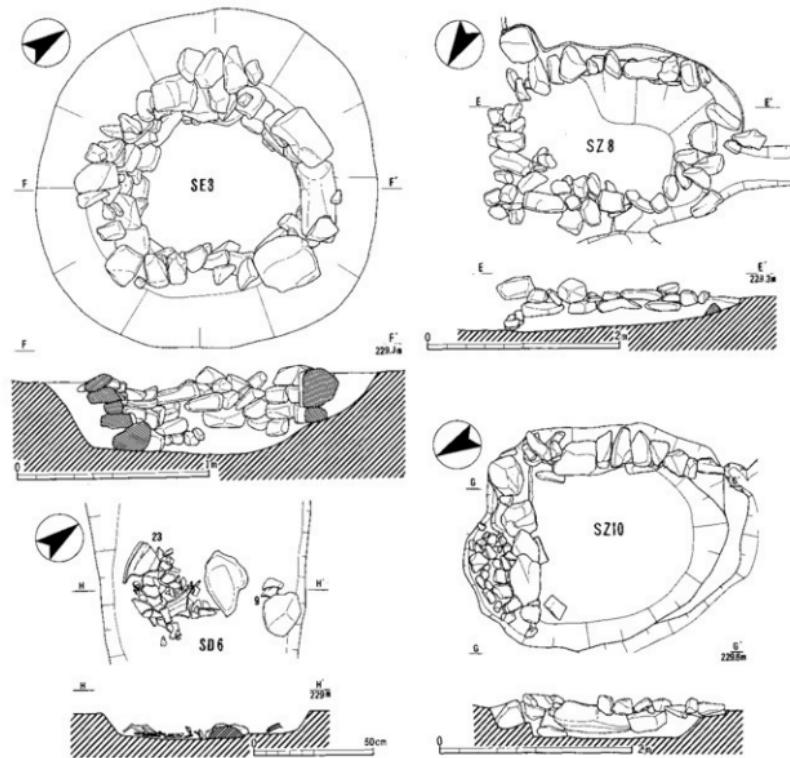
#### (キ) 石組遺構

SZ 8 SD 6 が東から北西に延びる先端部の南側に位置する石組み遺構である。据形は南側で検出できたが、北側はSD 6との切り合いが確認できず、不明である。そのため、正確な規模は不明であるが、石組みの配列により南北におおよそ2.9m、東西に2.3mの梢円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは最深部で約35cmであり、南から北になだらかに傾斜する。20~40cmの人頭大の河原石を一段から二段程度積み、造られていた。

SZ10 SZ 8 の北側に同様の造りをした石組み遺構を検出した。据形の径は南北方向が3.1m、東西方向は2.3mで梢円形を呈する。深さは、検出面から40cm程度である。北東および南東壁では、拳大から人頭大の河原石で、一段から二段程度積み上げられていた。北西および南西壁の石は、埋土中に崩れていた。据形は梢円形を呈するが、北側と東側の石組みの配列を平面観察すると面を揃えており、方形の石組みであったと思われる。

#### ③遺物

遺物はコンテナバットで約15箱である。多くは遺物包含層からの出土で、細片の占める割合が高い。また、遺構からの出土遺物は少ない。遺物は古墳~



第7図 SE 3 (1:25)・SZ 8・10 (1:50) 実測図, SD 6 遺物出土状況図 (1:20)

室町時代および広範囲に出土した。以下時代別、遺物別に主要な遺物について簡略に述べる。

(ア) 古墳時代の遺物

a. 自然河道出土の遺物

須恵器 杯身(1) 口縁部の立上がりは、短く内傾し端部は肥厚する。

須恵器 杯(2) 体部下半から垂直に立ち上がり、口縁端部は薄く摘み上げる。体部に三条の凹線を巡らす。

土師器 壺(5) ゆるやかな胴部にやや外傾する口縁部がつく。縁部はまるくおさまる。

(イ) 奈良時代の遺物

a. S H 9 出土の遺物

土師器 壺(4) 球形の胴部に外傾する口縁部がつく。内外面に細かなハケメを施す。

b. 包含層出土の遺物

土師器 杯(3) 内面にラセン、放射状暗文を施し、外面にかすかなミガキが認められる。

(ウ) 鎌倉・室町時代の遺物

a. S D 6 出土の遺物

土師器 皿(8・9)(8) はやや厚手の体部、(9)は薄手で口縁部が未調整。土師器鍋(23)とともに出土しており、同時期のものと考えられる。

土師器 鍋(20・23)(20)は口縁部のみ、(23)は比較的残りがよい。ともに口縁部はやや内溝し、内側に折り返し断面三角形の突出部をつくる。

b. S Z 8 出土の遺物

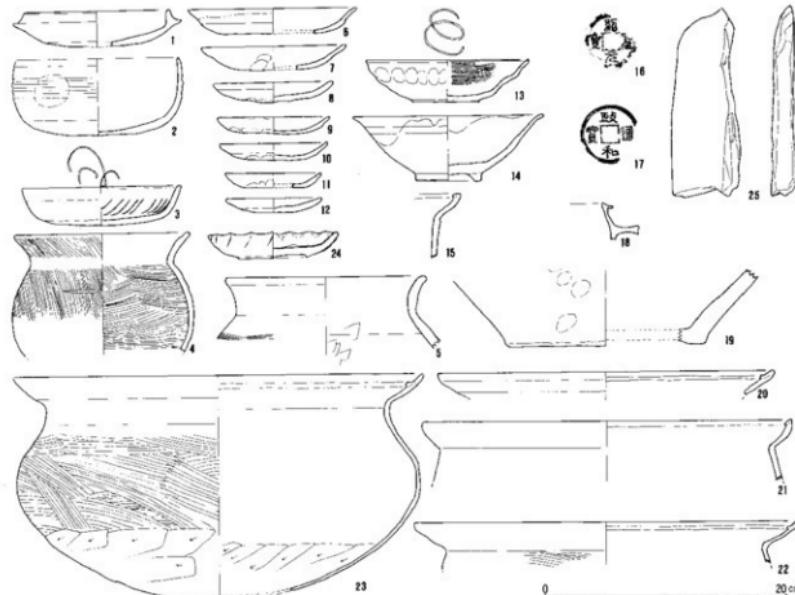
土師器 皿(6・7・11・12)(6)は口縁部に強いヨコナデを施し、段状になる。(11・12)は口径、高さとも同じであるが、(11)は薄手で、(12)は厚手で底部から緩く外傾する点で異なる。

土師器 羽釜(18) 口縁部の一端のみで、口縁部が内弯して端部を外に折り返す。器壁は薄手である。砥石(25) 砂岩系の石の一面に使用痕が認められる。

c. 包含層出土の遺物

瓦器 槌(13) 外面の指オサエが顯著。底部内面に連結輪状文を施す。

山茶碗(14) 底部に楞穀痕がみられ、口縁部は緩く外反し、端部は薄い。口縁部内外面に漬け掛けがみられる。



第8図 A地区出土遺物 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調整法の特徴	粘土	焼成	色調	残存(%)	備考	
				口径	器高	その他							
1	4-02	須恵器 杯身	I2 T2(河道)	14.0	3.0	-	体部下半円板へラケズリ、他口クロナデ	やや密	硬	淡灰色	20	外面に自然難かかる	
2	5-01	*	鉢	H5T3 (+)	13.4	6.2	-	*	*	暗青灰色	25	体部中央に三条の凹線、何かのはりつけた痕跡	
3	2-01	土師器 杯	A3 包	13.4	3.3	-	体部下半ヘラケズリ、内面ナデ 口縁部コヨナデ	良	良	黄褐色	50	口縁部に放射状、底部にラセン彫文あり	
4	6-04	*	甕	A2 SH9	14.6	残9.7	-	口縁部ハケ目後、ヨコナデ、内 外底ハケ目	やや密	*	明黄褐色	25	ハケメ7本/cm
5	3-03	*	*	I6 T1(河道)	16.6	-	-	口縁部コヨナデ、内縁板ナデ 外底ハケメ	密	*	淡茶褐色	20	
6	6-01	*	甕	F4 SZ8	14.0	2.1	-	内面ナデ、口縁部コヨナデ、外 底オサエ	やや密	*	明黄褐色	30	口縁部に粘土接合痕あり
7	6-02	*	*	F5 *	12.0	2.0	-	内面~口縁部ナデ、外底オサ エ	密	*	明黄褐色	25	
8	5-02	*	*	G3 SD6	9.8	1.7	-	内面ナデ、口縁部コヨナデ、外 底オサエ	*	*	暗褐色	35	
9	5-04	*	*	G4 *	8.4	1.3	-	内面ナデ、外底オサエ	やや粗	*	灰黄色	60	
10	1-02	*	*	G5 上面	9.0	1.4	-	内面ナデ、口縁部コヨナデ、外 底下半オサエ	密	*	淡黄褐色	90	
11	5-03	*	*	F5 SZ8	8.0	1.2	-	内面~口縁部ナデ、外底オサエ	やや粗	*	灰黄色	60	
12	5-05	*	*	G5 SZ8	8.0	1.2	-	内面ナデ、口縁部コヨナデ、体 部下半オサエ	*	*	灰黄色	25	
13	1-06	瓦器 鉢	A4 包	13.4	3.4	高台5.4	口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガ キ、外縁ヒュオサエ	密	*	墨黒色	50	底部にラセン状の輪状文	
14	1-01	陶器 鉢	G5 上面	16.8	5.3	5.4	内外底口クロナデ、底部糸切痕	*	*	淡灰色	50	山茶柄高台にモミガラ板、 口縁部つけ掛け	
15	2-04	瓦質土器 瓢	A2 包	-	-	-	口縁部ヨコナデ、他不明	*	*	墨黒色	5	外面にスス付着	
16	4-04	銅鏡	C4 盆	直径2.4	厚さ1mm	-	-	-	-	-	-	60	網型元宝(篆書)
17	4-03	*	*	直径2.4	厚さ1mm	-	-	-	-	-	-	100	政和通宝
18	8-03	土師器 羽釜	F5 SZ8	-	-	-	口縁部折り返し、ヨコナデ	密	良	明黄褐色	10		
19	6-05	陶器 盆	F4 SD6	-	-	-	内外底口クロナデ、体部外面に 指圧痕	やや粗	硬	灰褐色	15	信楽窯	
20	7-01	土師器 瓢	G3 SD6	27.8	-	-	口縁部折り返し、ヨコナデ	密	良	明黄褐色	10		
21	4-01	瓦質土器 *	G2 上面	30.6	-	-	口縁部折り返し、ヨコナデ、体 部内外底ナデ	*	*	明褐色	10	外側全体にスス付着	
22	3-05	土師器 *	G2 上面	32.0	-	-	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外 底ハケ目	やや密	*	暗褐色	10	*	
23	9-01	*	*	G4 SD6	34.0	18.1	-	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、下半ケ リ、体部外側上ハケ目下半ケズリ	密	*	暗灰褐色	50	* ハケ目5本/cm
24	2-02	施釉陶器 盆	F5 包	10.8	2.2	-	内外底口クロナデ、口縁部施釉 による波紋口縁をつくる	密	硬	暗茶褐色	70	厚さ1mm 前後の鉄輪の軸 裏かかる	
25	8-01	砾石	F5 SZ8	長さ15.4	幅 5.5	厚さ 2.0	-	-	-	-	-	100	砂岩系

第4表 六地蔵A遺跡A地区出土遺物観察表

**土師器** 盆(10) 土師器盆(9)に類似するが、口縁部をヨコナデする点で異なる。

**土師器** 鍋(22) 土師器鍋(23)に類似したものであり、同時期の可能性がある。

**瓦質土器** 鍋(15・21) いずれも口縁部の一部が残るのみで、口縁端部は内側に折り返されて上方に面をもつ(15)と内側に面をもつ(21)がある。

**施釉陶器** 盆(24) 口縁部をヘラで押さえ、波状輪花をしている。全面に鉄釉を施す。

**銅鏡** (16・17) 2枚一組で出土し、(16)は篆書で「紹聖元年」、(17)は「政和通寶」と表記されている。いずれも北宋鏡であり、初鑄年は(16)が、1094年、(17)が1111年である。

## (2) B地区

### ①土層

B地区の標高は約229mで、南東から北西にかけての緩斜面上に位置する。試掘の結果では、これより南東方向の谷間にには遺跡は存在しないことが判明した。調査区はほぼ整備により削平を受ける部分のみになるため、不整な形となった。調査区の地形はほぼ平坦である。

土層の基本層序は第1層=耕土、第2層=茶褐色土、第3層=茶褐色土(淡~暗の変化あり)で、遺構検出は第3層上面である。Rラインより南側では地山面は下がっていく。また、中世の遺物を含む灰色土や青灰色土、淡灰色土が堆積していた。

### ②遺構

#### (ア) 溝

**SD20** 調査区北端に位置し、ほぼ東西に流れる溝である。幅約2.1m、深さ0.7mで、断面は逆台形状を呈する。

**SD21** 調査区南端にあり、北方向に抜ける溝である。溝の幅は約0.7m、深さ15cm程で、埋土は淡灰色である。中世の遺物が出土した。地山(茶褐色土)の上に灰色の土が盛られ、その後で中世の溝が切っていた。

#### (イ) 土坑

**SK24** 調査区西寄りで検出した不定形な土坑である。土坑は深さ15cm程残っており、底面からは3基の小穴を確認した。

**SK25** SK24に接する南側に方形状の土坑を検出した。土坑内に2基の小穴を確認した。その1基からは土師器の甕(28)が出土した。土坑はSK24によつて切られる。東辺が直線的な肩をもつことから、SK25は堅穴住居の可能性もある。古墳時代と考えられる。

### ③遺物

遺物は第2層の茶褐色土の遺物包含層から、古墳時代、中世(鎌倉時代、室町時代)を中心に出土した。遺構にともなう遺物は少ない。遺物の多くは細片である。

#### (ア) 古墳時代の遺物

##### a. SK25出土の遺物

**土師器** 甕(28) 球形の胴部に外傾する口縁部がつき、口縁端部はまるくおさめられる。胴部外面にはハケメを施す。口縁部にはヨコナデが、内面にはハケメが残る。

##### b. 小穴(P-2・3)出土の遺物

**須恵器** 台付壺(29) 底部から体部上半にかけて残存する。体部にはヘラ描斜線列を施し、この上下に凹線を巡らす。底部には3方の透かしを入れた脚の剝離痕を残す。

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存 (%)	備考
				口径	器高	その他						
26	6-03	土師器 盆	L4・L5 SD20	7.0	1.5	—	内面~口縁部ノダ、体部外半オサエ	善	良	暗黄褐色	25	
27	1-05	須恵器 杯身	Q3 上面	12.0	3.4	—	内面~口縁部クロコナデ、体部下半同軸ヘラケズリ	*	硬	青灰色	30	
28	3-01	土師器 甕	Q4SK25	13.0	—	—	口縁部ハケ目後日ヨコナデ、胴部外側ハケ口	やや善	良	淡黄褐色	20	ハケ目4本/cm
29	3-02	須恵器 台付壺	P3gpt1	体部深 12.0	—	—	体部内外面クロコナデ	*	硬	青灰	30	脚部に3方向に窓定員方形の透しあり
30	2-03	瓦質 鍋	R3 上面	15.0	4.9	高台深6.2	内面磨文、ヘラミガキ、外面指 オサエ痕	善	良	暗紫色	20	

第5表 六地蔵A遺跡B地区出土遺物一覧表

c. 包含層出土の遺物

須恵器 杯身(27) 立ち上がりは、短く内傾する。体部はロクロナデで、底部はロクロケズリを施す。

(イ) 豊倉・室町時代の遺物

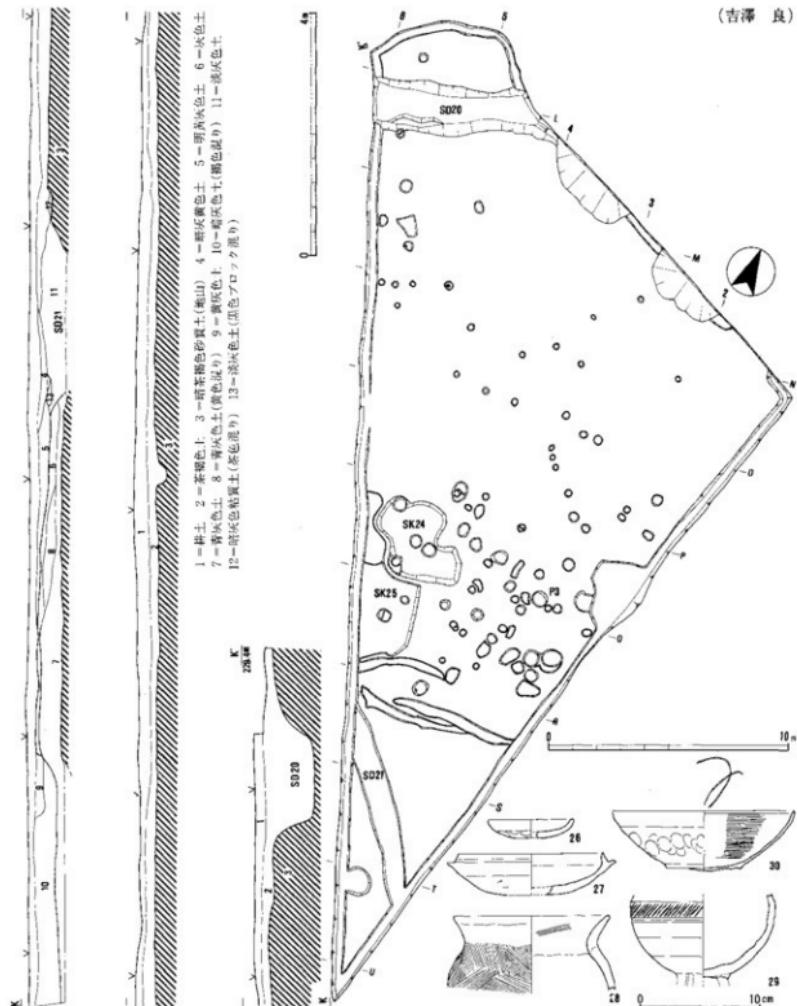
a. SD 20 出土の遺物

土師器 盆(26) 口径 7.0cm の小皿で、外面に指オサエがみられる。

b. 包含層出土の遺物

瓦器 檻(30) 体部外面は指オサエ、内面は底部にラセン暗文、体部はミガキを施す。

(吉澤 良)



第9図 B地区遺構平面図(1:200)、土層断面図(1:80)、出土遺物実測図(1:4)

### (3) C地区

#### ①土層

C地区は、B地区に隣接するトレンチ状の調査区である。標高は約229mで、南東から北西にかけての緩斜面上に位置する。調査開始の時期が遅れたため、すでに耕土が取られた状態で調査を開始した。

土層の基本層序は第1層=明茶褐色砂、第2層=暗褐色砂質土、第3層=茶褐色砂質土、第4層=含礫明青灰色粗砂で、第3層と第4層の間に一部砂層が挟まる。遺構検出面は第4層上面とした。基本的にはB地区的層序と同じであるが、遺構検出面がB地区より1層下の層ということになる。

#### ②遺構

##### (ア) 溝

SD1 調査区をほぼ東西に横切る溝で、幅約9m、深さは最深部で約40cmとなる。中央部で約2mの幅をもって一段低くなり、その向きを北西-南東方向に変える。これを南東方向に延長すると現地形の谷筋と一致する。この点と、地形の傾斜を考え合わせると、SD1は旧河道であると想定される。

#### (イ) その他の遺構

ピットとSD1を切る土坑が検出されたが、遺物は出土しなかった。

#### ③遺物

遺物はコンテナバットで約3箱で、遺構からの出土はSD1のみからである。時期は古墳時代末~平安時代までのもので、以下時代別に述べる。

##### (ア) 古墳時代の遺物

###### a. SD1出土遺物

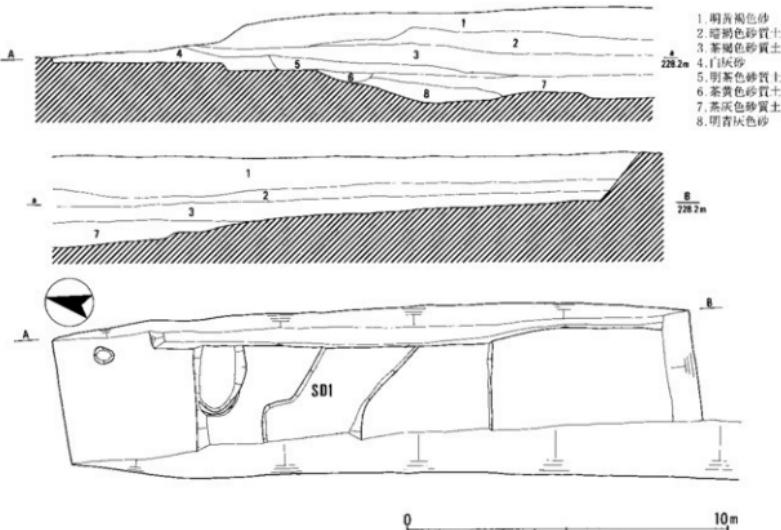
須恵器杯身(33) 口径11.1cm、高さ3.4cmである。口縁の立ち上がりは短く、内弯して端部を尖り気味におさめる。底部外面はロクロケズリである。胎土は密である。

###### b. 包含層出土遺物

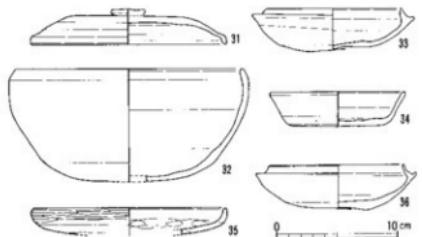
須恵器杯身(36) 口径11.1cm、高さ3.6cmである。口縁部の立ち上がりは短く、内弯して端部を丸くおさめる。底部外面はロクロケズリである。胎土は密である。

##### (イ) 奈良時代の遺物

###### a. SD1出土遺物



第10図 C地区遺構平面図(1:150) 土層断面図(1:80)



第11図 C地区出土遺物実測図（1：4）31～34はSK1、35・36は包含層

須恵器杯蓋(31) 口径16.0cm、高さ2.9cm、つまみ部径2.8cmで、口縁部はほぼ垂直に屈曲して端部を丸くおさめる。天井部はロクロケズリである。胎土は密である。

須恵器鉢(32) 口径18.8cm、高さ9.2cmで、底部は平坦で、胴部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部は丸くおさめる。胎土は密である。底部外面はロクロケズリで、胴部は内外面ともロクロナデである。

#### b. 包含層出土遺物

土師器皿(35) 口径16.0cmで、口縁部をやや内弯ぎみに立ち上げ、端部を丸くおさめる。内面にはラセン状の暗文がみられる。胎土には砂粒を含む。

#### (カ) 平安時代の遺物

##### a. SD1出土遺物

須恵器杯(34) 口径11.1cm、高さ2.8cmである。平坦な底部から直線的に立ち上げ、口縁端部を丸くおさめる。底部外面はロクロケズリである。胎土には砂粒を含む。

(浜口 元)

#### (3) 結語

今回の調査を振り返り、幾つか判明した点を整理

し、且つこの地域の時代的景観を想定しつつ六地蔵A遺跡の結語としたい。

（弥生時代以前）出土遺物、遺構ともなく不明である。少なくとも当遺跡には、この時期の人為的な形跡を認めるものはなかった。

（古墳時代）この時期に属するものとしてはA地区の自然河道、B地区中央の小穴群、土坑（SK24、25）があり、いずれも古墳時代後期の遺物が出土している。周囲に後期の古墳（奥ノ谷古墳群、六地蔵古墳群）が存在することから、近くに集落があった可能性が高い。また、A地区の南端で確認された自然河道は、現在北側を流れる見合谷川に繋がる可能性が高い。この河道から出土した遺物は僅かであるが、古墳時代終末頃のものである。何かの要因で河道の流れが止まり、植物の混じった粘土が徐々に堆積されていったと思われる。この層の堆積土は1m以上になる所もあることから、流れが止まり、よどみ状に堆積していくと考えられる。

（奈良～平安時代）A地区では、堅穴住居（SH9）、C地区は溝（SD1）を確認しており、当遺跡は集落の周辺域であったと思われる。

（鎌倉時代～室町時代）この時期に入ると包含層からの出土遺物が増え、土器の使用が増加したことか窺える。また、遺構もA地区で掘立柱建物（SB7）、柱列（SA12）、溝（SD6）、石組構造（SZ8・10）、B地区で溝（SD20・21）を確認しており、この地区での人の活動が看取できる。それは当遺跡の南側に「東桜寺跡」、北側に久保遺跡、西側に六地蔵B遺跡、川を隔てて「高崎氏館」、それにともなう浦木戸遺跡など中世を中心とする遺跡が存在することからも裏付けられよう。

（吉澤 良）

## 3. 六地蔵B遺跡

今回の発掘調査は、平成5年度の県営は場整備事業にともなう調査である。分布調査、試掘調査の結果、事業地内に2,900m<sup>2</sup>にわたり遺跡が広がっていることが判明した。そのうち、事業により削平をうける80m<sup>2</sup>について本調査をおこなった。

当遺跡は、六地蔵A遺跡と県道をはさんで隣接し

ており地形的にも酷似しているが、同遺跡よりも標高が低く220m～225mである。木津川の河岸段丘面上に位置していると考えられる。

#### (1) 土層

調査区の標高は約225mではほぼ平坦である。基本

層序は5層で、上から耕土、灰色砂質土、褐色砂質土、暗褐色砂質土、含礫灰黄色砂で、第5層上面の含礫灰黄色砂層を検出面とした。

## (2) 遺構

### a. 挖立柱建物

SB8 調査区の南寄りで棟方向をN-54° - Eとする掘立柱建物でSK1とSK3に切られる。梁行は2間だが桁行については北西面の1間を検出したのみで、その規模については調査区外のため不明である。柱間隔は桁行が1.6m、梁行が1.5mである。柱穴については、直径は40cmの円形ではほぼ同じであるが、深さについては統一性はない。また、根石が1か所のみで確認された。

遺物は1つの柱穴からのみ瓦器が少量出土した。

### b. 土坑

SK1 調査区の南東端で検出された、不定形の土坑である。深さは10cm程残っている。遺物は土師器の皿・鍋・羽釜、瓦器の椀が出土した。

SK3 SK1の南東隅でSK1の下から検出された。2m×1.1m以上の方形の土坑と考えられ、深さはSK1の底から8cm程である。遺物は土師器の皿・鍋・羽釜、瓦器の椀が出土した。

SK4 SK1の南西隅でSK1の下から検出された。2.3m×1.2m以上の方形の土坑と考えられ、深さはSK1の底から8cm程である。この土坑の機能については不明であるが、隣接するSK3と平面形、規模、深さともに類似しており、出土遺物も同時期のものと考えられる。このことから、SK4はSK3と同時期になんらかの関連をもつて機能していたと想定される。遺物は土師器の皿・鍋、瓦器の皿・椀が出土している。

SK5 調査区のはば中央から検出された不定形な土坑である。深さは最深部で16cm残っており、南ほど深くなる。遺物は土師器、瓦器の椀が出土している。

SK6 調査区の中央北寄りに検出された梢円形の土坑である。深さは13cm程残っている。遺物は土師器の皿、瓦器の椀が出土した。

SK7 調査区の北端で検出された1.1m×1.0mの方形の土坑である。深さは検出面から50cm程残っている。遺物は土師器の台付甕が出土している。

## (3) 遺物

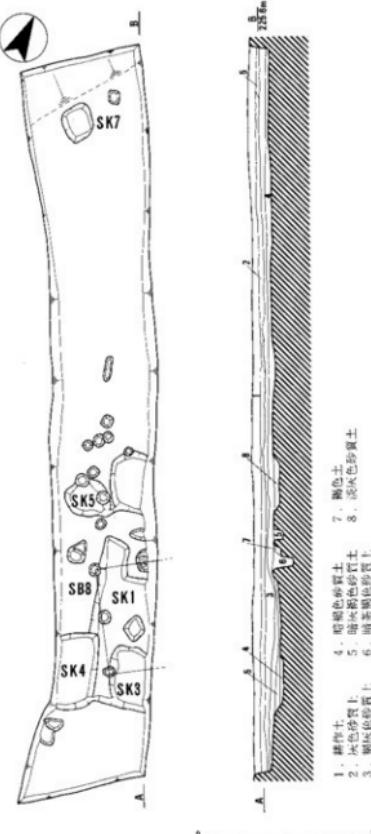
今回の調査で出土した遺物はコンテナバット約3箱分で、時期は鎌倉時代に集中する。以下、遺構別に述べる。

### a. SK1出土遺物

土師器皿(1) 口径8.6cm、高さ1.0cmで、底部中央がややもりあがり、口縁端部はやや尖りざみにおさめる。

土師器鍋(2) 口縁部のみで、折り返し部は内寄が強く、罐部は丸くおさめる。

瓦器椀(3) 口径13.2cmで、口縁部には内側に沈線



第12図 遺構平面図、土層断面図 (1 : 150)



第13図 遺物実測図（1：4）1・4・6・9はSK1、  
2・5・7はSK4、3・8はSK6

があり、端部は丸くおさめる。外面にみがきはみられず、指おさえの跡が残る。内面のみがきもやや疎で口縁部と底部には見られない。

白磁合子(4) 口径5.9cmで、口縁端部は面を持ち、弱い沈線をもつ。口縁部内面を除く部分に明緑灰色の釉を施す。

#### b. SK 4 出土遺物

土師器皿(5) 口径9.2cm、高さ1.7cmで、底部は平坦である。底部から体部にかけて屈曲して立ち上がり、口縁部は外弯して端部を丸くおさめる。

土師器鍋(6) 口縁部のみで、折り返し部は長く、端部に弱い面をもつ。

#### 註

- ① 「三重の構文時代」三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ② 「青山山町史」青山山町史編纂委員会 1979年
- ③ 前掲②と同じ
- ④ 吉澤 良「勝地大坪遺跡（古墳群）」「平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告 第1分冊」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ⑤ 「布引開拓地遺跡試掘調査報告書」青山町教育委員会 1974年
- ⑥ 前掲④と同じ
- ⑦ 前掲②と同じ
- ⑧ 前掲②と同じ
- ⑨ 「考古資料でみる伊賀の歴史」三重県教育委員会 1987年  
銅鐸は、東京国立博物館が所蔵している。
- ⑩ 前掲④と同じ
- ⑪ 吉澤 良「川南A遺跡」伊賀国石跡（第5次）、糸井氏館跡ほか「三重県埋蔵文化財センター 1993年
- ⑫ 前掲②と同じ

瓦器皿(7) 口径9.0cm、高さ1.7cmで、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。内面にみがきを施す。

#### c. SK 6 出土遺物

土師器皿(8) 口径10.0cm、高さ1.8cmで、底部に指おさえの跡を残す。口縁部は外弯して、丸くおさめる。

瓦器椀(9) 口径16.0cm、高さ4.7cm、高台径6.2cmである。口縁部はやや外反し、内側に沈線をもつ。外面のみがきは非常に疎で指おさえの跡が残る。

#### (4) 結語

今回の調査結果をもとに当地域の時代的変遷をのべて結語をしたい。

調査区内で確認できた最も古い遺構は、古墳時代まで遡る。この時期の遺構はSK7の1基のみである。

奈良時代頃の遺構は見られないが、隣接する六地蔵A遺跡では奈良時代の遺構も確認されていることから本調査区はこの時期は集落の縁辺部であった可能性が高い。

平安時代末～鎌倉時代前半の遺構としては、掘立柱建物とほとんどの土坑が確認された。

（浜口 元）

- ⑬ 中島千 年『岡田向遺跡発掘調査報告書』青山町遺跡調査会 1986年
- ⑭ 持統天皇 6年3月壬午条
- ⑮ 正式天皇紀平12年11月甲申条
- ⑯ 「三日（中略）伊賀郡以後國司調査、兼阿保領宮」とある。
- ⑰ 「青山町の文化財」青山町教育委員会 1991年
- ⑱ 「三因志」によれば、旧伊賀郡内には廢寺を含めて140カ寺の記載があり、現青山町内には55カ寺があった。また、「名賀郡史」によれば「東大寺要録」「唐招提寺千歲伝記」「興福寺諸記」「神宮祭事記」などの記載も含めると350カ寺を下らない寺院（但し、名称が異なるだけで同一のものが含まれる可能性がある。）が旧伊賀・名張両郡に存在していた。
- ⑲ 青山町遺跡地図より。
- ⑳ 竹内理三「角川日本地名大辞典」（編纂委員会 角川書店 1983年）「界外」は、「寺院の外」を意味する。

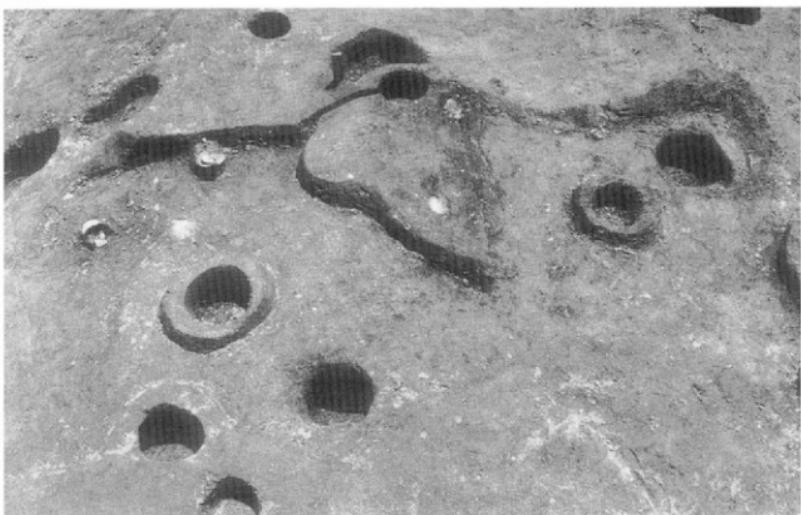


六地蔵A遺跡A地区全景（北から）



六地蔵A遺跡A地区南半部（東から）

P L 2



六地蔵A遺跡SH 9（西から）



六地蔵A遺跡SH 7（東から）



六地蔵A遺跡 S E 3 (南から)



六地蔵A遺跡 S D 6 遺物出土状況 (東から)



六地蔵A遺跡B地区北半部（東から）



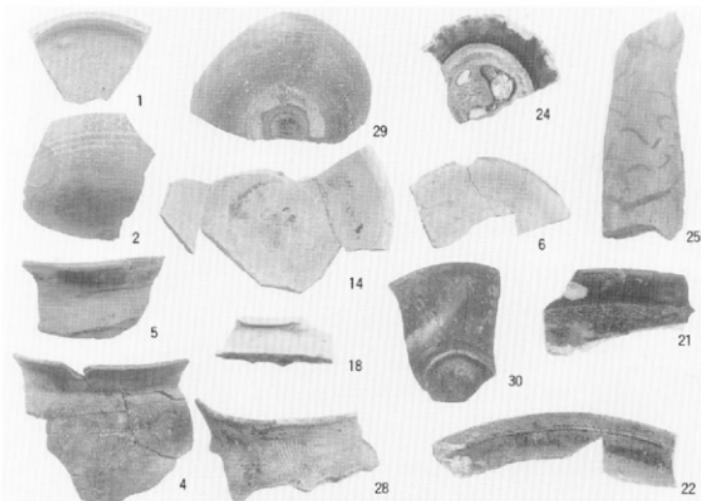
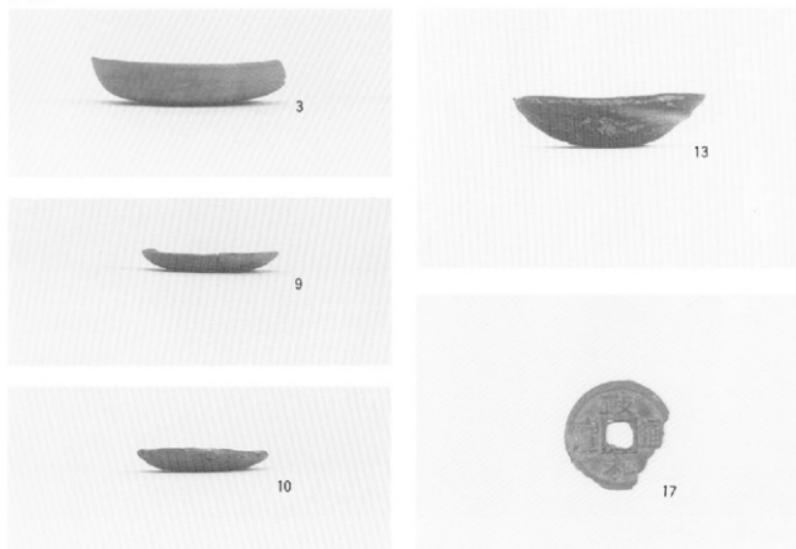
六地蔵A遺跡B地区南半部（東から）



六地蔵A遺跡C地区全景（南から）



六地蔵B遺跡全景（北から）



六地藏A遺跡出土遺物（17は1：1、他は1：3）

### III. 阿山郡伊賀町愛田 高塚宅跡

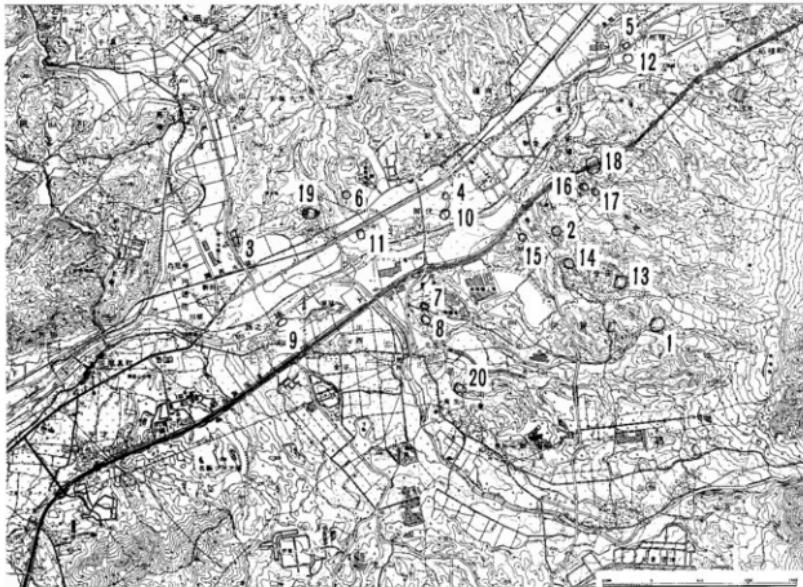
#### 1. 位置と歴史的環境

伊賀町は、四周を山に囲まれた典型的な盆地の中にある。東部は鈴鹿山脈、布引山地が南北に縱断し、旧伊賀国と旧伊勢国との境をなす。北部は標高約250mの水口丘陵を介して近江国との境とする。また、一つ家小平山を源とする柘植川は幾筋もの支流をあわせ、木津川に合流し、淀川となって大阪湾にそそぐ。伊賀町の中心地域は、この柘植川により形成された河岸段丘上に位置し、古代から発展してきた。高塚宅跡(1)は、柘植川の支流の愛田川の右岸に位置し、靈山西麓台地縁辺部(標高約265m)に所在する。

この靈山西麓台地の穴石谷(柘植町)、小波田(下柘植、愛田)、古田(柘植町、愛田)等の柘植川や

愛田川の流域は、古くから集落が立地した。このことは、サヌカイト製の有舌尖頭器が、小波田遺跡(2)で出土していることからも首肯される。これ以外には、川西地区で磨製石斧が表面採集されるのみで、伊賀町に残る縄文時代の資料はわずかである。

伊賀町において明確に歴史が辿られるのは、古墳時代からである。4世紀前半に築かれた三重県最古の古墳とされる東山古墳(3)をはじめ、新意古墳(4)筒御前古墳(5)、椎現山古墳(6)、天長山古墳群(7)内田古墳群(8)等19基の古墳が確認される。天道遺跡(9)は、昭和63年の発掘調査で6世紀前半の集落であることが明らかになり、畦垣内遺跡A地点(10)では、6世紀前半の竪穴住居を多数検出



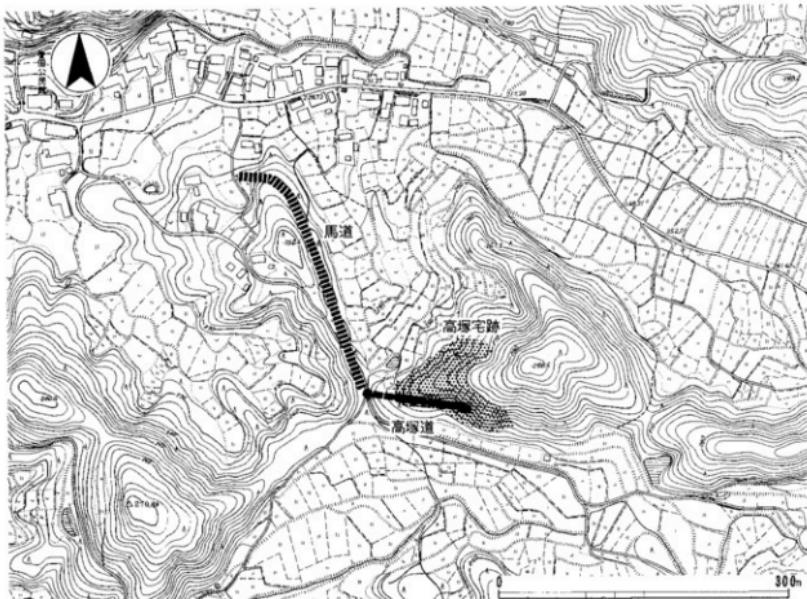
第14図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

した。

律令時代前後では、旧柘植郷（現伊賀町）内に条里遺構がみることができる。この地域は、旧伊賀国阿伴郡に属し、「19の条」、「7の里」が認められる。また、東大寺をはじめとする畿内大寺院の進出が著しく、寺領莊園が多く経営された。中でも、東大寺北袖とされる玉滝莊・大安寺の柘植莊・東大寺の柏野莊・春日若宮の壬生野莊などが著名である。的場遺跡（11）は、平安時代から鎌倉時代前期にかけての遺跡であり、柏野莊の莊域に含まれると考えられ、注目をあびた。これらの莊園が營まれた平安時代を中心とする時期は、交通上も畿内との結び付きが強い。平城京・平安京と東国とを結ぶ官道が、伊賀国に開かれた。東国への官道は、平城京からは和銅4（711年）に阿伴郡新宮駅（推定、上野市新居）が新設され、木津川沿いに大和から伊賀へ入り、伊賀国府（上野市坂之下）を経て、柘植川沿いに東進し、加太峠を越えて伊勢に至る道が開かれた。平安京になつてからは、近江国經由の阿須波道が開かれ、伊

賀は幹線道からはずされる。中柘植地内にある齋宮芝遺跡（12）は、伊賀國旧路領宮跡に比定される。遺物は7世紀前半の須恵器、土師器が出土しており、齋宮芝遺跡の性格は今後の課題となっている。<sup>39</sup>

中世に入り、莊園体制の弛緩にともなって在地領主層が台頭し、その拠点として城館が築かれた。伊賀国全体では、約500カ所の中世城館が確認されており、その分布は地域的な偏在傾向をもつ。柘植川流域では川西、川東、新堂、下柘植、中柘植、倉部、小杉地区に集中する傾向を示す。当遺跡周辺では竹島氏城（13）、日置城跡（14）、日置彈正城跡（15）、高島城跡（16）、広芝城跡（17）、日置城跡（18）などがある。これら伊賀の城館は、集落内に造られるものと丘陵の先端部に造られるものがあり、また一辺数十mの土塁で囲まれた単郭、もしくは複郭の単純な郭構造をもつものが多い。これらの城館の築造は、戦国時代に多く造られる。天正伊賀の乱（1579年、1581年）では、柏野城（19）、壬生野城（20）が拠点となっている。

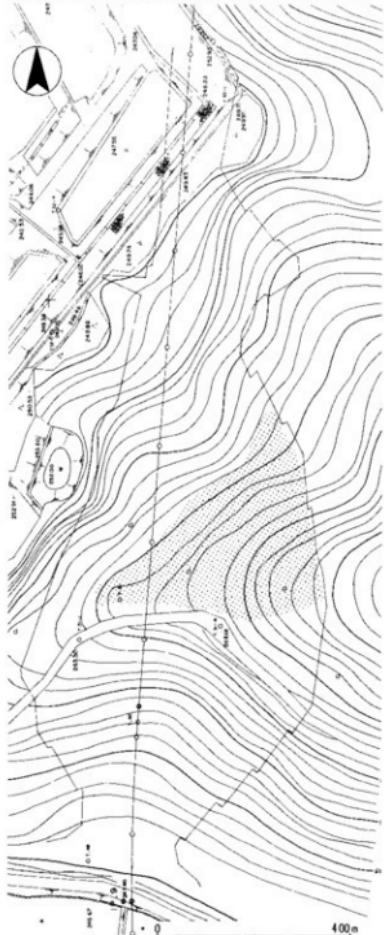


第15図 遺跡地形図（1：5,000）

## 2. 現況と調査前測量

### (1) 経過と現況

高塚宅跡は、通称「高塚山」の尾根の頂部（海拔265m～270m）に位置し、現況は山林である。平成5年度に県営広域農業團地農道（伊賀第3期地区）建設事業にともなう工事が計画され、その施工によ



第16図 調査区位置図 (1:1,000)

り当遺跡が破壊される可能性が強まった。協議の結果、現状保存できない部分（面積＝約1,500m<sup>2</sup>）について発掘調査を実施し、記録保存をおこなうことになった。道路は尾根を南北に横断する形で建設されるため、その頂部に所在する高塚宅跡の一部は調査をおこない、他は現状保存となった。

高塚宅跡は、尾根が東から西に傾斜する斜面を平坦にし、土壙を築いて防護としている。尾根下の水田までの比高は南側で21m、北側で27mある。尾根の両側は急峻な斜面をつくり、自然の要害に相応しい地形となっている。

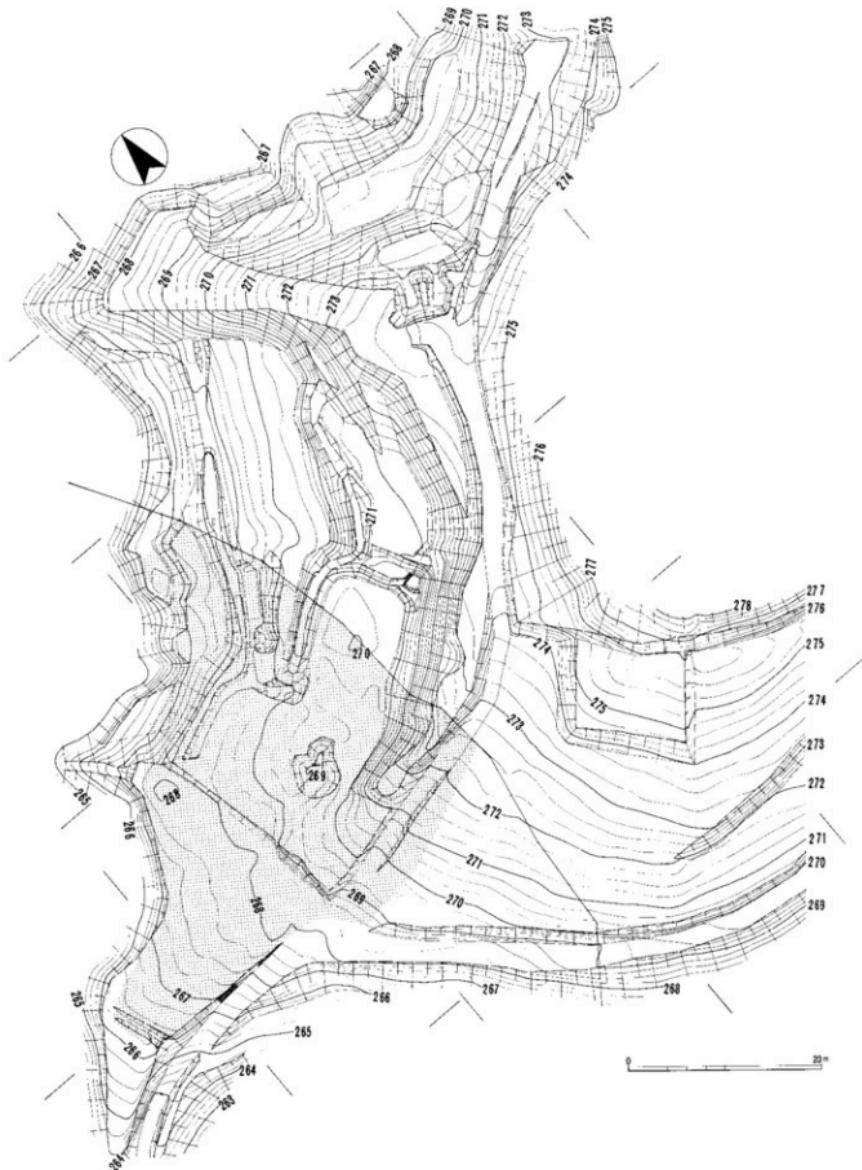
尾根全体に樹齢30年～40年の針葉樹が植林されているが、それ以前は桑畠として利用されていた。そのため、開墾による地形変化も予想された。また、通称「高塚道」と呼称される林道も近世以降現代まで林業に使用され、そこからのびる材木切り出し用の臨時の道路も南側の土壙に沿って作られていた。このような幾つかの要因が城館魔絶後の地形を変化させた可能性はある。

### (2) 調査前測量

調査を実施する前に、「高塚宅跡」の概況を知るための測量をおこなった。これにより以下のことが想定できた。

- ①南側にみられる土壙は自然尾根の一部を削り、造られた可能性が高い。
- ②高塚山の東西にのびる尾根を利用して平坦にし、その一部に段状の区画をもたせ郭を構成させた。
- ③郭内は現状では、西側に土壙等は存在しないが、これは削平を受けた可能性がある。
- ④郭内の東には西に聞く「コ」字状の小規模な土壙を巡らし、南東隅に井戸を設けている。
- ⑤西側に平坦面を有し、何らかの用途に供されていた可能性がある。
- ⑥調査の範囲は「コ」字状の中央部やや西寄りになるため、その全体像は明らかにならない。

以上のことから、「三国地誌」に記されている「高塚宅址」に比定しうる中世城館として、調査を実施した。



第17図 調査前測量図 (1:500)

### 3. 遺構

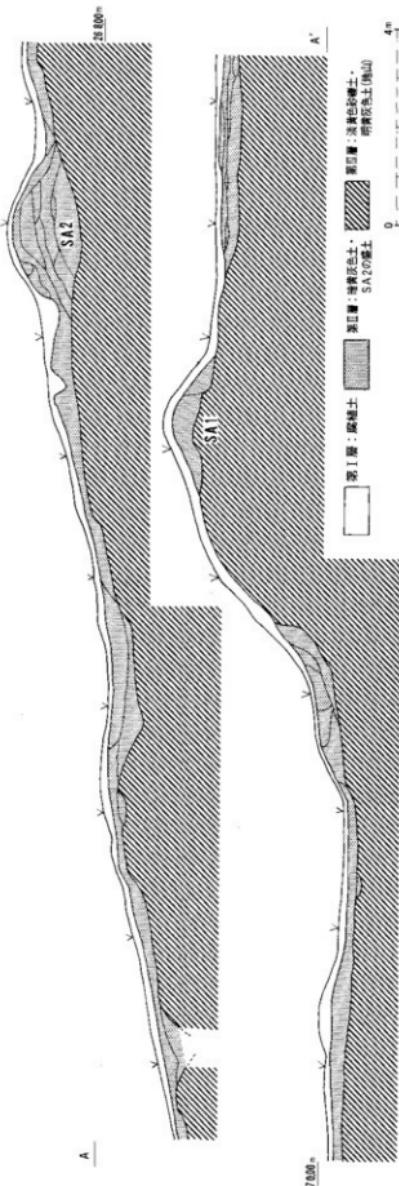
調査を実施するにあたり、南北に土層観察用の試掘坑を計画路線東側に69m、郭内中央部を東西に46m設定し、層位の状況を観察した。郭内では第1層=腐植土層(10cm前後)、第2層=暗黄灰色土(15~20cm)、第3層=淡黄色砂礫土、明黄色土の地山が2種類認められた。この層以下では涌水(表土から約90cm)がおこる。また、東西方向ではこの第3層は東端から7mの点で暗黄色土に変わり、西へ10~22mの場所では地山の層が複雑になる。郭を構成すると見られる段状の区画を境に再び地山が、単純な黄灰色(砂質・砂・砂礫)土に変化する。

#### (1) 土壙

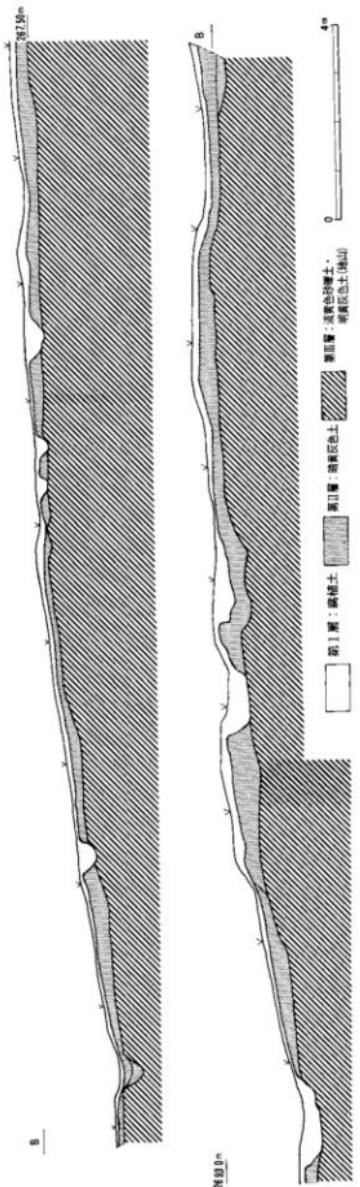
S A 1 南側に東西にのびる土壙で、小さな尾根の一部を削り築いていた。この尾根は、東へ続いており調査区外から40mの所で北へ屈曲する。土壙頂部の比高差は内側(郭内)で4m、外側(郭外)で1~2m程あった。土壙は西へ延びるほど段階状に低くなり、郭の西端では1.3mの高さとして残る。これは、尾根自身の端部にあたっているためとも考えられる。しかし、本来的に土壙は、高さを減じつつも西端にも存在したと考えられる。土壙断面は頂部に暗黄褐色の柔らかい土を40cm程盛土し、それ以下では黄色の疊混じりの締まった層になり、地山となる。北側では、後世の頂部からの崩落により暗灰色(黄色混じり)土が30~40cm堆積していた。このことは、尾根は南で緩やかで、北側で落ち込み、段をつくるものであった可能性が高い。そして、内側で自然尾根の裾部分を削り、郭内を拡張し、また南との高低差を設けるために頂部に盛土をおこなったと考えられる。

土壙の高さは南の平坦面から1.2m程である。北側に築かれた土壙が、底部から1.1mの高さの人為的な盛土であることから、高さにおいては不自然なものではないと推測する。なお、土壙頂部の暗黄褐色のやわらかい盛土から土器器縄(8・9)が出土した。

S A 2 郭内北側に築かれており、西側に9m程残る。土壙は、規模が小さく上部は幅1m程平坦で、柱穴等の遺構は確認できなかった。また、基底部の



第18図 南北土層断面図 (1:100)



第19図 東西土層断面図（1:100）

幅は3.5m、郭内との比高は1m程であった。この土塁の北側は平坦な面をもち、さらに北に1.3m落ち込む。この落ち込んだ点からSA2の頂部まで2m強である。この落ち込んだ部位は「堀」の機能を果たしている可能性もある。そして、SA3につながっている。このことは、土塁がこの堀状遺構の底からSA2の頂部までを一連のものとして捉えれば、より自然な防禦構造の土塁であったと理解できる。土塁は、地山（淡黄色砂礫土）の上に1.4mの盛土（暗灰色・黄灰色の柔らかい土）で築かれていた。断面からは小穴が観察できた。土塁の盛土は、柔らかな土であるため、風雨による流失が想定でき、築造当初は今より高かった可能性もある。

**S A 3** 郭全体を取り囲む土塁の一部と考えられた。土塁は後世の削平により、頂部はゆるやかになっていた。ただ、SA3の北側では緩斜面が6~10m続いている。その後急峻な斜面となり落ち込む地形のため、この急斜面そのものが果たす効果は、土塁以上の防御が想定できると考えられた。

**S A 4** 郭の西側のコーナーに一部残る。土塁本来の状態ではなく、わずかに遺存する程度である。

#### (2) 掘立柱建物

**S B 5** 郭内中央部東側で検出した梁行2間×桁行2間以上の掘立柱建物である。棟方向はE-25°-Nである。柱間寸法は桁行きが2.4m等間、梁行きが1.8m等間であり、柱穴は、径35~40cmの円形である。柱穴の深さは、概して浅く、15~30cmの残りである。郭内の奥行きを考えると、もう1間ないしは2間分東へ桁行きが伸びることができ、「コ」字状の土塁に囲まれた中央に3間×2間、または4間×2間の建物が立っていたと考えられる。

#### (3) 溝

**S D 7** 郭内のSA1の土塁根部に沿って幅90~60cm、深さ数cmの浅い溝を検出した。この溝は、南北の土層断面では確認されないことから調査区内で終了する。

**S D 11** S B 5に平行する形で東西にのびる幅45cm、深さ10cm程の溝である。SD11は、調査区外東へも伸びていることが土層断面より確認できた。

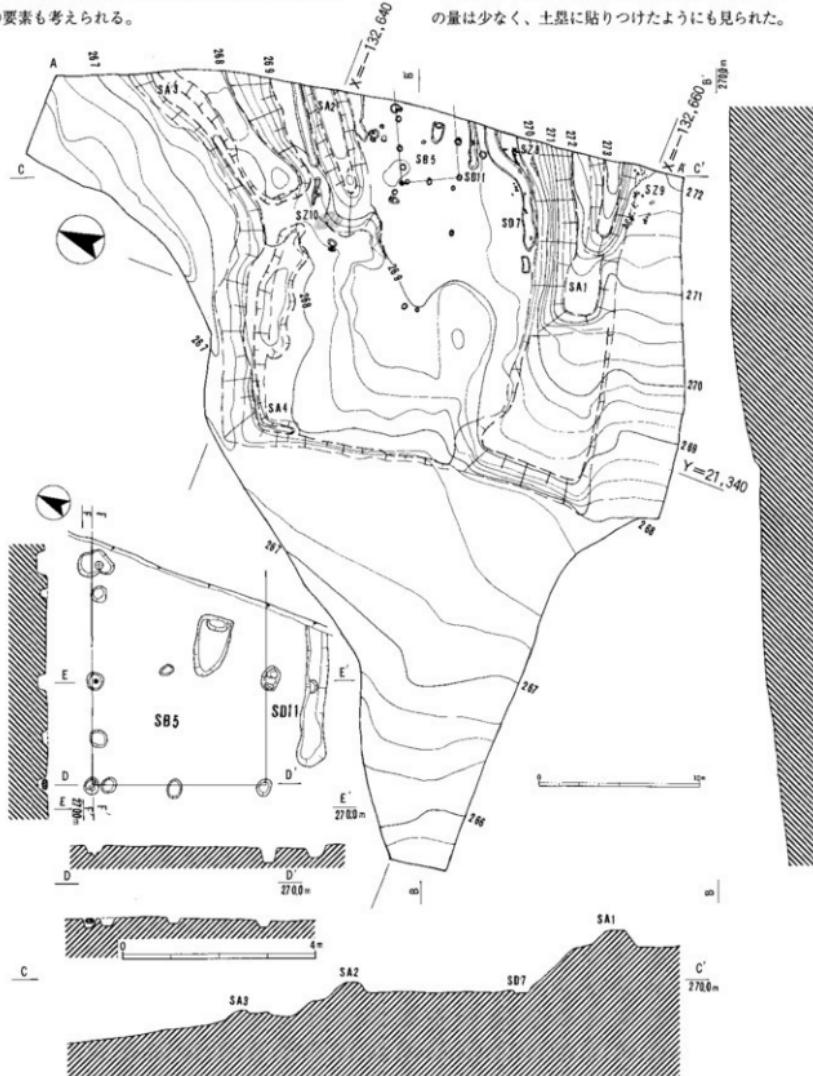
#### (4) その他の遺構

**S Z 8** 郭内の土塁SA1根部に石組み列を検出し

た。石組みは拳大から人頭大までの自然石を2~3段程度積み上げられていた。少し離れて、その上にも人頭大の石が一列に並べられていた。機能については不明であるが、上部からの崩落を止める土留めの要素も考えられる。

**S Z 9** 南側の土塁SA1の郭外裾部に幅1m弱、長さ4m程の範囲で並べられる石列が認められた。SZ8と同様な機能と考えられる。

**S Z 10** 土塁SA2の先端部に集石を検出した。石の量は少なく、土塁に貼りつけたように見られた。



第20図 調査区土層断面図・平面図(1:300) S B 5・S D 11実測図(1:100)

## 4. 遺物

遺物は郭内を中心にコンテナバット1箱の出土であった。遺物は、包含層および検出面からであり、遺構からの出土は認められなかった。出土地区別にみると、E-10~12地区に比較的多くみられる。これは、南側の土壠 SA1の先端部にゆるやかな傾斜がみられ、遺物が土砂とともに流れ込んだためであろう。郭外からの遺物は殆ど出土しなかった。遺物は少量であり、天目茶碗、陶器の擂鉢、土師器碗・鍋・皿、砥石、銅鏡、鉛玉等である。以下、概略的に説明をする。

施釉陶器 皿(1) 口縁部から体部にかけて残存し、全面に乳白色の釉が施される。口縁部は屈折して直線的に外傾し、端部は丸くおさまる。

天目茶碗(2・3) (2)は口縁部周辺、(3)は口縁部から体部にかけ残存する。いずれも鉄釉が内外面全体にかかる。(3)の復元口径は11cmで体部下半から直線的に開き、口唇部で立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。(2)は体部が薄く、口縁部は肥厚し、口縁端部をゆるく外反する。

施釉陶器 鉢(4) 口縁部の小片であり、外面全体に茶色の釉がかかる。近世の遺物と考えられる。

陶器 擂鉢(5~7) 種類の掛かるもの(7)と掛けられないもの(5・6)があり、また体部の造りの厚いもの(6)と薄いもの(5・7)がある。(5・7)はいずれも口縁部内面に無文帯を有し、それを段や沈線で区

画している。(6)は体部下半のみの残存であり、赤褐色で造りが粗い。(5・7)よりも(6)が先行するものと考えられる。

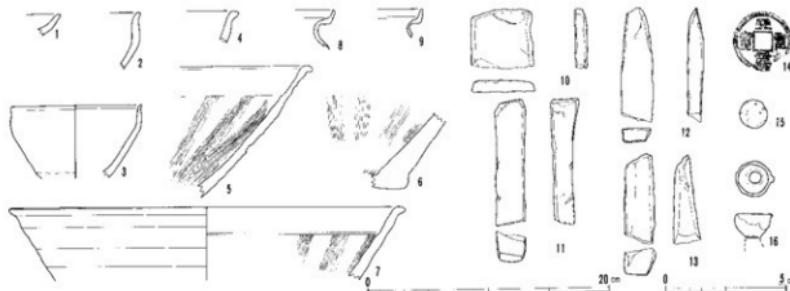
土師器 鍋(8・9) いずれも同じ地点から少量出土したが、口縁部の造りに相違が認められ、別個体と判断された。(8・9)は共に頸部を短く外反させ、口縁端部を外傾気味に立たせ、ヨコナデをおこなう。口縁端部外面の強いヨコナデのために凹線をつくる(9)と弱いヨコナデの(8)に分かれる。時期的な差異はないであろう。

砥石(10~13) 形状で(10)と(11~13)に分かれる。(11~13)は棒状の石の側面に加工を施し、四面を造る。その一部が折れ、欠損している。使用痕により平滑な面を一面に有する。(10)は薄い板状を呈し、その一部が欠損しており、平滑な面を一面に有する。いずれも、小形で目が細かい。

寶鏡 銅鏡(14) 直径2.4cmを計り、「天聖元寶」と篆書で記される。1023年から鋳造が始まった北宋鏡である。

鉛玉(15) 直径1.2cm、重さ9gを計り、外面は腐食のために淡灰色を呈す。外面の一部は凹む。

煙管 雁首(16) 火皿径1.5cm、火皿高1.0cmで材質は真鍮である。火皿の接合部の径が0.5cmであり、腐食が進み、緑青色になる。



第21図 出土遺物実測図（1～13は1：4、14～16は1：2）

## 5. 結語

最後に、高塚宅跡の調査をふりかえり、この調査により明らかになつた点および留意される点を史料伝承を含めて列記し、結語としたい。

### (1) 史料

「高塚宅跡」の根拠は、「三国地誌」からである。文中で「高塚山 愛田村 按、高塚宅址あり」と記し、その所在を述べている。その他、伊賀地域については、地理誌では「伊水温故<sup>9</sup>」、天正伊賀の乱では「伊亂記<sup>10</sup>」が署名である。

「三国地誌」では、「旧跡名勝」の項に伊賀の土豪の城館が記されている。その中には竹島氏堡、日置彈正氏堡など愛田にある城館跡が記されているが、高塚宅址はない。「高塚宅址」は「山、川」の地名の項に記されている。なぜ、旧跡名勝の項に同じように記載されなかつたのであろうか。

「伊亂記」では、実に詳細な伊賀の土豪についての記述がある中で、高塚氏の名前が登場しない。架空的要素が強いものの、その中に登場しないのには疑問が残る。

### (2) 土地の伝承

遺跡から北へ続く小道を下ると愛田の集落につながる。現在は使われていないその道を「馬道」と称し、「昔、殿さんが馬に乗って鹿狩りに使つた。」また、高塚宅址までの細い道を「高塚道」と称しており、馬道から高塚道までを一連のものとして捉えている。さらに、伝承では高塚宅址の城主を「高塚兵右エ門」とし、「その墓石は高野山奥の院にあり。」としている。以上の伝承は根拠のないものであるが、まったくの捏造とは言い難いと思われる。「馬道」の集落寄りには中世から近世にかけての寺院跡(遊泉寺<sup>11</sup>)があり、墓石が転がっている。馬道は近世以前は寺院前を通り、南に抜ける主要な交通路であった可能性もある。

### (3) 遺構

①西側に土壘を確認できなかった。これには2通りの考えがあり、1つは後世開墾などにより削平を受けた。なぜなら、この地点が近世から現代に至るまで農業用地として利用されていたからである。土

堀は規模も小さく、柔らかい土の盛土のため削平が容易であったと思われる。また、同じような例では、箕升氏館があげられる<sup>12</sup>。ここでは、四方の内、三方が削平されていた。2つめは、何らかの理由により造られなかつたか、または途中で止めたかである。

②土壙が他の中世城館に比し、規模が小さいこと。単純な測り方をすれば、高さ1.2m程である。これで敵の侵入を防げるかという点である。当遺跡より北西に550mの尾根の突端部に位置する竹島城では、高さ2m強の土壙が四周を巡る。地形条件が類似するにもかかわらず、土壙の大きさが異なる。

③通常、土壙は外側に高く築き、内側に低く築かれるが、高塚宅跡の南側の土壙は、攻め手側に低く築かれ、攻め易くできている。これは土壙の機能を軽視した結果か。また、別な考え方をすれば、尾根の頂部に築かれたため、それ自身が防禦機能をもち、土壙を付帯的要素として捉えられていたかもしれない。また、防禦の対象を馬、火気類に絞っているならば、規模にあまりとらわれる必要はないかもしれない。

④城館の周囲にみられる「堀切り」、「堀」等の施設が造られていない。

⑤郭内には小規模な建物が1棟確認された。

⑥郭内は東のやや高まつた平坦面を「コ」字状に土壙で取り囲み、また、南側の土壙の端から北へ直角に曲がる延長上に土壙の痕跡を確認し、それが西に続く。西側では二重に土壙が巻く。高さの異なる平面と土壙の二重構造を有する点で、複郭式の造りとも言える。

### (4) 遺物について

遺物から時期が比定可能なものは、擂鉢、天目茶碗、土師器鍋等である。もっとも、少量の出土遺物から時期を比定することの危険性を考慮する必要がある。その上で、上記遺物について考えてみたい。擂鉢では、口縁内面に無文帯を画する(5・7)は、近世以降(17世紀以降)に見られる特徴であり、胎土の厚い赤褐色の(6)は、それ以前(16世紀後半)と考えられる。次に、天目茶碗(2・3)であるが、

口唇部がやや内傾し、端部が小さく外反する点は藤澤編年の中第11型式に相当し、17世紀前半に比定できる。<sup>9</sup>土師器類(8・9)はその形態から南伊勢系のものと思われ、第4型式の最後のものであろう。16世紀後半が比定できる。<sup>10</sup>以上のことから遺物では、16世紀後半からと17世紀前半のものが認められる。

#### (5)まとめ

①. 二次にわたる「天正伊賀の乱」の中では、「高塚氏」に纏わる事実を文献に見ることはできない。したがって、伊賀の土豪として存在していたかは確認できない。しかし、伝承から高塚氏の存在をまったく否定し難いものがある。推量が許されるなら、高塚氏は天正伊賀の乱以降、この地にかかわった者とも見える。

②. 16世紀後半の遺物が南側の土壘頂部から出土している。これは築造時に頂部に盛土をおこなう際、

混入していたと考えられる。さらに、郭内の整地層から出土した擂鉢も築造時の混入物と考えられる。これらは、いずれも16世紀後半のものであることから、築造は16世紀後半頃の可能性がある。そして、17世紀前半以降は使われなくなった。その間の利用は少なく、日常生活がおこなわれたとは考えにくい。有事の際にたて築る「詰め城」的な利用を推定することが妥当であろう。このため、居館的な建物が付近にあった可能性がある。

高塚宅跡は、16世紀後半から17世紀前半を「築造～廃絶」と考える。この時期は二度にわたる「天正伊賀の乱」がおこった時期でもあり、これが築造動機とも考えられる。ただ、どのような勢力が築造にかかわったか、また高塚氏とどのように関連していくのかも不明である。

(吉澤 良)

#### 〔註〕

- ①福永正三「伊賀町の風土－地形的環境－」『伊賀町史』伊賀町 1979年
- ②中川甫「伊賀町のあけぼの」『伊賀町史』伊賀町 1979年
- ③小俣晋作「阿山町東山古墳の遺傳と遺物」『研究紀要 第1号』三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ④吉水康夫『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977年
- ⑤吉水康夫「椎原山古墳出土の遺物」『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977年
- ⑥『三重県埋蔵文化財年報』三重県教育委員会 1989年
- ⑦鈴木克彦「畦垣内遺跡A地点」『平成2年度農業基盤整備事業 地域埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』三重県教育委員会 1991年
- ⑧福永正三「古代の伊賀町－柘植郷条里とその復原－」『伊賀町史』伊賀町 1979年
- ⑨駒田利治「的場遺跡発掘調査報告」伊賀町教育委員会 1978年
- ⑩吉水康夫「斎宮芝遺跡出土の遺物」『筒御前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1977年
- ⑪開差区外東へ10mの所にあり、直径1m程度である。外見から判断するのみであるが、北側に拳大の石を組んでいる。比較的浅く、1.5m程で底にある。

⑫宝暦13年（1763年）に麻生藩主野代藤堂元甫により編纂された伊勢・伊賀・志摩三つの地理誌である。

⑬貞享4年（1687年）に柴岡如幻により著された伊賀地域の地理誌。内容は、神社仏閣、地名、官道、名勝旧跡等である。

⑭伊賀平定忘ともいわれ、柴岡如幻により著され、天正伊賀の亂を題材にした軍記ものである。

⑮『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976年

⑯『三重県阿山郡伊賀町遺跡地図』伊賀町教育委員会 1992年

⑰森川常厚「箕升氏歴跡」『伊賀町府跡・箕升氏歴跡はか』三重県埋蔵文化財センター 1993年

⑲山田猛「下郡遺跡出土の擂鉢」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年

「糸水氏城跡発掘調査報告」阿山町教育委員会 1987年

⑳藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年

㉑伊藤裕介「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年



調査前風景（西から）



調査区全景（西から）

P L 8



調査区東半部（南から）



調査区東半部（北から）



S A 1 (北から)

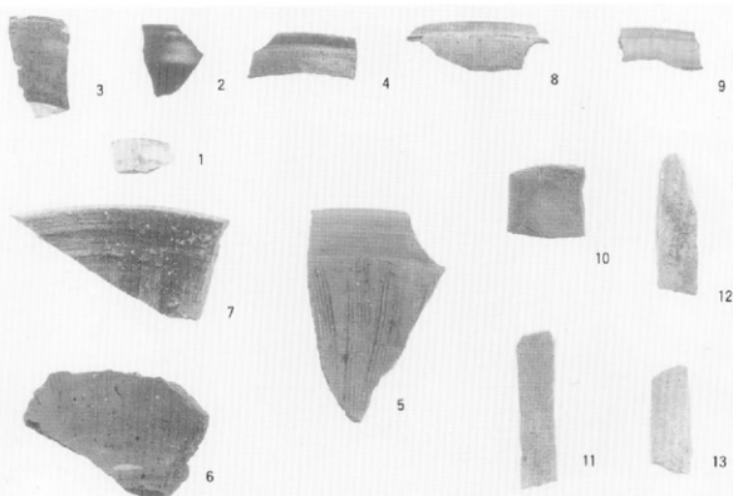


S A 1 断面 (西から)

P L 10



S A 2 断面（西から）



出土遺物 (1 : 3)

## IV. 一志郡美杉村八知 東川遺跡

### 1. 位置と歴史的環境

三重・奈良県境付近に源を発する雲出川は、中小の河川と合流しながら一志郡内を東流し、伊勢湾に流れ込む。東川遺跡(1)は、雲出川と老ヶ野川との合流点をのぞむ丘陵端部に立地し、行政的には三重県一志郡美杉村八知大字大御堂字東川・白樺に位置する。

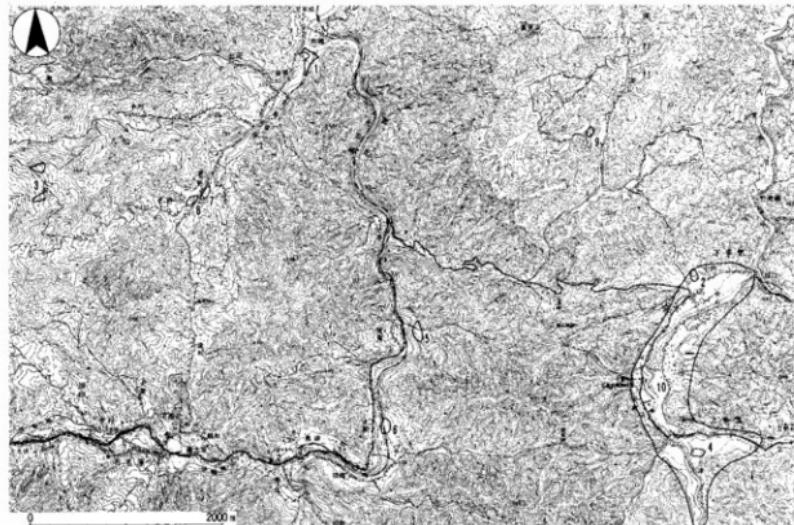
付近では旧石器時代の遺跡はまだ発見されていないが、縄文時代の遺跡としては、早期の土器が表面採集された大字下多気の上羽遺跡<sup>(2)</sup>、早期後葉の土器や石鎚・石錐・軽石製容器・有溝磁石等の石器類が表面採集された蕨折・大洞山遺跡<sup>(3)</sup>、後期中葉の堅穴住居が検出され、同時期の小形注口土器や深鉢等が出土した大字上多気の土井沖遺跡<sup>(4)</sup>、後晩期の土器が表面採集された大字奥津の波籠遺跡<sup>(5)</sup>、谷口遺跡<sup>(6)</sup>がある。また、青山町との町村境の布

引開拓地遺跡では石匙・石鎚が出土している<sup>(7)</sup>。

弥生時代の遺跡としては、中期中葉の溝が検出され、同時期の土器が出土した土井沖遺跡がある<sup>(8)</sup>。また布引開拓地遺跡では弥生土器の甕が出土しており、老ヶ野遺跡<sup>(7)</sup>、南瀬古遺跡<sup>(8)</sup>、蕨折・大洞山遺跡、波籠遺跡等からは弥生時代の土器片や石器類が表面採集されている<sup>(9)</sup>。

古墳時代の遺跡は弥生時代に比べて報告例が少なく、村内では大字下之川の下之川古墳が現在確認されている唯一の古墳である<sup>(10)</sup>。しかし、大字太郎生からは三角縁神獣鏡が出土しており、古墳時代におけるこの地域の重要性が指摘されている<sup>(11)</sup>。このほか蕨折・洞山遺跡等で須恵器片が表面採集されている<sup>(12)</sup>。

律令制度の下では、この地域は一志郡に含まれる



第22図 遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院「二本木」「供留尊山」1 : 25,000から)

ことになった。この時代の遺跡もこの地域では報告例が少ないが、蕨折・大洞山遺跡では平安時代のものと思われる石帶や土師器片が表面採集されている。

中世前期の遺跡の報告例も少ないが、大字下多気の漆経塚(9)からは土師器・山茶碗・常滑焼・青白磁・経筒(土師質・瓦質・陶質・銅製)・銅鏡・鉄劍・小刀・古錢など多数の遺物が出土しており、経塚の築造年代は12世紀後半前後であると考えられている。また、蕨折・大洞山遺跡では山茶碗や瓦器片が表面採集されている。

この時代になると、「八知」の名が各地の史料に散見するようになる。まず、奈良県宇陀郡大宇陀町大藏寺蔵の地蔵菩薩胎内の中の摺仏の裏書に「八智郷造立 仏所僧長信 漢所三条高倉 延応元年九月□日」とある。ここにみられる「八智」は美杉村の八知で、当初この仏像はこの地方の有力者或いは八智一郷の有力者の共同発願により八知の寺院に納められ、後世になって宇陀に移されたと考えられている。

また、他の摺仏の裏書には造立の結縁者として「神祇權大輔中臣隆兼」や荒木田氏・度会氏の名が記されていることから、当時の八知が大中臣氏・荒木田氏・度会氏など伊勢神宮の祭主・祢宜層と強く結びついていたと考えられる。

中世後期にはさらに史料が増加する。八知仲山神社にある永亨5(1433)年3月5日の紀年銘を持つ水舟台石には「八智郷金生人明神 水舟也 頤主道求」とある。また、猪野町大字上小川の宇氣比神社には応永12(1405)年、永享12(1440)年の銘のある棟札があり、そのうち応永12年銘のものには「大工八智之 拝部尉源光行」「八智掃部太郎同二郎」、永享12年

(註)

- ① 美杉村の遺跡については、地元の相野田健治夫妻・三重県立松阪高等学校教諭奥義次氏の御教示を得た。
- ② 註①に同じ
- ③ 伊藤裕偉「多気遺跡群発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター、1993年)
- ④ 眞①に同じ
- ⑤ 森川慎男他「布引開拓地遺跡調査報告書」(青山町教育委員会 1974年)
- ⑥ 註③に同じ
- ⑦ 註⑤に同じ
- ⑧ 稲生進一「美杉村史」「考古編」 1981年
- ⑨ 註⑧に同じ
- ⑩ 伊勢野好「旧一志郡内の首長墓」(『天王寺山』一志町・猪野町遺跡調査会、1991年)
- ⑪ 註①および註⑧に同じ
- ⑫ 註①に同じ

のものには「大工八知エリ太郎」の名が見え、八知には宮大工の集團が存在したのではないかと考えることができる。

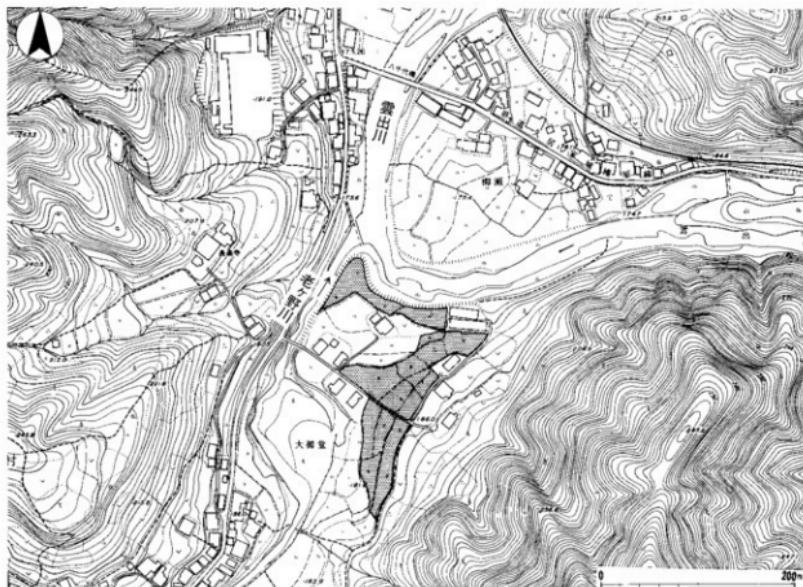
この時代には北畠氏が多気(10)に居館を構え、かなりの規模をもった「地方政治都市」を形成し<sup>10</sup>、八知には伊賀との国境に矢鉢城が築かれた。そのような中で、八知は少なくとも16世紀前期以前には北畠氏の被官の澤氏の所領となり、澤氏の代官が置かれていたことが確認できる。また澤氏古文書の内、永正8(1511)年10月22日付の澤源四郎宛の北畠具方書状には「一、八知九名之内 東川八郎兵衛被放御扶持并寺庵百姓等 御扶持仁不可召置之 御権門勢家同前事」とあり、北畠氏は八知の東川八郎兵衛を澤氏の被官から召し放す事を命じている。同文書によると東川八郎兵衛は八知の土豪で、伊賀までも含む範囲で金融業を行っており、かなりの財力をもっていたと考えられ、北畠氏は澤氏と東川八郎兵衛等の在地の勢力と引き離し、自らの勢力を浸透させようとしたと考えられている。しかし、澤氏と東川の関係はその後も存続されたようで、大永7(1527)年9月21日付の「若子様御とうの時の椿引付」では澤氏が宇陀水分神社の祭礼を行う際に、他の同名・被官とともに銭三十疋を献上している。

また、16世紀後半の北畠国永の歌集『年代和歌抄』には、八知に北畠氏の草庵があったことが記されている。<sup>11</sup>

北畠氏の滅亡後、近世になると八知は安濃津藩の領地となり、明治22年には町村制施行により八知村となり、昭和30年の合併により美杉村となった。

(竹田憲治)

- ⑬ 小王道明「漆經塚群とその埋納品」(『美杉村史』1981年)
- ⑭ 註①に同じ
- ⑮ 米山徳馬「大藏寺地蔵像胎内の中の摺佛と結縁者」(『史述と美術』215号、1951年)
- ⑯ 太田古朴・森田利吉「美杉村史」文化財解説 1981年
- ⑰ 野田精一「一志郡神社史」(『一志郡史』下巻、1955年)
- ⑯ 註③に同じ
- ⑰ 「沢氏古文書」六-13 (『松阪市史』第三巻史料篇所収)  
以下、整理番号も松阪市史による。
- ⑲ 「沢氏古文書」三-21
- ⑳ 「沢氏古文書」九-57、九-58
- ㉑ 小林秀「戦国期における畿内近国大名の権力構造」(『三重その歴史と交流』雄山閣、1989年)
- ㉒ 「沢氏古文書」十三-8
- ㉓ 「年代和歌抄」嘉永2(1849)年写本 香宮文庫所蔵
- ㉔ 山本泰弘・児玉正邦『美杉村史』「近代化編」 1981年



第23図 遺跡地形図（1:5,000）



第24図 調査区位置図（1:2,000） ■試掘坑（番号は試掘坑番号）

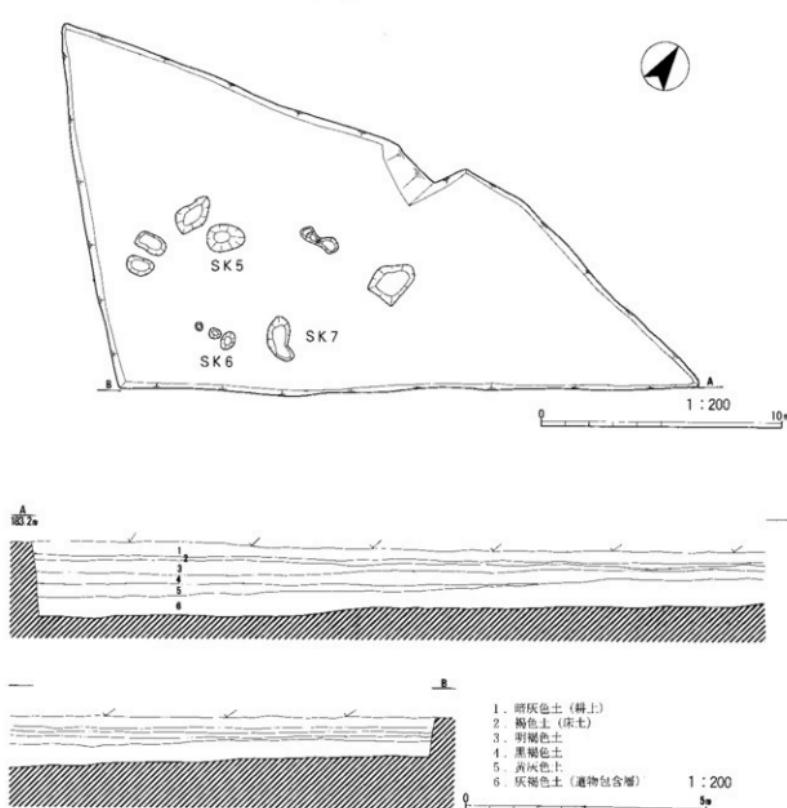
## 2. 遺構

事業地域内で分布調査及び試掘調査を行った結果、6,100m<sup>2</sup>にわたり遺跡が広がることが判明した。その内、事業により削平を受ける約1,800m<sup>2</sup>について調査を行った。調査区は便宜上、北からA～G地区(第24図)に分けた。以下、主な遺構を各地区ごとに報告する。

### (1) A地区の遺構(第25図、P.L.11)

調査面積は約250m<sup>2</sup>である。基本層序は、上から第1層：暗灰色土(耕土)、第2層：褐色土(床土)、

第3層：明褐色土、第4層：黒褐色土、第5層：黄灰色土、第6層：灰褐色土(遺物包含層)、第7層：疊まじりの黄褐色土(地山)である。耕土から検出面までの深さは80～150cmであり、西から東にかけて緩やかな傾斜を持つ。遺物包含層からは縄文土器片(1～3)が数点出土し、SK5からも縄文土器片(4)が出土した。他に土坑(SK6・SK7)を検出したが、遺構の性格は不明である。



第25図 A地区平面図・土層断面図

## (2) B 地区の遺構 (第26図、P.L.11)

調査面積は約450m<sup>2</sup>である。基本層序は上から第1層：暗灰色土（耕土）、第2層：褐色土（床土）、第3層：灰褐色土、第4層：黄灰色土（地山）となる。耕土から検出面までの深さは、60~110cmであり、西から東にかけて緩やかな傾斜を持つ。遺物包含層中からは、縄文土器（7~9）、弥生土器（10~12）、土師器皿・鍋・甕、瓦器、山茶椀が出土した。量的には大半が奈良～鎌倉時代のものである。

検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居1棟（SH3）、平安時代の掘立柱建物1棟（SB1）、時期不明の掘立柱建物2棟（SB2・9）および土坑1基（SK4）である。

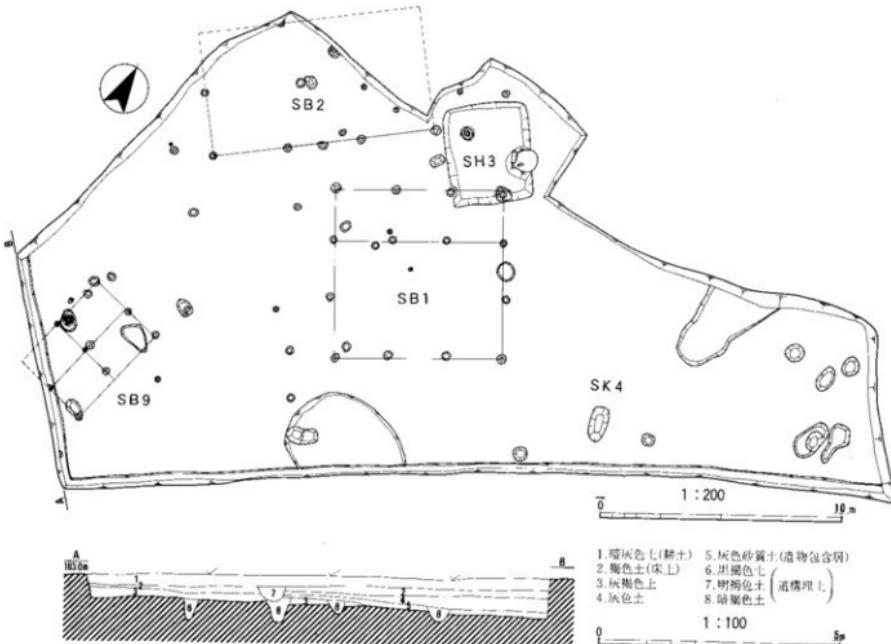
### A. 竪穴住居

SH3（第27図、P.L.12） 3.5m×4.0mの長方形を呈する建物である。床面積は約14.0m<sup>2</sup>となり床面までの深さは約25cmである。住居内での主柱穴、貯

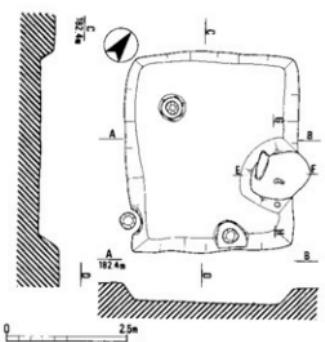
藏穴等は検出できなかったが、東側に袖部最大幅約1.5m、袖部約1mの張り出しを持つ竪（第28図）を検出した。断面観察の結果から、住居の床面を平坦に掘り下げた後、東壁から灰黄色土を馬蹄形に積み上げ、袖部を構築したものと思われる。袖部の内側は約10cmの厚さで焼けており、その上に焼土混じりの暗灰色土がマウンド状に堆積していた。竪の上部が崩れたためと思われる。又マウンドの上部で見られた二つの川原石は、竪の一部に使われていたものと思われるが、原位置を保っていない。右袖付近から、土師器碗（15）・甕（16・17）・瓶（18）が出土した。いずれも奈良時代のものと思われる。

### B. 掘立柱建物

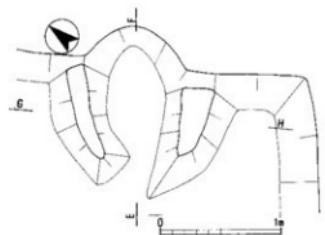
SB1（第30図、P.L.12） 桁行3間・梁行2間の身舎に北面廂をもつ掘立柱建物である。棟方向は30°Nである。柱間は桁行2.3m、梁行2.4mであり、廂との柱間は2.1mである。柱穴から黒色土器（19）



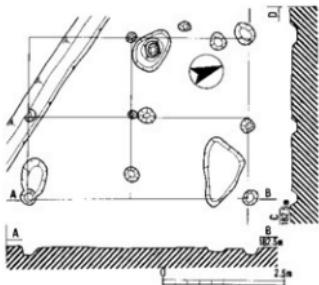
第26図 B地区平面図・土層断面図



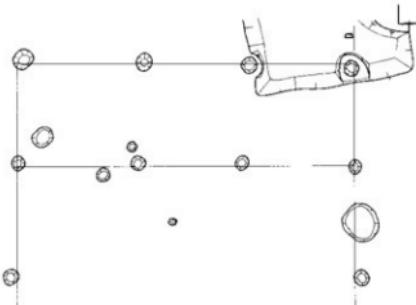
第27図 SH3実測図 (1:100)



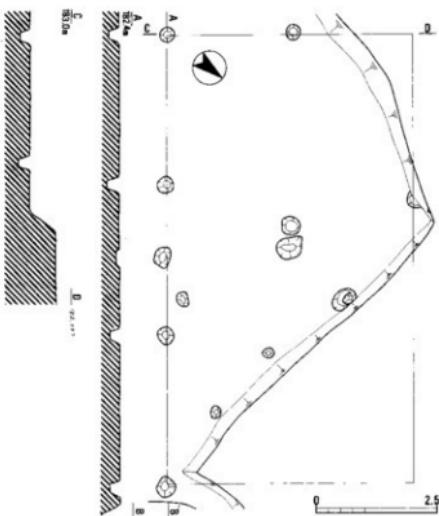
第28図 SH3実測図・土層断面図 (1:40)



第29図 SB9実測図 (1:100)



第30図 SB1実測図 (1:100)



第31図 SB2実測図 (1:100)

が出土しており、9世紀末～10世紀初頭の建物と思われる。

S B 2 (第31図) 東西3間以上・南北2間以上の側柱建物であり、おそらくは3間×2間の東西棟であろう。棟方向はE37°Nと推定される。柱間は桁行3.1m、梁行2.6mであり、柱間開隔が非常に広い建物である。柱穴から、土師器断片が出土している。時期は不明である。

S B 9 (第29図) 桁行2間以上、梁行2間の南北棟と思われる総柱建物である。棟方向はN13°Eである。柱間は桁行2.2m、梁行1.7mである。時期は不明である。

#### (3) C地区の遺構 (第32図、P.L.13)

調査面積は約50m<sup>2</sup>である。土層の基本層序は、上から第1層：暗灰色土（耕土）、第2層：黄灰褐色土（床土）、第3層：灰褐色土（遺物包含層）、第4層：黄褐色土（地山）となる。遺物包含層から土錐(22)が出土した。調査区北側で、径40cm程の円形のピット2基、径1m程の土坑1基を検出した。

#### (4) D地区の遺構 (第32図、P.L.13)

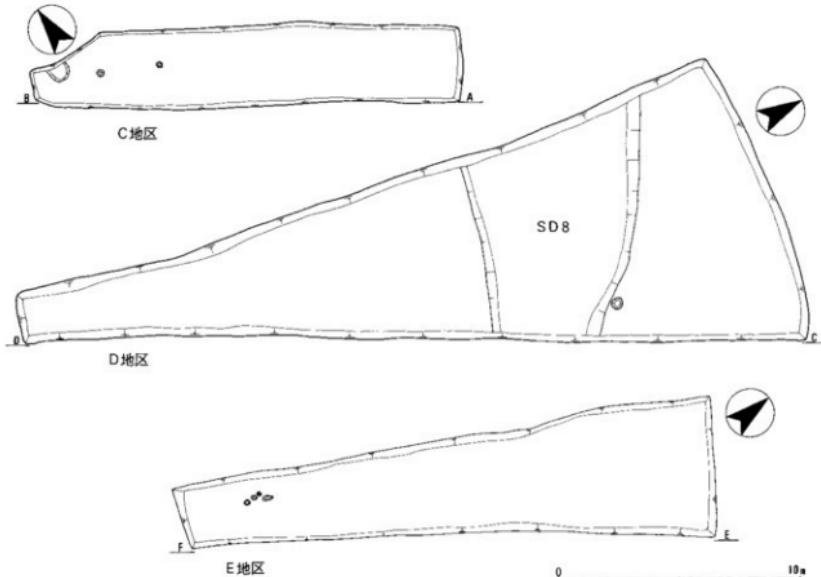
調査面積は約250m<sup>2</sup>である。土層の基本層序は上から第1層：暗灰色土（耕土）、第2層：明褐色土（床土）、第3層：灰褐色土（遺物包含層）、第4層：黄灰色土（地山）となり、耕土から検出面までの深さは約50cmである。調査区の北側で自然流路と考えられる溝（SD 8）を検出した。SD 8からは、楕円土器、黒色土器(25・26)の他、鎌倉時代の土師器皿・鍋、瓦器、山茶碗が出土した。

#### (5) E地区の遺構 (第32図)

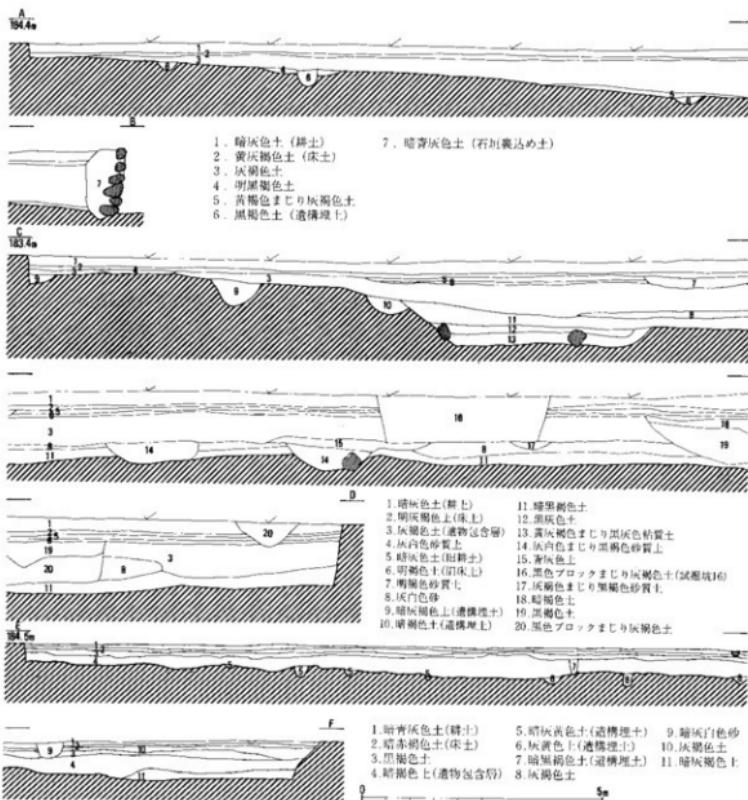
調査面積は約95m<sup>2</sup>である。土層の基本層序は上から第1層：暗青灰色土（耕作土）、第2層：暗赤褐色土（床土）、第3層：黒褐色土、第4層：暗褐色土（遺物包含層）、第5層：黄褐色土（地山）となり、耕土から検出面までの深さは約50cmである。調査区の西側で小ピットを検出した。遺物は出土しなかった。

#### (6) F地区の遺構 (第34図、P.L.14)

調査面積は約100m<sup>2</sup>である。第1層の耕土はすで



第32図 C・D・E地区平面図 (1:200)



第33図 C・D・E地区土層断面図 (1:100)

に除去されていた。土層の基本層は上から第2層：暗赤褐色土(床土)、第3層：暗灰褐色土、第4層：黒褐色土(遺物包含層)、第6層：黄褐色土(地山)となり、検出面までの深さは約60cmである。調査区の中央に東西に谷地形がはしり、その北側では掘立柱建物1棟と、建物としてはまとまらなかつたが小ピット多数を、南側では土坑と小ピットを検出した。

#### A. 掘立柱建物

S B 1 8 (第37図、P L.14) 衍行3間以上、梁行

2間以上の側柱建物で南北棟であると考えられる。棟方向はN17°Eである。柱間は衍行1.9~2.2m、梁行1.8~2.2mである。柱穴から出土した土師器皿(33)により、鎌倉時代の遺構であると考えられる。

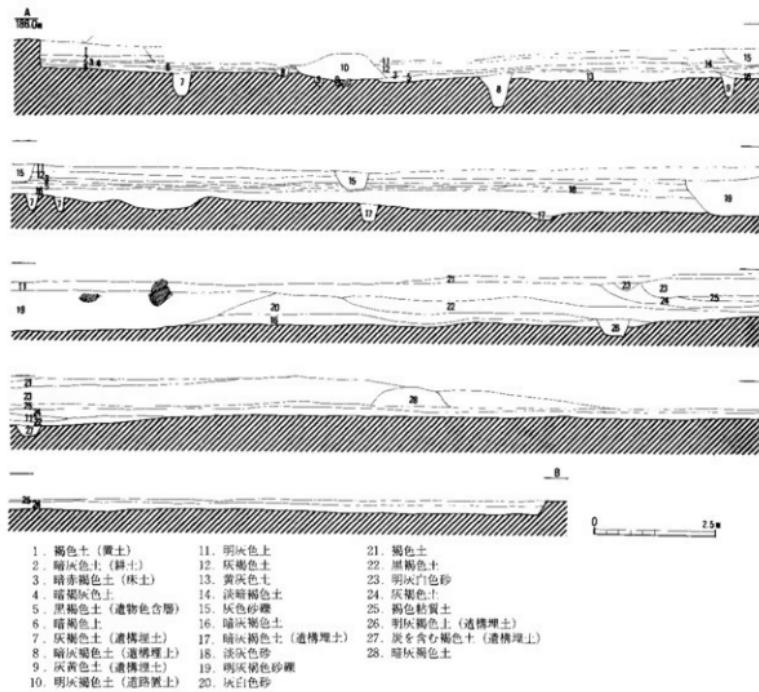
#### (7) G地区の遺構(第34図)

調査面積は約11m<sup>2</sup>である。土層の基本層はF地区とほぼ同じである。遺構、遺物ともみあたらなかつたが、土層断面にピットがみられた。

(石川隆郎、竹田憲治)



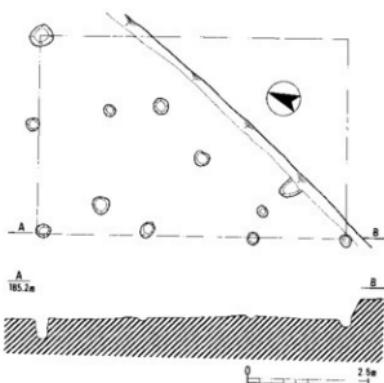
第34図 F・G地区平面図 (1:200)



第35图 F地区土层断面图 (1:100)



第36图 G地区土层断面图 (1:100)



第37图 S B 18实测图

### 3. 遺 物

(1) A地区(第38図、P.L.15)

#### A. 繩文時代の遺物

S K 5出土の土器 口縁部の破片(5)であるが、器形は不明である。口縁部は内弯ぎみにたちあがり、端部には面を持っている。文様はRの縄文を施した後に横方向の沈線を巡らせ、刺突文を施している。後期前半のものであると考えられる。

包含層出土の土器 いずれ(1)～(3)も体部片である。(1)は胎土に纖維を含む。横方向及び斜方向に条痕文を施し、その側面に刺突列を施す。早期後半とのものと考えられる。(2)は斜方向に条痕文を施す。早期後半とのものと考えられる。(3)は外面に細い縄文を継ぎ位に3段に巡らしている。後期に属する

ものと考えられる。

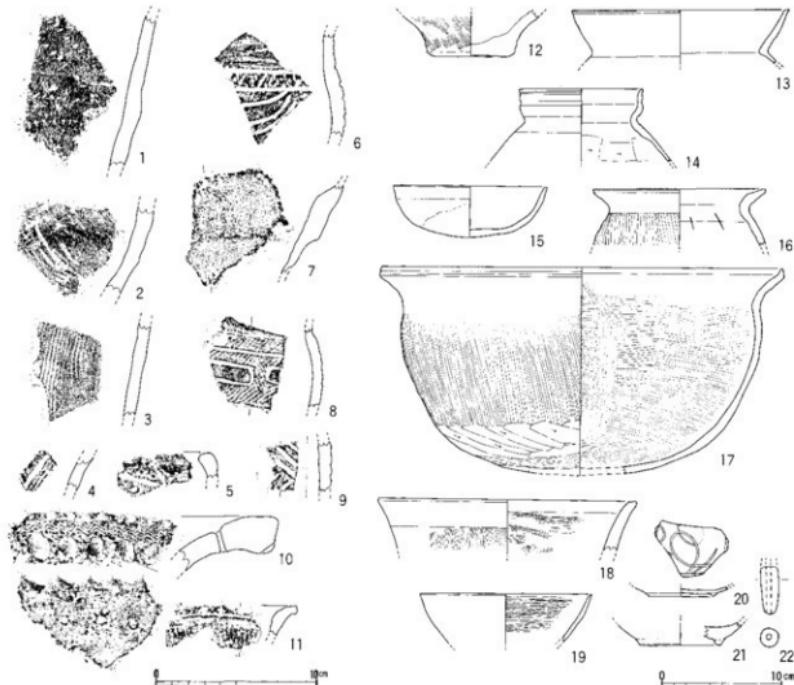
(2) B地区(第38図、P.L.15)

#### A. 縄文時代の遺物

S H 3出土の土器 体部片(4)であり、縄文を施したあと縱方向の沈線を2本いれている。

小ピット出土の土器 深鉢の体部片(6)で、外面に横方向の2本の沈線を施した後で、その間にL字の縄文を充填し、さらにその下に弧状の沈線を施している。後期前半のものであると考えられる。

包含層出土の土器 体部片(7)である。外面に段をつくり出している。文様はみられない。早期後半のものであろう。(8)は鉢の体部の破片で、内面外面ともにヘラミガキを施し、文様は横方向及び長方形



第38図 A・B地区出土遺物実測(1～11は1：3、12～22は1：4)

区画の沈線を施した後、L R の縦文を充填している。後期前半の北白川上層式に併行すると考えられる。(9)は体部の破片で斜方向の沈線を交互に施す。後期に属するものと考えられる。

B. 弥生時代の土器 いずれも包含層から出土した。(10)は壺の口縁部片である。内面の口縁部近くに太い沈線を一条巡らし、外面には口縁部に櫛による波状文を施した後、上下に刻みを入れている。頸部には外面から棒状工具で刺突文を施す。中期前半のものと考えられる。(11)は壺の口縁部片である。壺部には刻みを入れ、内面には横方向、外面には縱方向にハケによる調整を施す。中期前半のものと考えられる。(12)は壺の底部片で、外面にハケによる調整を施す。

C. 古墳時代の土器 いずれも包含層から出土した。(13)は土師器壺の口縁部片である。内外面とも口縁部をヨコナデを施し、体部にはナデを施している。外面体部にはヘラミガキを施しているかとも思われるが、明瞭でない。(14)は土師器壺の口縁部片である。頸部が直立し、口縁部はやや受口状を呈する。口縁端部はつまみ上げるようにし、丸く終る。内外面とも丁寧にナデを施し、体部内面にはヘラケズリを施す。外面体部にはヘラミガキを施しているかとも思われるが、明瞭でない。口縁部の外面に沈線を入れている。

#### D. 奈良時代の土器

S H 3 出土の土器 (15)は口径12.8cm、器高4.3cmの壺である。奈良時代のものであろう。(16)は土師器の小型の壺である。内面の体部にはナデを施している。口縁端部に面を作りだしているが、あまり明瞭ではない。(17)は土師器の浅い大型壺である。

口縁端部はつまみ上げるようにして面を作りだしている。(18)は土師器の直立する口縁部片である。一応壺とした。

#### E. 平安時代の土器

S B 1 出土の土器 (19)は黒色土器A類の壺であるが、炭素の吸着は口縁部外面にも及ぶ。体部は内弯ぎみに立ち上がり、端部は尖りぎみに終わる。内面にはミガキを施し、外面は口縁部にヨコナデを施す。体部には簡単なナデを施しているがユビオサエの痕跡が残っている。9世紀末～10世紀初頭のものと考えられる<sup>9</sup>。

#### F. 平安時代末～鎌倉時代の土器 いずれも包含層から出土した。

(20)は瓦器壺の底部片である。器壁が薄く、底部内面には連続輪状紋がみられる。山田猛氏の編年によるII段階3～4型式にあたり、12世紀後半のものと考えられる。(21)は山茶壺の底部片で、ローリングを受けている。産地は渥美産、藤澤良祐氏の編年による第6型式に相当すると考えられる<sup>9</sup>。

#### G. その他の土製品 包含層から出土した。

(22)は土師質の管状の土錘で重さは7.8gである。

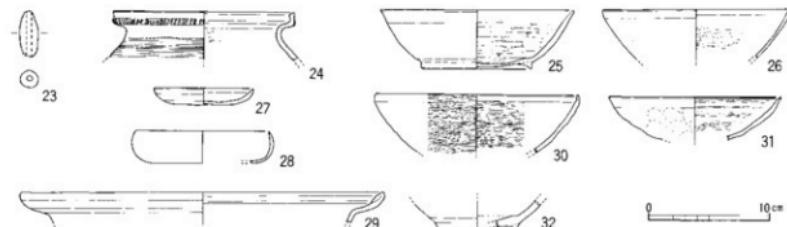
#### (3) C 地区 (第39図、P L.15)

土錘 (23) 包含層から出土した管状の土錘で、重さは6.5gで、端部を尖らせている。

#### (4) D 地区 (第39図、P L.15)

#### A. 弥生時代の土器 いずれも包含層から出土した。

(24)は受口状の口縁の壺であり、壺部には面をもつている。内面にはヨコナデを施すが、頸部付近にはハケの痕跡が残る。外面は口縁部にヨコナデを施したのち、2個が一对となった凸縁と櫛による縱方向の刺突文を施す。体部には櫛による横方向の刺突文



第39図 C・D地区出土遺物実測図 (1:4)

と描横線を施す。近江系の壺で、後期のものであると考えられる。

#### B. 平安時代の土器

S D 8 出土の土器 黒色土器 (25・26) がある。

(25) は口縁部が僅に残存する A類の椀である。炭素の吸着は口縁部外面にも及ぶ。体部には簡単なナデを施しているが、オサエの痕跡が残っている。10世紀のものと考えられる。(26) も A類の椀で、内面には底部、体部の順でヘラミガキを施す。外面には口縁部にヨコナデを施し、体部、底部にも簡単なナデを施しているが、オサエの痕跡が残っている。10世紀のものと考えられる。

C. 鎌倉時代～室町時代の土器 いずれも包含層から出土した。

土師器小皿 (27) は口径8.2cmの小皿である。土師器皿 (28) は口径11cmの皿である。土師器鍋 (29) は口縁部を折り返しておらず、折り返し部分の断面は隅丸の三角形である。内面・外面ともにヨコナデが施される。口縁部から頸部外面に煤が付着する。伊藤裕偉氏の編年による2段階c型式にあたり、13世紀～14世紀のものと考えられる。

瓦器椀 (30・31) はいずれも口縁部の破片である。(30) は口縁端部が巻き込むように終わる。内面は体部に密にミガキを施し、口縁端部には浅い沈線を巡らし、外面にも密にミガキを施す。山田編年によるI段階にあたり、11世紀後半から12世紀初頭にかけてのものと考えられる。(31) は内面のミガキが粗で、口縁端部には沈線を巡らす。外面には口縁部にヨコナデが施されるが、体部にはユビオサエの痕跡が残る。山田編年によるII段階1型式にあたり、13世紀初頭のものと考えられる。

陶器山茶碗 (32) 底部の破片である。産地は渥美産で、時期は藤澤編年による第6型式に相当し、13世紀前半のものと考えられる。

(5) F地区 (第40図、P.L.15)

いずれも鎌倉時代から室町時代に属する。

S B 1 8 出土の土器 土師器皿 (33) 口径12cmで、口縁部の内面にはヨコナデを施し、外面には布状の圧痕跡が残る。鎌倉時代のものと考えられる。

包含層出土の遺物 (34) は土師器の小皿である。口径7.8cmで、胎土は密なものを用いている。口縁部

の内外面にはヨコナデを施す。口縁端部に浅い沈線を巡らす。産地は伊賀である可能性がある。(35) は土師器の皿である。口径11cmで、胎土は密なものを用いている。焼成はあまり良くなく、ユガミが激しい。室町時代のものと考えられる。(36) は土師器の鍋で、口縁部を折り返し、ナデついている。口縁部内面・外面ともにヨコナデを施し、外面の頸部以下には粗い横方向のハケによる調整を施す。伊藤編年による第3段階a型式、14世紀後半のものと考えられる。(37) も土師器の鍋である。折り返し部分の断面は隅丸の三角形である。口縁部内面・外面ともにヨコナデを施す。外面頸部以下には縦・横方向のハケによる調整を施し、内面頸部以下にはケズリを施す。伊藤編年による第4段階d型式、16世紀前半のものと考えられる。

(38) は瓦器の小皿で、内面にはジグザグ状の暗文がみられる。また、外面には粘土の練ぎ目がみられる。山田編年によるII段階の後半に属するもので、12世紀後半のものであろう。

(39) は山茶碗系の小皿で、産地は渥美産である。藤澤編年による第6型式に属するもので、13世紀前半のものと考えられる。

(40) は天目茶碗である。高台周辺は露胎であり、高台は内反り高台である。藤澤良祐氏の編年による後III期に属するもので、15世紀前半のものであろう。

(41) は茶臼の上白の外堤部で、径は18～20cmであろう。材質には細粒砂岩をもち、外面には条線状の工具痕跡が残る。

(42) は方頭形の鉄鍬の先端で、中茎部分は途中から欠損している。断面形は、鍬身が両刃の偏平な形で、頸部と茎部は円形である。

その他の遺物 (43～45) の内 (43) は長さ11.7cmの鉄製工具と思われる。先端部分の断面形が偏平で、下部の断面形は方形である。最下部は尖らせている。

(44) は火打ち鎌、(45) は小刀の鞘に使用する金具ではないかと思われる。

(6) 試掘坑出土の遺物 (第40図)

いずれも試掘坑20から出土した遺物である。

青磁碗 (46) 底部内面に印刻花文を施す。高台周辺は露胎である。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

不明鉄製品（47）断面が隅丸の四角形を呈する。釘ではないかと思われる。

(7) 調査区外出土の土器 (第40図、P L.15)

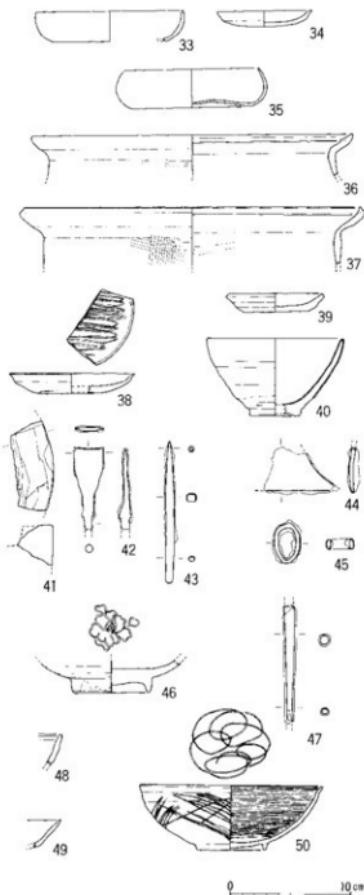
瓦器碗（48）～（50）（48）は口縁部の小片で、焼成は他の瓦器に比べるとやや軟かい。器壁が厚く、口縁部内面の沈線は太く、端部よりやや下に位置する。山田編年によるⅠ段階2型式、11世紀後半のも

のと考えられる。（49）も口縁部の小片で、イブシのかかりが悪い。山田編年によるⅢ段階3～4型式、13世紀後半～14世紀初頭ものと考えられる。（50）は内面に螺旋状の暗文と丁寧なミガキを施す。外面にはやや粗いミガキを3単位で施す。山田編年によるⅡ段階2型式、12世紀前半のものと考えられる。

(竹田憲治)

(註)

- ① 繩文時代の土器については、三重県立松阪高等学校教諭奥義次氏のご教示を得た。
- ② 大川勝宏「斎宮の黒色土器」（『斎宮歴史博物館研究紀要二』斎宮歴史博物館、1993年）
- ③ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究II』中世土器研究会、1986年）
- ④ 麻澤良恵「瀬戸古窯跡群II」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 瀬戸市歴史民俗資料館、1982年）、『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』II（瀬戸市歴史民俗資料館、1983年）、「山茶碗と中世樂器」（『尾昂』瀬戸市教育委員会、1990年）
- ⑤ 伊藤裕作「中世伊勢系の土器」（『Mie History』1 三重歴史文化研究会、1990年）
- ⑥ 麻澤良祐「古窯戸後期様式の編年」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館、1991年）
- ⑦ 鉄錐の部分名前については杉山秀宏「古墳時代の鐵錐について」（『櫛原考古学研究論集』第八 櫛原考古学研究所、1988年）によった。



第40図 F地区等出土遺物実測図 (1:4)

No.	登録No.	器種	出土位置 遺 墓	法量 (cm)			調査技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度 (%)	備 考
				口径	底径	器高						
1	002	縄文土器 体部片	A地区 包含層				条痕文、刺突文	0.5mmの砂粒含む	良好	にぶい褐色	小片	
2	002	縄文土器 04 体部片	*				条痕文	1~2mmの砂粒含む	*	にぶい黄褐色	*	
3	003	縄文土器 01 体部片	*				縄文	0.5~1mmの砂粒含む	*	*	*	
4	005	縄文土器 08 体部片	B地区 SRA				縄文、沈縞	1mmの砂粒含む	*	*	*	
5	005	縄文土器 05 口縁部	B地区 SK4				縄文、沈縞、刺突文	*	*	*	*	
6	005	縄文土器 06 深縫体部	B地区				沈縞、縄文	3mmの砂粒含む	*	灰黃褐色	*	
7	004	縄文土器 07 体部片	B地区 包含層				丸様なし	1mmの砂粒含む	*	褐色	*	
8	004	縄文土器 06 附縫部片	*				内外面ミガキ、沈縞、縄文	密	*	にぶい褐色	*	
9	004	縄文土器 04 体部片	*				沈縞	1mmの砂粒含む	*	浅黄色	*	
10	004	弥生土器 02 瓢	*				沈縞、波状文、刺み、刺突文	*	*	にぶい黄褐色	*	
11	004	弥生土器 08 瓢	*				刺み	1.5~2mmの砂粒含む	*	*	*	
12	003	弥生土器 05 瓢	*				ハケメ	1mmの砂粒含む	*	にぶい褐色	底部 80%	
13	003	土師器 04 壺	*	18.2			口縁ヨコナデ、体部ケズ	粗砂粒を含む	*	浅黄色	15%	
14	006	土師器 06 壺	*	16.2			内面：ヨコナデ、ナダ 外面：ヨコナデ、ナダ、沈縞	1~1.5mmの砂粒含む 軟	やや 明灰褐色	25%		
15	005	土師器 01 瓶	B地区 SII3	12.5	4.3		内面：ヨコナデ、ナダ 外面：*	粗砂粒を含む	良好	浅黄色	完形	
16	001	土師器 02 瓶	*	14.4			内面：ヨコナデ、ハケメ 外面：ヨコナデ、ハケメ	密	*	*	35% 内面に工具痕	
17	001	土師器 01 瓶	*	33.5			内面：ヨコナデ、ハケ後ナデ 外面：ヨコナデ、ハケ、ケズリ	2mmの砂粒含む	*	*	50%	
18	005	土師器 02 盤	*	23.5			内面：ヨコナデ、ハケメ 外面：*	密	*	にぶい褐色	15%	
19	006	黑色土器 04 瓶	B地区 SB1	11.2			内面：ミガキ 外面：ヨコナデ、ナダ	*	*	褐色	8%	
20	003	瓦器 06 瓦	B地区 包含層	高台径 5.4			逆筋輪伏文	*	*	表面：灰色 断面：灰白色	高台 40%	
21	003	陶器 02 山形例	*	高台径 6.8				粗砂粒含む	*	灰白色		
24	007	黑色土器 05 瓶	D地区 包含層	15			内面：ヨコナデ、ハケメ 外面：凸帶、刺突文、拂拭文	1mmの砂粒含む	*	明灰褐色		
25	007	黑色土器 02 瓶	D地区 SD8	16			内面：ミガキ 外側：ナダ、ミガキ？	密	*	外側にぬれ褐色		
26	007	黑色土器 03 瓶	*	15.5			内面：ミガキ 外側：ヨコナデ、ナダ、ミガキ？	*	*	*		
27	008	土師器 03 小皿	D地区 包含層	8.2	1.4		内面：ナダ 外側：ヨコナデ、オサエ	密	良好	にぶい黄褐色	30%	
28	008	土師器 04 盤	*	11			内面：ナダ 外側：オサエ	0.5~1mmの砂粒含む	*	白色		
29	009	土師器 01 瓶	*	30			ヨコナデ	0.5mmの砂粒含む	*	にぶい黄色		

第6-1表 出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法面(cm)			測量方法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考
				口径	底径	器高						
30	008	瓦器	D地区 01 陶	15.8			内面：ミガキ面 外面：ミガキ面	害	良好	表面：灰色 断面：白黄色	10%	
31	007	*	*	14.2			内面：ミガキ面 外面：ココナヂ、オサエ	*	*	表面：暗灰色 断面：乳白色		
32	008	陶器	06 山形窯	*		6.6	系切り痕残る	*	*	灰白色 底部 20%		
33	010	土器器	F地区 田	12.0			内面：ナデ 外面：オサエ	0.5mmの砂粒を含む	*	浅黄褐色	13%	外側赤状
34	011	土器器	F地区 01 小窯	7.8			内面：ナデ 外面：ヨコナヂ、オサエ	害	*	*	25%	
35	010	土器器	02 巨	*		11.0	内面：ナデ 外面：ヨコナヂ	*	やや 軟	*	10%	焼成ユガミ 大きい
36	010	土器器	05 鍋	*		26.4	内面：ヨコナヂ 外面：ヨコナヂ、ハケメ	2~3mmの砂粒含む	良好	にじい模	17%	
37	010	*	*	27.8			内面：ヨコナヂ、ハラケヅリ 外面：ヨコナヂ、ハケメ	害	*	浅黄褐色	17%	
38	011	瓦器	02 小皿	*	10.4	1.6	内面：ジグザグ状線 外面：ヨコナヂ、オサエ	*	*	表面：暗灰色 断面：灰白色	30%	
39	010	陶器	01 山皿	*	7.8	1.5		3~4mmの砂粒含む	*		完形	
40	010	陶器	02 天日茶碗	*	11.2	4.2	9.9	内反り素白 高台周辺堅化	1mmの砂粒を含む	表面：黒褐色 断面：深黄褐色	底部 40%	
46	009	磁器	試掘坑 青磁陶	*		6.2	底部外面堅化	害	*	表面：黒少々褐色 断面：灰褐色	底部	
48	012	瓦器	調査区外 陶					*	やや 軟	表面：灰色 断面：灰白色	小片	
49	012	*	*					*	灰白色	*	イブシのかか り悪い	
50	012	*	*	15		6.3	内面：ミガキ 外面：やや粗なミガキ	*	良好	表面：灰白色 断面：白色	ほぼ 完形	

第6-2表 出土遺物観察表

## 4. 結論

### (1) 中世の八知について

今回発掘した調査区内では奈良～鎌倉時代の集落跡を検出することができた。雲出川と老ヶ野川の合流点付近という立地を考えても、この地は集落の適地であったのであろう。ただし、大きな集落が立地するには平地は乏しく、調査区の土層断面を観察しても、遺物包含層の上に10cm以上の縁を含む層がみられることから、土砂崩れなどの被害を受けやすい所であったと考えられる。むしろ、集落の中心はさらに合流点に近い所にあったのであろう。

位置と環境の項でも述べたが、中世後期の八知は大和国宇陀郡に本貫地とする澤氏が、北畠氏から与えられた分領であった。「澤氏古文書」には八知に

勢力を持つ「東川八郎兵衛」や「東川名」が現れるが、今回発掘調査を行った字「東川」の地は、それらと何らかの関連を持つものであろう。

また、八知地区的字切図等を観察すると、老ヶ野川を週って大字伊勢地にぬける「達坂峠」に沿っては小字が複雑に入り組んでおり、この地域の開発が古くから行われていたことが推測される。さらに、澤氏との関連を想起させる「澤」という字名もみられることも注目できる。

### (2) 東川遺跡の中世土器について

発掘調査によって整理箱11箱分の遺物が出土したが、そのうち中世の遺物のみを抽出したのが第7表である。以下にこれを器種別に検討を加えていくが、

破片数を数えたものであり、厳密には個体数ではない。

椀 楓形態の土器は合計78点（口縁部36点）みられた。このうち瓦器椀・山茶椀の大部分は13世紀代のものである。ただし山茶椀が13世紀代のものしか出土していないのに対し、瓦器は11世紀中頃以降連続して出土している。この地域では山茶椀・瓦器が併用されたと考えられるが、数量的には瓦器の比率が圧倒的に多く、山茶椀は客体的な存在でしかない。また、少數であるが、天目茶椀や、青磁椀も出土している。

小皿・皿 小皿・皿形態の土器は合計46点（口縁部33点）出土した。多くが細片であったので小皿と皿との判別は非常に困難であった。しかし、両者のほとんどがいわゆる南伊勢系の土器であり、瓦器小皿や山皿はごく少ない。

鍋・羽釜 この形態の土器は合計167点（口縁部・鉢部29点）出土した。鍋は13世紀～16世紀代のものまで出土し、いずれも南伊勢系の鍋である。また、羽釜も3点出土した。

鉢 この形態の土器は合計3点（口縁部1点）出土し

材質	機種	破片数	うち口縁部数
土器	皿	40	17
	小皿	14	4
	鉢	164	26
	羽釜	3	3
器	不明	3	0
	小計	224	50
瓦器	椀	57	30
	小皿	1	1
	不明	20	0
	小計	78	31
無釉陶器	山茶碗	17	5
	山皿	2	2
	鉢	3	1
	甕	5	0
	小計	27	8
施釉陶器	天目	2	1
	その他	1	1
	小計	3	2
貿易陶器	青磁椀	2	0
	小計	2	0
合	計	334	91

第7表 東川遺跡中世土器構成表

た。絶対数が少ないが、いずれも常滑・渥美産の陶器である。信楽焼や瓦質土器は全く出土しなかった。

甕 この形態の土器は5点のみ出土した。胎土の観察では、すべて常滑産ではないかと思われる。

その他 土器には含まれないが茶臼の上臼が出土している。時期は不明であるが、天目茶椀とともに喫茶の風習があったことを窺わせる。

以上、各器形別に検討を加えてきたが、東川遺跡の中世土器の傾向をみていくと特に注目されるのは楓形態の土器における瓦器椀の占める割合が数量的にも時間的にも非常に高く、伊勢国内の中世集落とはかなり異なる様相を呈していることである。雲出川流域においては、上流にいくにしたがって瓦器椀の分布が徐々に多くなることは從来より指摘されていたことであるが、今回の調査においてこの傾向が予想以上に顕著であることが確認できた。「位置と歴史的環境」の章では宇陀郡大宇陀町大藏寺の地蔵菩薩胎内の延応元（1239年）の記年銘を持つ摺仏をあげた。これにみられる延応元年という時期は多く出土した瓦器の時期とほぼ一致し、八知において共同発願された仏像が宇陀に存在するという事実は、中世前期の八知と大和国との関係を考える上で極めて示唆的である。

また、土師質では、椀以外の小皿・皿や鍋はほとんどが南伊勢系のものであり、また一方、陶器では、鉢や甕はほぼ全てが尾張・三河よりのものである。この時代の土器の流通範囲が、器種ごとに異なっており、重層的な様相をみせることも注目すべきである。

さらに、出土した土器の構成を土師器・瓦器・無釉陶器・施釉陶器：貿易陶器にみると、302:27:3:2となり、ほぼ90:9:1:1の割合となる。貿易陶器の割合は馬場遺跡における割合とはほぼ等しく、中世の集落において、極めて少數ではあるものの一定の数量を占めているのであろう。

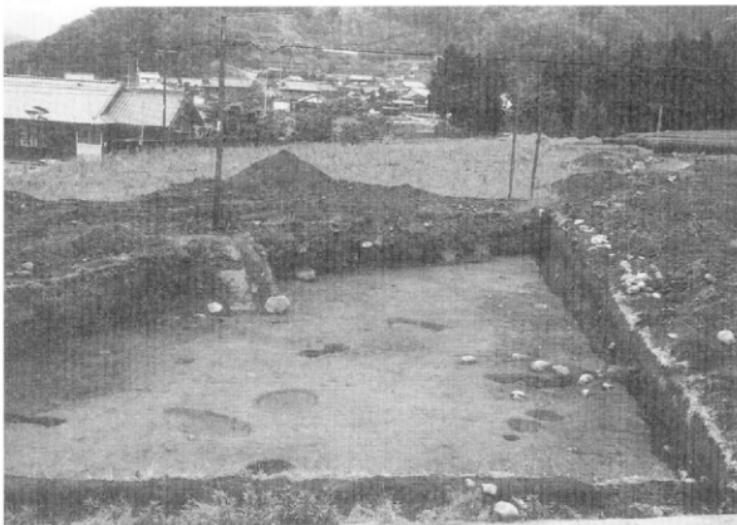
（竹田憲治）

（註）

① 和氣清章「伊勢・伊賀における中世土器の様相——瓦器椀を中心として——」（『大和の中世土器』大和古文書研究会、1992年）

② 森前松・山田猛「上野市吹田堀遺跡」（『昭和56年度県立埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1982年）

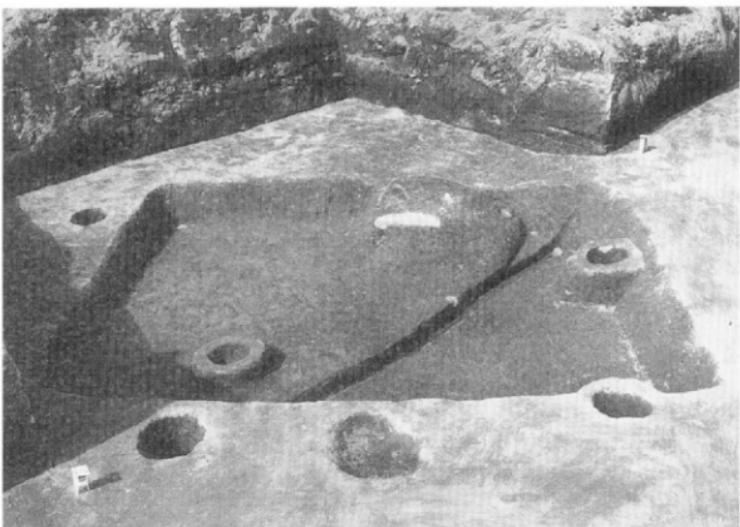
P L 11



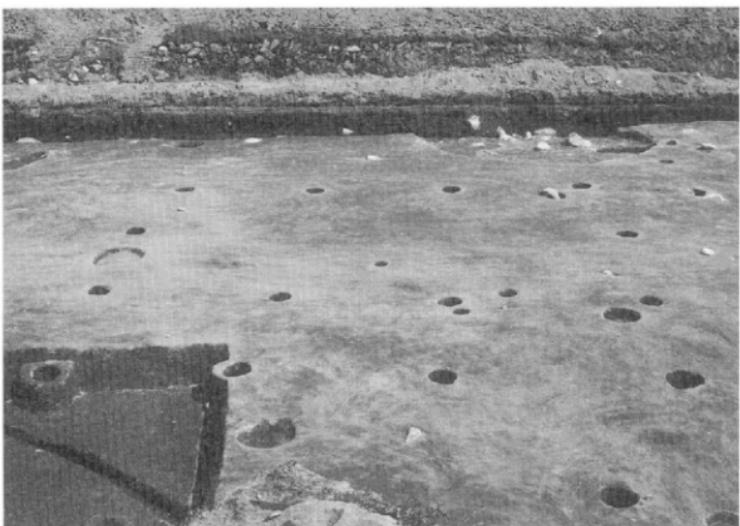
A地区全景（西から）



B地区全景（西から）



S H 3 (西から)



S B 1 (北西から)

P L 13



C地区全景（南東から）



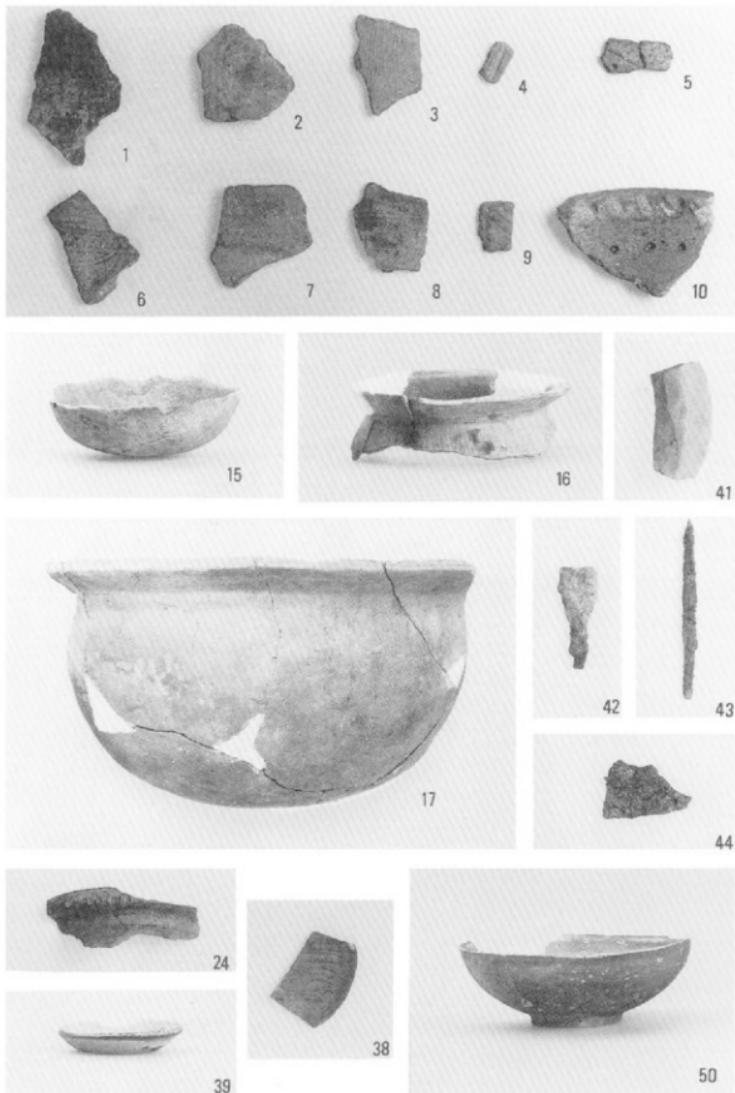
D地区全景（北から）



F地区全景（北から）



SB 18（北から）



出土遺物 (1 : 3)

付編. 立会調査遺跡等



## 1. 名賀郡青山町

今回の発掘調査は、平成5年度の県営は場整備事業にともなう調査である。分布調査、試掘調査の結果、事業地内に1,350m<sup>2</sup>にわたり遺跡が広がっていることが判明した。そのうち、事業により削平をうける120m<sup>2</sup>について本調査をおこなった。

当遺跡（標高228m前後）は、南北2つの丘陵にはさまれた小糸谷川の扇状地の先端部分にあたり、南東から北西にかけて緩やかに傾斜している。小糸谷川は当遺跡の南側を西流し、見合谷川に合流して木津川にそそぐ。

### (1) 土層

調査区の標高は約228mでほぼ平坦である。土層は暗渠排水路等の搅乱をうけて複雑になっており、遺構の残りもあまり良くない。基本的には耕作土（第1層）、床土（第2層）の下に第3層をはさみ、検出面の第4層（青灰色砂）となる。

### (2) 遺構

#### a. 土坑

SK1 一辺が3mの堅穴状の方形と考えられる土坑であるが、南西部は調査区外のため確認できなかつた。深さは検出面から中央部で20cm、縁辺部で5cm程度と中央部がへこんだ形になっている。遺構の平面形からは堅穴住居ではないかと思われたが、断面

## 久保遺跡

形と遺物の出土状況から土坑と判断した。遺物は若干の土師器が出土したのみである。

SK2 SK1の西にある椭円形の土坑である。深さは検出面から20cmで北東部が最も深い。遺物は土師器と瓦器が出土した。

SK5 SK2の西にあるほぼ方形の土坑である。南の隅に三角形のテラスを有する。テラス部と底との比高差は約40cm程である。遺物は土師器の皿が出土している。

SK7 SK1の南東に位置するほぼ円形と考えられる土坑である。深さは検出面から5cm程度ではほぼ平坦であるが、北西部が若干低くなる。遺物は土師器の甕、黒色土器、瓦器の椀が出土している。

SK12 調査区の南端で検出された不定形の土坑である。底面はほぼ平坦で深さは検出面から6cm程と残りは悪い。遺物は土師器の皿、瓦器の椀が出土している。

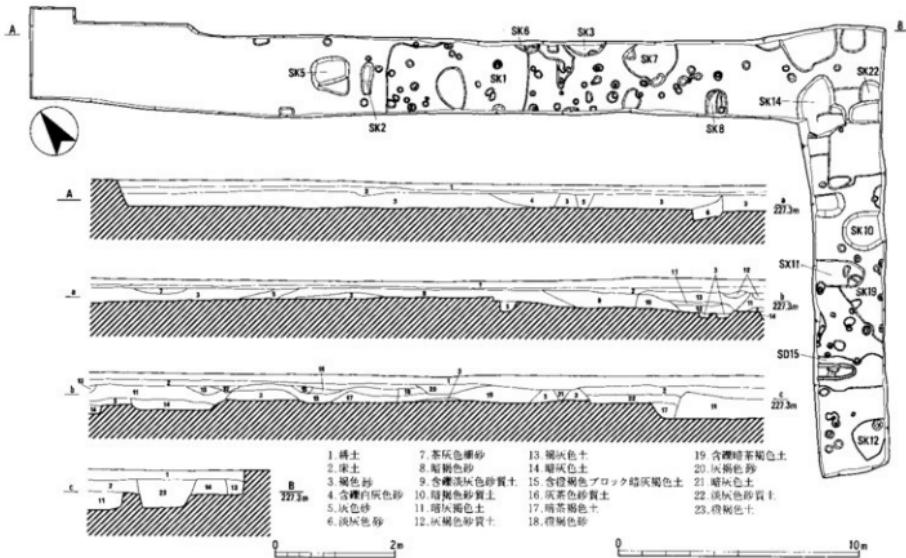
SK14 調査区のコーナーの内側で検出された不定形の土坑である。深さは検出面から33~38cmで北東部は若干低くなる。遺物は底部付近から完形の土師器の皿と石製刀子が出土した。出土遺物から中世墓の可能性も考えられるが、断定できないため、ここでは土坑としてあつかつた。



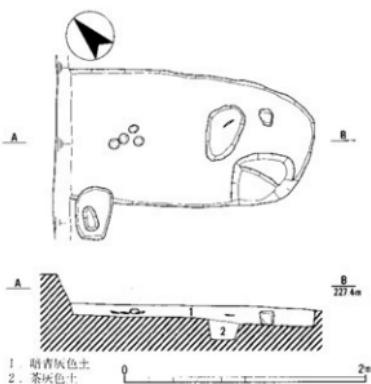
第41図 遺跡位置図 (1:5,000)



第42図 調査区位置図 (1:2,000)



第43図 遺構平面図(1:200)、土層平面図(1:80)



第44図 S X11遺物出土状況(1:40)

SK19 SX11にきられる形で検出されたが、残りが非常に悪く、東側の肩は検出できなかった。遺物は土師器の杯身、須恵器の杯身・杯蓋が出土した。

#### b. 溝

SD15 検査区内ではその一端のみ検出できただけであるが、南東から北西にかけてのびる溝である。

幅が96cm、深さは検出面から30cmで、断面は逆台形である。遺物は土師器の小片が出土している。

SD23 検査区を南東から北西に直角に横切る溝で、幅は約1m50cmであるが、検出面からの深さが10cm未満と残りが悪く、断面形も不明である。中央部を別の溝にきられる。土師器、瓦器の小片が出土している。

#### c. 中世墓

SX11 SK19をきるかたちで検出された土坑墓である。北西部分は検査区外であるため断定はできないが、残存部分から推測すると、平面形は楕円形で長軸2m以上、短軸1.12mとなり、深さは検出面から約10cmである。主軸方向はN-42°-Wである。埋土は暗青灰色土で骨片は含まれていない。また、壁や底面に焼土の痕跡も認められなかった。土坑墓内には中央南寄りと南端に柱穴が2つと15cm大の石が確認されたが、土坑墓との関係は不明である。遺物は刀子と完形の土師器の皿が4個体集中して出土した。

#### (3) 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナバットで約

5箱である。若干の須恵器もみられるが、遺物の殆どが鎌倉時代～室町時代のものである。以下、遺構別に述べる。

#### a. SK3出土遺物

土師器皿(1) 口径8.0cm、高さ1.5cmで、全体的に丸みをもつ。口縁端部は丸くおさめる。

#### b. SX11出土遺物

土師器皿(2)～(5) 口径8.4～9.0cm、高さ1.2～1.5cmである。(3)の口縁部は端部で若干立ち上がり、丸くおさめる。(4)(5)は底部から屈曲をもって立ち上がる。胎土はいずれも微砂粒を含む。

#### c. SX14出土遺物

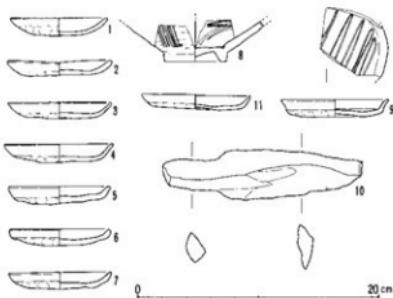
土師器皿(6)(7) 口径8.2～8.5cm、高さ1.3cmで器壁は厚く、端部を丸くおさめる。胎土は微砂粒を含む。瓦器皿(9) 口径8.8cm、高さ1.4cmで、体部は底部から屈曲をもって立ち上がり、外弯して口縁端部を丸くおさめる。内面底部に暗文を残すのみで、みがきは見られない。

青磁碗(同安窯系)(8) 高台径5.1cmで、高台は削りだしで、内面の体部と底部の境に沈線をもつ。外面にはけめ状、内面に列点状の文様をもつ。外面体部と内面に浅黄色の釉を施す。

石製刀子(10) 刀部がむき出しの石製刀子で、表面は刃側を除いてほとんど割れている。石材は砂岩と考えられる。

#### d. 表面採集遺物

土師器皿(11) 口径9.0cm、高さ1.1～1.3cmで、体部は屈曲ぎみに立ち上がり口縁端部は尖りぎみにおさめる。胎土に微砂粒を含む。



第45図 遺物実測図（1：4）1はSK3、2～5はSX11、6～10はSK14、11は表探

#### (4) 結語

今回の調査は調査面積が小さかったために多くのことは得られなかつたが、若干の考察を加えてみたいと思う。

当遺跡の出土遺物には少量の須恵器もみられるが、須恵器を伴う時期の遺構は確認できない。しかし、調査区の周辺にこの時期の遺構の存在を想定するには十分であろう。

出土遺物は瓦器等の中世遺物との伴出がほとんどであり、当地域に人の手が加わるのは12世紀末～13世紀初頭にかけてと思われる。この頃から15世紀にかけて多数のビットや土坑が掘られるが、特筆すべきは土坑墓のSX11であろう。土師器の皿と刀子が、床面から前者が1cm、後者は5cm程浮いた所で出土しており、13世紀初頭のものと思われる。この他にも土坑墓と思われるSK14や、また完形の土師器の皿が採集されていることから、土坑墓群の可能性も考えられる。12世紀末～13世紀初頭にかけて本地域周辺に墓域が形成され、調査区はその縁辺部にあたるのではないだろうか。

なお、SK14から出土した石製刀子についてここで少しく述べておきたい。一般的に石製刀子は5世紀を中心とした古墳の副葬品や祭祀遺跡の遺物として出土する。これらは大別して刀身を鞘におさめたものと、刀身がむきだしになっているものに分けられる。数的には前者のものが多く、特に古墳の副葬品はほとんどが前者である<sup>①</sup>。SK14から出土した石製刀子は鞘がなく、伴出した遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。したがって上記とはまったく異なる状況で出土していることになる。単なる混入か、それとも何らかの意味をもって埋納されたものか疑問の残る点であるが、ここでは他の出土遺物や周囲の状況からみてSK14は土坑墓で石製刀子も後者の可能性が高いと考えられるが断定はできない。ちなみに県内の中世土坑墓から石製刀子が出土した例がない<sup>②</sup>。

(浜口 元)

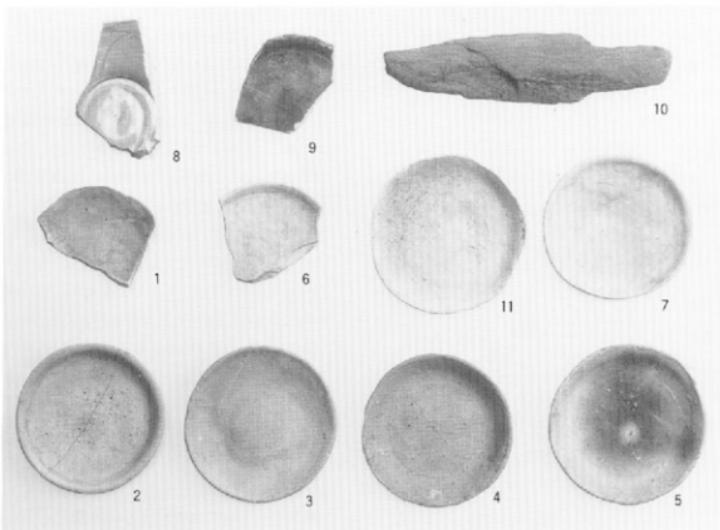
#### 〔註〕

① 杉山晋作「石製刀子とその使用」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 本編』 1985年

② 『三重県の中世墓』三重県総合文化財センター 1992年



S K 14・22・10・19、S X 11、S D 15（南西から）



出土遺物

## 2. 安芸郡芸濃町

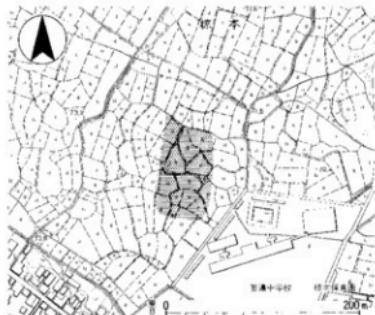
### 金谷遺跡

金谷遺跡は安芸郡芸濃町大字掠本字金谷に所在する。現況は水田である。調査期間は平成5年9月6～13日で、調査区の北側約50m<sup>2</sup>をA地区、南側約110m<sup>2</sup>をB地区とした。

調査区の基本層序は上から耕土(20～30cm)、灰褐色土(20cm)、黒褐色土(遺物包含層:20cm)、黄灰色土(地山)となる。

A地区では、ピットがいくつか検出されたが、遺物はPt1から陶器壺の細片が出土したのみである。

B地区では、幅20m、深さ1m程の自然河道(S



第46図 遺跡地形図(1:5,000)



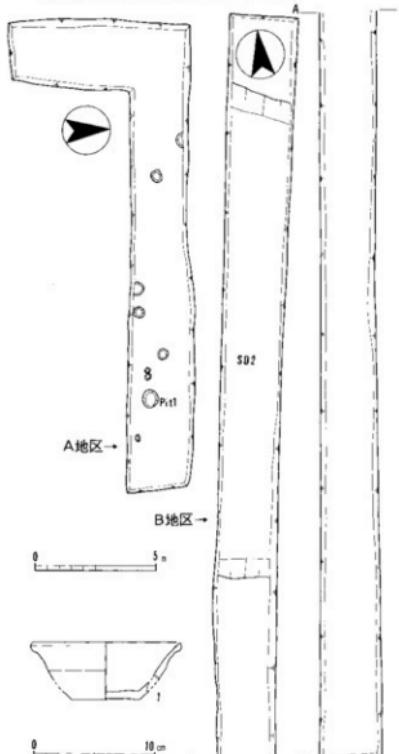
第47図 調査区位置図(1:2,000)

D2)を検出した。遺物は、自然河道の上面から山茶椀(1)や土師器の細片が出土した。山茶椀(1)は推定口径約12cm、底径7.6cm、推定高約5cmで、体部は直線的で、口縁部は外反し、端部外面に面をもつ。藤澤編年の第IV段階第8型式に比定でき、13世紀後葉のものである。出土遺物は少量であったが、付近に集落が存在した可能性がある。(石川隆郎)

[註]

①・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1983年

・藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館 1983年



第48図 遺構平面図(1:200)、出土遺物実測図(1:4)

### 3. 安芸郡美里村 大洞遺跡 風呂ノ谷遺跡 細野遺跡

美里村大字北長野の細野地区は、雲出川の支流、長野川上流左岸に位置する。南向きの谷が、周囲の山の崩壊した土砂に埋められてできた緩斜面の中腹から裾の細野の集落にかけて、北から大洞遺跡(1)、風呂ノ谷遺跡(2)、細野遺跡(3)がある。約2km西方の山上には長野氏城(4)があり、また集落の東に隣接して長野氏の西の城(5)、中の城(6)、東の城(7)がある。

#### 大洞遺跡

A地区250m<sup>2</sup>、B地区250m<sup>2</sup>について調査をおこなつた。A、B地区ともに遺構は全く認められなかった。



第49図 遺跡位置図 (1:50,000)

(国土地理院・津西郡・1:50,000)

- 1 大洞遺跡 2 風呂ノ谷遺跡 3 細野遺跡 4 長野氏城跡 5 西の城 6 中の城 7 東の城

遺構面は、すでに開墾時に削り取られてしまったものと考えられる。

遺物は、両地区合わせて土師器片5点、山茶碗片1点、施釉陶器片1点で、第50図のA地区出土の土師器皿1点を除いては、細片のため図示しなかった。

土師器皿は口径12.0cm、器高2.4cmで口縁内面を横方向に強くなっている。

色調は浅黄橙色、胎土はやや粗で砂粒を少量含む。



第50図 遺物実測図 (1:4)

東端の水路部分80m<sup>2</sup>について調査をおこなつた。耕作土の下は灰色系の粘質土が厚さ140cm堆積し、その下は礫層であった。遺構は認められず、遺物も内外面に鉄釉を施した陶器の細片1点のみであった。今回の調査は、遺跡の縁辺部であり、遺跡の中心は、西側にあるものと思われる。

#### 細野遺跡

東端の水路部分150m<sup>2</sup>について調査をおこなつたが、遺構、遺物とも認められなかった。今回の調査は、遺跡の縁辺部であり、遺跡の中心は、西側にあるものと思われる。

(高峰 仁)



第51図 遺跡地形図 (1:2,000) 1 大洞遺跡 2 風呂ノ谷遺跡 3 細野遺跡

## 4. 久居市柳原町 下村五間田遺跡

下村五間田遺跡は、久居市柳原町字五間田に所在し、雲出川支流の柳原川中流右岸の自然堤防上（標高43m）に位置する。現況は、茶畑・畠及び荒れ地である。調査は平成5年11月15日に行った。

当遺跡の所在は古くから知られており、有茎尖頭器や繩文時代中期の土器片が採集され、周知の遺跡として登録されている<sup>⑤</sup>。また近年、田村氏によって遺跡探査遺物を新たに紹介もされている。氏は、当遺跡の範囲外においてもサスカイトのフレイクを表探しており、新たな遺跡の存在も示唆されている。

今回の調査は、周知の遺跡の南東約100mの地点で、県営は場整備事業（柳原I地区）に伴う、排水路部分約100mを行った。調査区は、ほぼ東西方向に25m、南北方向約4mを設定した。層位は、耕作土（褐色土）、黄褐色粘質土、褐色粘質土、暗灰色砂レキ（人頭大の河原石混じり）と大きく4層に分けられ、各層とも約20cm程度の堆積である。包含層

と思われる層は存在せず、第4層の暗灰色砂レキ（人頭大の河原石混じり）は、明らかに河川の堆積状態と判断され、柳原川が以前に調査部分に流れていたものと思われる。遺物については、どの層からもほとんど出土せず、わずかに耕作土中より土師器細片を見るにとどまる。以上今回の調査では、遺跡の存在を示す結果は得られなかった。ただ、周知の遺跡の範囲において繩文土器片を表探しており、当遺跡の中心は周知の部分に存在する可能性が高い。

（服部芳人）

### 〔註〕

- ①鈴木敏男「考古学からみた一志郡」『一志郡史』下巻 1956年
- ②久居市教育委員会『久居市史』上巻 1972年
- ③久居市教育委員会『久居市遺跡分布図』1984年 市番号31  
黒番号1898
- ④田村龍一「久居市柳原町下村五間田遺跡採集の繩文土器」『Mie history』vol.5 1993年



第52図 （左）下村五間田遺跡位置図(1:50,000、国土地理院、津高部1:25,000から、遺跡地形図(1:5,000)、第53図 検査区位置図(1:2,000)

1. 下村五間田遺跡
2. 坪ノ奥遺跡(京町以降)
3. 尺ヶ弓遺跡(京町寺院津)
4. 東山遺跡(京町、中世墓地)
5. 宝林寺古墳
6. 向ヶ平遺跡(京町以降)
7. 篠ヶ北遺跡(古墳・京町)
8. 西野広遺跡(京町以降)
9. 湘南谷遺跡(篠ヶ・弥生以降)
10. 茅田遺跡(京町以降)
11. 宝塚内遺跡(京町以降)
12. 宝塚内遺跡(京町以降)
13. 北糀内遺跡(篠ヶ以降)

## 5. 多気郡明和町 鳥墓遺跡

鳥墓遺跡(1)は、玉城町から明和町に連なる低丘陵に位置する。周辺には旧石器時代の遺跡として知られるカリコ遺跡(2)や、大塚古墳(3)、大仏山古墳群(4)、土器焼成坑が多数発見された北野遺跡(5)や水池土器製作遺跡(6)などがあり、遺跡が密集している地域である。また、現在も土器を製作している神宮土器調整所に隣接している。前年度に行った試掘調査により、柱穴や溝、土坑などが確認され、遺跡範囲が広がることが確認された。

今回は、新たに確認された遺跡範囲のうち工事によって削平される排水路部分のみ調査を行った。

幅1.5m、長さ28mの調査区を設定し、西から東に向かって発掘作業を進めた。土層は地表から20~30cmが耕作土、その下は調査区の西半分では明灰色シルト層、東半分では花崗岩質風化礫層で、遺構、遺物ともまったく発見されなかった。遺構は調査区以外の部分にあると考えられる。

(高崎 仁)



第54図 遺跡位置 (1 : 50,000) (国土地理院・松版 1 : 50,000)



第55図 調査区位置図 1 : 2,000 遺跡範囲（破線で囲まれた部分）調査区（編かけ部分）

## 6. 度会郡度会町 向村遺跡

向村遺跡は、宮川の左岸段丘上に立地し、行政的には、度会郡度会町立花に所在している。現況は水田である。

平成5年度の県営ほ場整備事業に伴う事前調査によって若干の遺物が出土し、遺跡が存在する可能性

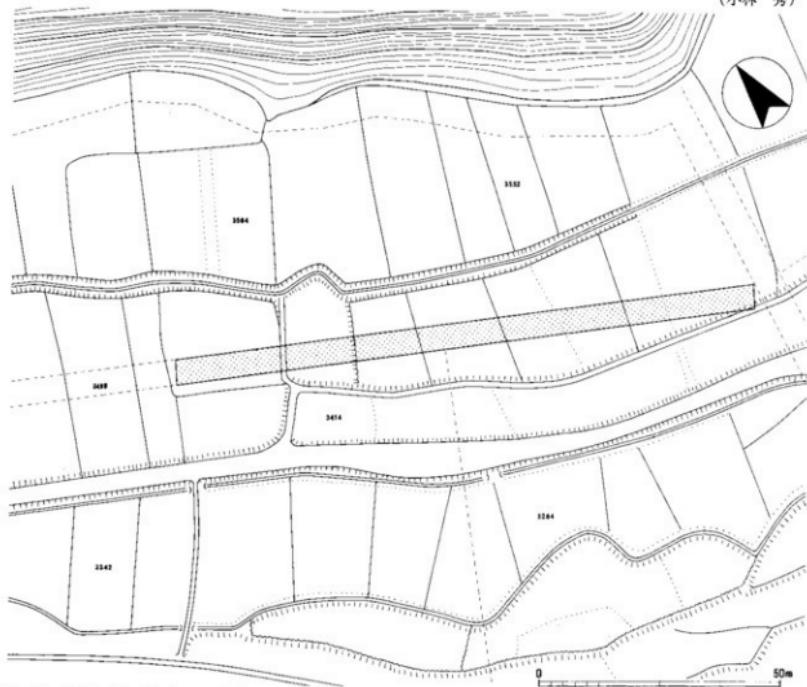


第56図 遺跡位置図（1:50,000）

が確認された。このため、1993年9月13日（月）に発掘調査を実施した。調査区は、用水路部分を中心と幅5m、長さ120mで設定し、最終的な調査面積は600m<sup>2</sup>であった。

耕土下40~50cmで、黄褐色の粘土質土に達する。この層を基盤層として遺構の検出を試みたが、遺構を全く確認することができなかった。遺物は、基盤層上の淡赤褐色土層から土師器と陶器の細片が各1点づつ出土したが、包含層とは認められなかった。当遺跡の位置する立地および土地利用の条件から付近に遺跡が存在した可能性は否定できないものの、向村遺跡に関しては、後世に耕作化された際に削平されたものと判断される。

（小林 秀）



第57図 調査区位置図（1:1,000）

## 7. 度会郡度会町 城ノ前遺跡

### (1) 位置と環境

城ノ前遺跡（1）は、度会郡度会町和井野の一之瀬川右岸の段丘化した平坦地に位置する。一之瀬川そのものは現在、調査地周辺の平坦面より6m以上の比高差をもって北流し、同町下久具付近で宮川と合流する。調査地の西方には、1m前後の比高差をもち、和井野の集落がほぼ南北にのびる。集落の立地する微高地は、調査地よりさらに上位の段丘面に相当するものと思われる。

調査地は、県営は場整備事業（一之瀬地区）に伴い、平成3年度に試掘調査を実施したところ、中世遺物を含む包含層を検出し、付近に遺跡が存在することが予想された。

しかし、事業地内の試掘箇所では、明瞭な遺構を確認することができず、遺物量もごく微量であると考えられたため、工事には直接支障がないものと判断され、最近に至るまで自衛隊のヘリポートととして利用されていた水田中の約90m<sup>2</sup>ほどの盛土地について、事前に立会い調査をおこなった。

遺跡周辺の一之瀬川流域には、今までのところ古代にまで遡る遺跡は確認されておらず、中世以降、一之瀬城跡（2）や青木山城跡（3）などの中世城館や、「一字一石塔」銘のある石塔が残る日部経塚（5）が所在する。また、一之瀬城跡と一之瀬川とに挟まれた一帯は、御所裏遺跡（4）が所在し、平成2年度に実施した立会い調査では、土坑3基等が検出された。さらに一之瀬川を遡った同町日向地内には、番場城跡や小原経塚が知られている。

調査地周辺が、「城之前」の字名をもつのは、一之瀬川を挟んで対岸に、一之瀬城跡が位置していることに由来するとみられるが、一之瀬城跡は、南朝の宗良親王が一時在城したとの伝承があり、一之瀬神社付近に土塁や堀が残存している。

また、一之瀬城跡西方の山地から派生する痩せた尾根に所在する青木山城跡は、尾根の最高所とみられる部分に平坦地を設け、土橋および石段で尾根前方の現集落とつながり、逆に後方の尾根の数箇所を掘切で切断している。



第58図 城ノ前遺跡周辺遺跡分布図（1：50,000）【国土地理院発行1：25,000「抽出」を一部改変】

## (2) 遺構

調査地は、水田中に長辺14m、短辺8.5mほどの橢円形状の盛土として残存していた。一部には岩盤が露出する箇所がみられたため、古墳等の可能性はないものと判断し、盛土のほぼ中央付近を南北2m、東西4mの範囲にわたって重機による断ち割りを実施した。

その結果、表土下に大甕を多く含む淡茶灰色土層があり、これが盛土を構成する主な土層となっており、以下は岩盤に達する。

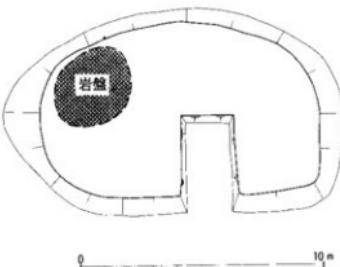
この淡茶灰色土層には、中世の遺物をわずかに混入させているが、現代に至るまでのものがみられ、盛土の構築時期については現代にまで下るものと思われる。

## (3) 遺物

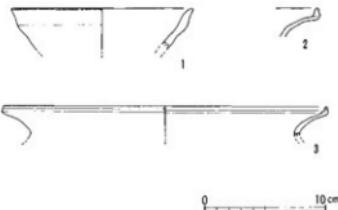
出土した遺物は、土師器鍋・山茶碗・天目茶碗・壺などで、すべて盛土中からである。

陶器壺（1） いわゆる瀬戸美濃系の壺で、内外面に黄灰色の釉をかける。細かな貫入が認められる。

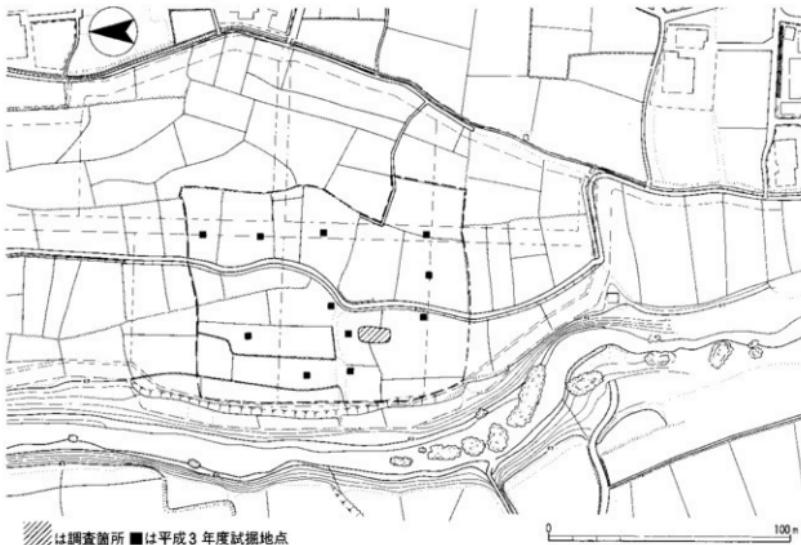
土師器鍋（2・3） 口縁部が大きく外反し、直上に立ち上がる端部がつく。（2）は端部を貼りつ



第59図 城ノ前遺跡調査地略図 (1:200) [左が北にあたる]



第60図 出土遺物実測図 (1:4)



第61図 城ノ前遺跡位置図 (1:2,000)

けるのに対し、(3)は、内側に折り返して強くナデつけるといった違いをみせる。

出土した遺物は、いずれも細片ではあるが、概ね16世紀を前後する時期のものと思われる。

#### (4)まとめ

今回の調査では、盛土の高まりはみられたものの、時期的には新しく、古墳等の墳墓や塚などとは考えられないものである。また、盛土中から出土した遺物も、本来盛土の構築時期を示すものではない。

調査地の周辺についても、試掘結果から遺構ある

いは良好な遺物包含層が認められず、遺跡の縁辺部に位置するものと思われる。しかし、一之瀬川の対岸には、良好な中世城館も存在することから、中世を中心とした遺跡が、付近に広がっている可能性は大きい。

(竹内 英昭)

#### 註

- ① 小林秀「御所裏遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域歴文化財調査報告－第1分冊－』 三重県埋蔵文化財センター  
1991年

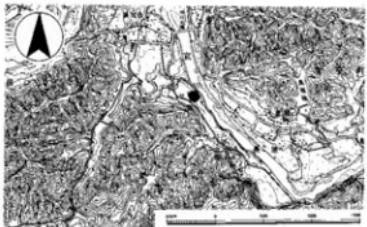


城ノ前遺跡調査地全景（南から）

## 8. 度会郡度会町 山崎館跡

山崎館跡<sup>①</sup>は度会郡度会町立花字山崎に所在する。現況は水田及び畑地である。館跡と想定した平坦な台地とその北と南にある空堀状の地形からなる。台地は東西約70m、南北約50mあり、北側の空堀は幅5m、深さ3m、南側は幅20m、深さ8mで、ともに宮川へ続いている。東西約110m、南北約100mが遺跡範囲となる。

調査期日は平成5年8月23日である。台地上に十字に試掘溝を、南側の空堀に3本の試掘溝を設定した。試掘溝の幅は1.5m、長さは総計130mで、面積は195m<sup>2</sup>である。



第63図 遺跡位置図（1：50,000）



第64図 遺跡地形図（1：5,000）

台地上の試掘溝では、遺構、整地層、遺物包含層ともみられなかった。南側の空堀と想定した3本の試掘溝からは、自然河道の肩を確認した。遺物は、時期不明の土師器の細片が出土したのみである。

以上の結果から、自然地形と判断したが、台地部分については開墾の際に削平を受けた可能性もある。

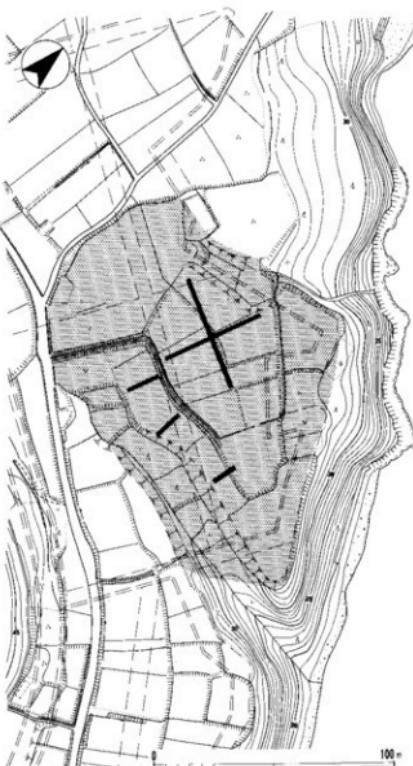
（石川隆郎）

〔註〕

① 館跡の概況については、下記の文献にも記載されている。

・三重県教育委員会『三重の中世城館』三重県教育出版会

1977年



第65図 遺跡区位置図（1：2,000）

---

三重県埋蔵文化財調査報告116-1

六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡  
高塚宅跡・東川遺跡

(付属) 平成5年度農業基盤整備事業地域立会調査遺跡

1994(平成6)年3月

編集行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 東海印刷株式会社

---

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。